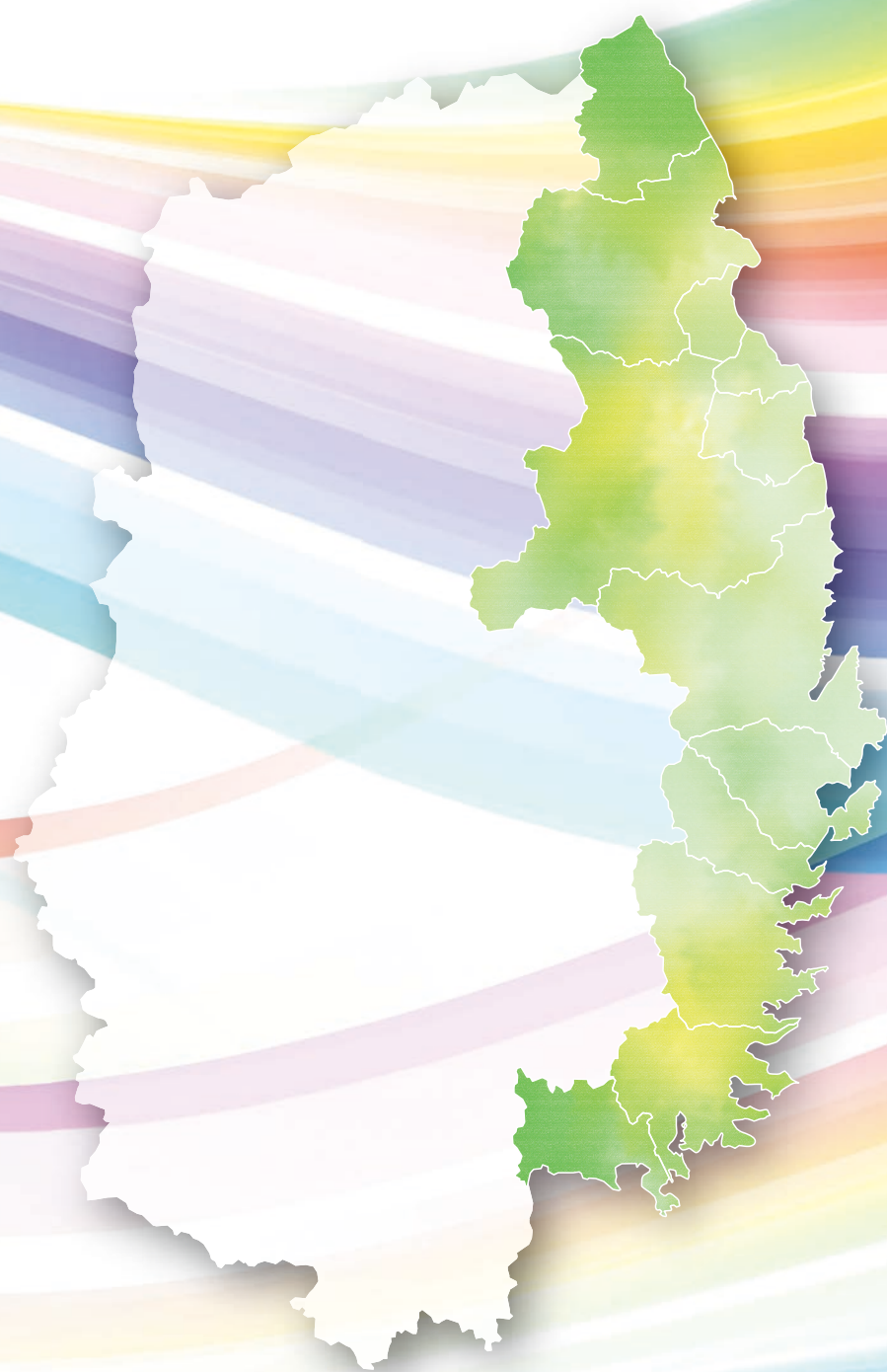


東日本大震災津波 応援職員活動の記録

～ 応援職員と歩んだ10年～



岩手県知事 達増拓也



東日本大震災津波の発生から 10 年の月日が経ちました。

全国から復旧・復興への多大な御支援や御協力をいただいていることに心から感謝申し上げます。

また、被災市町村において復興事業の推進に御尽力いただいた応援職員の皆様、大切な職員の派遣を御決断いただいた全国の自治体の皆様、全国的な派遣スキームの確立と運営に御尽力いただいた総務省、復興庁、全国市長会、全国町村会など関係団体の皆様に、厚く御礼申し上げます。

東日本大震災津波により未曾有の被害を受けた被災市町村では、前例のない規模の復興事業を推進していくため、自治体における行政経験や専門的な知識・経験を有する多くの人材が必要でした。

県では県職員や任期付職員を派遣し、被災市町村では任期付職員の採用やOB職員の再任用などを行いましたが、必要な人材を十分に確保することが難しく、県内及び全国の自治体から派遣いただいた応援職員の皆様の御尽力は、大きな復興の力となりました。

現在、被災市町村では、復興まちづくりの面整備と災害公営住宅の整備が完了したほか、海岸保全施設の 8 割が完成し、にぎわいの拠点となる商業施設の開業など被災事業所の再開も進んでいます。

また、大震災津波以降も度重なる被害を受

けた三陸鉄道は、沿岸部を縦貫する「三陸鉄道リアス線」に生まれ変わり、三陸沿岸自動車道を始めとする復興道路の全線開通も間近となっています。

さらに、震災津波学習拠点「東日本大震災津波伝承館（いわてTSUNAMIメモリアル）」が開館し、教訓の伝承や復興の姿を国内のみならず、広く世界に発信しています。

岩手の復興は、応援職員なくしては成し遂げられませんでした。応援職員の皆様には、それぞれの専門分野において知識・経験を発揮し、被災市町村の職員と一丸となって、復興への歩みを力強く進める原動力となっていただきました。

本誌は、応援職員や派遣元自治体の皆様の活動を記録するとともに、県における派遣要請などの取組をまとめたものであり、作成に当たっては多くの皆様からメッセージをお寄せいただきました。

これまで御支援や御協力をいただいた皆様に重ねて感謝申し上げますとともに、本誌が、全国の自治体におきまして、今後の災害へ対応する際の参考となれば幸いです。

今後も、これまでの復興の取組を引き継ぎ、三陸のより良い復興に総力を挙げて取り組んでまいりますので、引き続き御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和 3 年 3 月 岩手県知事 達増拓也

○ 作成の目的

岩手県では、これまで東日本大震災津波からの復興に向け、国内外から多くの御支援をいただきながら、県民が一丸となり復旧・復興に取り組んできました。

震災から10年が経過し、国が定める「第1期復興・創生期間」が終了するに当たり、復旧・復興を御支援いただいた応援職員や、市町村をはじめとする関係団体の皆様に対

し感謝の意を表すとともに、現場で業務に携わった皆様の声を記録し継承していくため、この冊子を取りまとめました。

関係者の皆様には、応援職員の記録として、また、全国各地で大規模自然災害が発生する中、全国の自治体において参考としていただければ幸いです。

○ 構成

- ・『第1章 自治体間の水平連携 ～全国からの応援職員派遣～』では、全国の自治体等から派遣いただいた応援職員の皆様の活動や、県が行った派遣調整やメンタルヘルスケア等の取組を掲載しています。
- ・『第2章 復興の現場から ～仲間となった応援職員の思い～』では、被災自治体ごとに、市町村長メッセージと、応援職員や派遣元自治体の皆様からのメッセージを掲載しています。
- ・『資料』では、被災市町村の概要や、復興事業により整備された社会資本主要8分野及び被災市町村ごとの応援職員の状況等を掲載しています。
- ・本書は、令和2（2020）年度に編集作業を進め、令和3（2021）年3月に発行しました。

目次

はじめに

岩手県知事 達増拓也 ————— 01

本書について ————— 02

■ 第1章 自治体間の水平連携 ～全国からの応援職員派遣～ ————— 05

1 東日本大震災津波の発生 ————— 06

2 水平連携の展開 ————— 07

3 水平連携の更なる拡大と本格的な復興の推進 ————— 08

4 全力で応援していただくために ————— 12

5 いのちを守り 海と大地と共に生きる ふるさと岩手・三陸の創造 ————— 14

■ 第2章 復興の現場から ～仲間となった応援職員の思い～ ————— 15

第1節/陸前高田市 ————— 16

第2節/大船渡市 ————— 23

第3節/釜石市 ————— 30

第4節/大槌町 ————— 37

第5節/山田町 ————— 44

第6節/宮古市 ————— 51

第7節/岩泉町 ————— 58

第8節/田野畑村 ————— 62

第9節/野田村 ————— 67

第10節/久慈市 ————— 71

第11節/普代村 ————— 74

第12節/洋野町 ————— 75

■ 資料 ————— 77

1 被災市町村の概要 ————— 78

2 復興事業の概要 ————— 90

3 応援職員派遣の状況 ————— 93

第1章

自治体間の水平連携 ～全国からの 応援職員派遣～

- 1 東日本大震災津波の発生
- 2 水平連携の展開
- 3 水平連携の更なる拡大と本格的な復興の推進
- 4 全力で応援していただくために
- 5 いのちを守り 海と大地と共に生きる
ふるさと岩手・三陸の創造

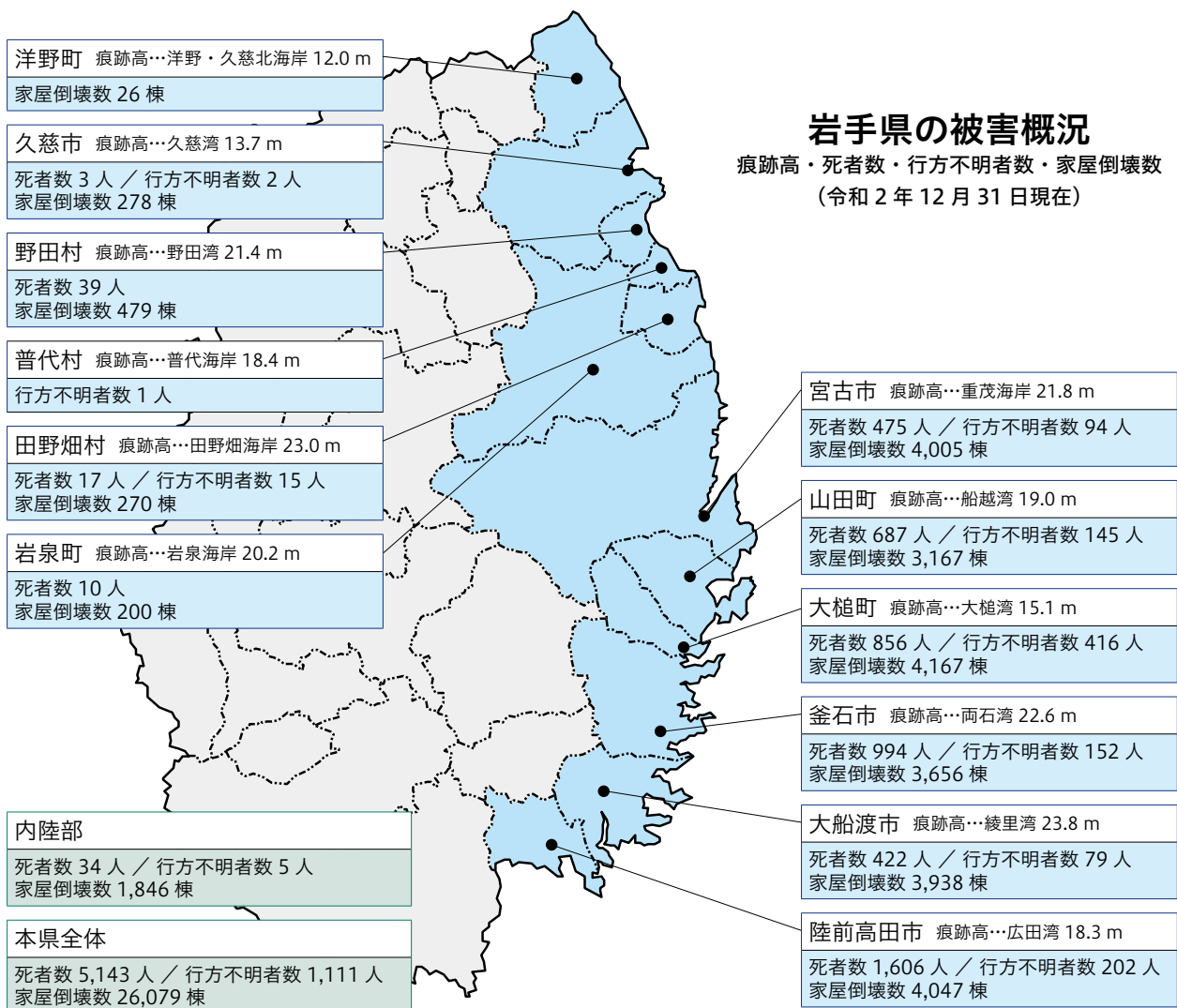
平成 23 年 3 月 11 日（金）14 時 46 分頃。三陸沖を震源とする巨大地震が発生し、大きな揺れと大津波が襲い、岩手県は沿岸地域を中心に甚大な被害を受けました。

東日本大震災津波の概況（岩手県災害対策本部調べ）

名 称	東日本大震災津波 ※地震による震災の名称について、政府は「東日本大震災」としていますが、岩手県では「東日本大震災津波」と表記することとしています。
震 央 地	三陸沖・牡鹿半島の東南東約 130km 付近 (北緯 38° 06.2' / 東経 142° 51.6')
震 源 の 深 さ・規 模	24km・マグニチュード 9.0 (モーメント・マグニチュード)
本 県 の 最 大 震 度	震度 6 弱：大船渡市、釜石市、滝沢村（現滝沢市）、矢巾町、花巻市、一関市、奥州市、藤沢町（現一関市）
津 波 の 最 大 波	[宮 古] 11 日 15 時 26 分 8.5 m 以上 [釜 石] 11 日 15 時 21 分 4.2 m 以上 [大船渡] 11 日 15 時 18 分 8.0 m 以上 [久慈港] 8.6 m (推計値)



大船渡市の被災状況 (H23.3)
【出典：いわて震災津波アーカイブ/
提供者：大船渡地区消防組合消防本部】



※痕跡高は、堤防付近での測定値（「岩手県沿岸における海岸堤防高さの設定について」による）

※死者数は、直接死（岩手県警調べ）及び関連死（岩手県復興局調べ）

※家屋倒壊数は、全壊及び半壊数。

2 > 水平連携の展開

未曾有の大規模災害を前に、全国の自治体で応援職員派遣を決断してくださいました。

東日本大震災津波で甚大な被害を受けた市町村では、庁舎が損壊するほどの被害にもかかわらず、職員が被災者の生活や安全の確保のため奮闘していました。

被災市町村を支援するため、県内では県・県市長会・県町村会・内陸市町村が一体となって応援職員の派遣を開始し、また、全国の自治体の皆様には、要請を待つことなく応援職員の派遣や物資の提供など様々な御支援を行っていただき、これまでにない自治体間の大規模な水平連携が広がりました。

○避難、人命救助、そして避難者の安全の確保

地震発生直後の14時49分、気象庁は岩手県に大津波警報を発表しました。予想される津波の高さは当初「3m」でしたが、その後「6m」、さらに「10m以上」と引き上げられていきました。

しかし、その頃には県内全域が停電となり、住民はその発表をテレビ等で十分に確認できない状況でした。

沿岸市町村では大津波が迫る中、防災無線や消防車等から住民に対して懸命に避難を呼びかけ続けました。

大津波に襲われた被災市町村では、損壊した建物等が「がれき」となり、まち全体を覆いました。

被災市町村では、再び津波が襲来するかもしれないという極限状態の中、消防団や警察等と協力し、生存者の救助に当たりました。

県は、生存者の捜索や救助活動のため、自衛隊や緊急消防援助隊等に派遣要請を行いました。

被災市町村では、生活の場所を失った被災者の避難場所として、学校や集会所等に多くの避難所を設け、県内では最大5万4千人を超える方々が避難しました。

避難所に避難した方々は、着の身着のまま津波か

ら逃れてきたことから、水や食糧、衣服や毛布をはじめとする生活物資、医薬品などを早急に確保する必要がありました。

県では、滝沢村（現滝沢市）の岩手産業文化センター「アピオ」を支援物資の集積・搬送拠点として、水、食糧や生活物資等の確保と避難所への搬送に全力を注ぎました。

被災市町村の職員の中には、自らも被災し、自宅や家族を失った職員もいましたが、昼夜を問わず避難所の運営や支援物資の配布などに当たりました。



宮古市田老地区（H23.3）
【出典：いわて震災津波アーカイブ/
提供者：宮古市】



釜石市内の避難所（市民体育館）（H23.4）【出典：いわて震災津波アーカイブ/
提供者：釜石市】

○自治体同士の連携の輪、つながりの広がり

地方自治の現場が未曾有の被害を受け、自治体職員が犠牲になり、庁舎が損壊するほどの被害に直面しました。

こうした中で、被災市町村では、被災した住民の生活、安全の確保とともに、災害からの復旧に向けた業務に当たりました。

被災した市町村が底力を発揮して、かつてない危機を乗り越えようとする中で、県内外の市区町村や都道府県がその活動を支援する自治体同士の連携の輪、つながりが広がり、今までにないスケールで復旧・復興事業に取り組むこととなりました。

県内の内陸市町村は発災直後から、主体的な判断で被災市町村への支援を開始しました。例えば、遠野市は被災市町村への後方支援拠点として支援物資の集積・搬送等を行い、住田町は隣接する陸前高田市や大船渡市の支援を行いました。

県では、3月15日、県庁において知事から本県内陸部の市町村長に対して、津波被害を受けた市町村への支援を要請しました。

全国の自治体からも多くの御支援をいただき、東京都、静岡県、関西広域連合は、岩手県内にそれぞれ現地対策本部を設置し、物的支援や人的支援など、総合的かつ継続的に御支援いただきました。

また、名古屋市の陸前高田市への「行政丸ごと支援」、震災以前から「製鉄のまち」として友好関係にある北九州市の釜石市への支援など、全国の都道府県・市区町村などから多くの御支援をいただきました。



陸前高田市応援職員受入式（H23.5）
【出典：いわて震災津波アーカイブ/提供者：陸前高田市】

震災を機に生まれた全国との「つながり」を育み、新たな力として復興を推進しました。

県内外の自治体による自主的な支援で開始された自治体間の水平連携は、総務省、全国市長会、全国町村会と連携した応援職員の派遣スキームとして確立されました。

被災市町村においては、全国の自治体等の皆様との「つながりの力」を得て「地元の底力」を発揮し、本格的な復興を進めるための「復興の力」の源泉となりました。

○県内からの応援職員派遣

1 市町村からの派遣

被災市町村では、復旧・復興に向け膨大な業務に取り組む必要があり、技術職をはじめとしたマンパワー不足は深刻なものとなりました。そのため、任期付職員など独自に職員を採用するほか、協定の締結などにより協力関係にある県内外の自治体に応援職員派遣を要請し、マンパワー不足を補っていました。

また、県では発災直後から県・県市長会・県町村会・内陸市町村が一体となって被災市町村を支援してきましたが、復興事業の本格化とともに必要なマンパワーも増加していくため、平成26年度から内陸市町村に対して、職員数の1%を目標として応援職員を派遣するよう要請しました。

県内市町村から派遣された応援職員は、令和2年度までに延べ602人となりました。

2 県からの派遣

県は、発災直後の緊急的な業務支援に引き続き、本

格的な中長期派遣として、平成23年5月から陸前高田市と大槌町、平成26年度からは山田町を加えた3市町へ職員を派遣しました。県から派遣された職員は、令和2年度までに延べ197人となりました。

また、平成24年度からは、幅広く人材を募ることを目的として、県が任期付職員を採用して被災市町村へ派遣しており、令和2年度までに延べ699人を派遣しました。

任期付職員の採用に当たっては、東京都の御協力のもと、本県を含む被災3県（宮城県、福島県及び岩手県）合同の任期付職員採用試験合同説明会を東京都庁で開催しました。



被災3県任期付職員採用試験合同説明会
(令和元年度：
東京都庁)

○全国への応援職員派遣要請

1 総務省スキーム等を通じた全国への要請

県内からの派遣を行ってもなお必要な人材については、総務省スキーム等を活用し、県外自治体等に応援職員の派遣を要請しました。

総務省スキームは、総務省が全国市長会・全国町村会を通じて全国の市区町村へ応援職員の派遣を要請するもので、東日本大震災津波以降の大規模な災害でも活用されています。このスキームを通じて被災市町村へ派遣いただいた応援職員は、令和2年度までに延べ695人となりました。

また、復興庁スキームは、復興庁が民間実務経験者や国家公務員OB等を復興庁職員として採用し、被災

市町村へ派遣するものです。このスキームを通して派遣いただいた応援職員は、令和2年度までに延べ127人となりました。

2 全国自治体への直接要請

被災市町村への応援職員派遣は長期化が見込まれたため、全国の自治体に対し、応援職員派遣について理解を求める活動を行いました。

本県を含む被災3県は、平成25年度から3県合同または単独で、全国の自治体の首長等に対し、それまでの御支援に対する御礼と復興の進捗状況を踏まえた応援職員の必要性をお伝えしてきました。



大槌町職員と応援職員【提供者：大槌町】



山田町職員と応援職員【提供者：山田町】

コラム 応援職員への感謝

陸前高田市総務部 総務部長兼総務課長 戸羽 良一 (H23当時:総務課 課長補佐)

○被災当時の状況

平成23年5月より、総務課課長補佐として応援職員の派遣調整を担当しました。発災直後は全般的にマンパワーが不足しており、罹災証明書の発行や義援金の交付など、その日その日乗り切ることによって精一杯でした。

当時の市としての当面の目標は、被災した住民の生活や安全の確保と、応急仮設住宅を建設し避難所を解消することでした。避難所の運営と応急仮設住宅の建設予定地の確保等を進めていくため、保健師や土木技師など、専門的な知識・技術を持った方が特に必要になっていました。

○応援職員の住環境の確保

市の中心部が甚大な被害を受けたことから、当初は応援職員の皆さんの宿舎の確保が困難でした。市職員は市庁舎が被災したため市役所の機能を移転した給食センターに寝泊まりしていましたが、応援職員の皆さんをそのような環境に置くわけにはいきません。近隣市町の皆さんに、県外からの応援職員のための宿舎として、旅館や町営住宅などをお借りできるよう御協力いただきました。

宿舎の確保の次は通勤手段の確保でした。名古屋さんは一関市大東町の旅館を宿舎としていましたが、

そこからマイクロバス2台を運行し、当市まで通勤していただきました。

○応援職員との協働

名古屋市、松阪市、一関市、盛岡市等、県内外の自治体から多くの職員の皆さんに応援していただきました。初めて職員の皆さんにお会いした時は、全国からこんなに応援していただけるのだとうれしく、また、心強く感じました。

震災がれきの処理や公務災害の手続きなど、これほど膨大な事務を行ったことがなかったので、業務経験がある応援職員の皆さんは本当に大きな存在でした。

○応援職員へのメッセージ

当市の職員だけでは復興事業を進めることはできませんでした。応援職員の皆さんは、派遣元自治体に帰任後もたびたび当市を訪問していただいたり、海産物など当市の特産品をお求めいただき息の長い御支援をいただいております。我々以上に当市のことを思っただけ、感謝の言葉しかありません。本当にありがとうございました。



大槌町復興推進課 課長 中野 智洋<写真左> (H23当時:地域整備課工務班 班長兼災害廃棄物対策班 班長) 大槌町復興推進課 区画整理班 班長 平野 正晃<写真右> (H24当時:都市整備課職員)

○被災当時の状況

中野) 当時は町の全てのインフラが被災しており、震災がれきの処理や道路等公共インフラの復旧に当たりました。応援職員の皆さんには5月から対応いただきましたが、それまでの貴重な経験をいかし、スピーディーに対応していただきました。

○応援職員との協働

中野) 平成24年4月から、防災集団移転促進事業や土地区画整理事業を担う都市整備課が新設されました。この課は21人の3班編成で、各班に町職員1人を配置したほかは全て応援職員で組織され、北は北海道から南は沖縄県まで、全国の自治体職員が同じ目標に向かって協働しながら事業を推進しました。

平野) 私はその町職員の一人でした。応援職員の皆さんはとにかく熱い心をお持ちで、震災前の当町の勉強もされ、住民の方々の気持ちに寄り添って仕事をされていました。

また、様々な業務経験をお持ちでしたが、これほど大規模な高台移転は誰もが初めてであり、マニュアルもない中、我々と一緒に手探りで事業を進めていきました。

当初は事業が思うように進まず、早く生活再建を進

めたい住民との板挟みとなり、つらい思いもされたことと思

います。それでも皆さんは何度も現場に足を運び、住民から信頼を得ていき、地元の祭りや家庭の食事に招かれるほど地元へ溶け込んでいきました。

○応援職員へのメッセージ

平野) 皆さんが住民に丁寧に説明している姿を見て、我々は多くを学ばせていただきました。皆さんは派遣元自治体に戻られても、大槌町応援職員の会、関東大槌会など、応援職員のネットワークを作られています。不慣れた土地、厳しい環境の中でも、町職員以上に当町のことを好きになっていただきました。本当にありがとうございました。

中野) 私は応援職員の皆さんが帰任する際には、「必ずまたお会いしましょう」と挨拶します。実際、平成24年度の都市整備課の皆さんをはじめ、応援職員の皆さんとは今でも交流があります。応援職員の皆さんがいたからこそ、復興事業を進めることができました。コロナ禍で今すぐには難しいですが、また必ずお会いしましょう。



参考 復興の段階と応援職員派遣の状況

1.復興の段階

○岩手県東日本大震災津波復興計画

県では、平成 23 (2011) 年 8 月に、「いのちを守り 海と大地と共に生きる ふるさと岩手・三陸の創造」を目指す姿とする「岩手県東日本大震災津波復興計画」を策定し、平成 23 (2011) 年度から平成 30 (2018) 年度までの 8 年間で復興計画期間と位置付け、復興の取組を進めてきました。



○第 1 期：基盤復興期間（平成 23 (2011) 年度から平成 25 (2013) 年度まで）

第 1 期は「基盤復興期間」として、被災地域の復旧・復興の第一歩となる緊急的な取組を重点的に進めるとともに、本格的な復興に向けた復興基盤整備のための各種施策を実施しました。

全国的な応援職員派遣調整のスキームが整備され、応援職員の皆様にはがれきの処理、道路等のインフラの応急復旧、復興まちづくりに向けた計画づくり等を御支援いただきました。



山田町 災害廃棄物の仮置場 (H23.4) 【出典：いわて震災津波アーカイブ/提供者：陸上自衛隊岩手駐屯地】



宮古市 災害廃棄物の選別作業 (H25.1) 【出典：いわて震災津波アーカイブ/提供者：宮古市】

○第 2 期：本格復興期間（平成 26 (2014) 年度から平成 28 (2016) 年度まで）

第 2 期は「本格復興期間」として、復興まちづくりを進めるとともに、被災者の生活の安定と住宅再建、地域産業の再生など、将来にわたって持続可能な地域社会の構築を目指す各種施策を実施しました。

復興事業が本格化する中で、応援職員の皆様には、住宅団地等の集団移転やかさ上げ等の復興まちづくり事業、災害公営住宅等の建設、被災者のこころのケア等を御支援いただきました。



大槌町 県営災害公営住宅上町アパート、町方地区防災集団移転促進事業 (R2.6) 【提供者：大槌町】



釜石市 鶴住居地区土地区画整理事業 (H31.4) 【提供者：釜石市】

○第 3 期：更なる展開への連結期間（平成 29 (2017) 年度から平成 30 (2018) 年度まで）

第 3 期は「更なる展開への連結期間」として、被災者＝復興者一人ひとりの復興を見守り、寄り添った支援を行うとともに、多様な主体の参画や交流、連携により、復興事業の総仕上げを視野に復興の先も見据えた地域振興にも取り組みました。

復興事業が大詰めを迎えつつある中で、応援職員の皆様には宅地の引渡し、家屋新築に係る評価（固定資産評価）、被災者のこころのケア等を御支援いただきました。



陸前高田市 アパッセたかた (H29.4.27 開業)



大船渡市 キャッセン大船渡 (H29.4.29 開業)

○着実に進んだ復興の歩み

これまでの 10 年間で災害廃棄物の処理、被災した漁船や養殖施設の整備等が完了したほか、復興道路や津波防災施設の整備、災害公営住宅の整備、商業施設や水産加工施設の再開等、復興の歩みは着実に進みました。

令和元 (2019) 年度からは、平成 31 年 3 月に策定した県の総合計画「いわて県民計画 (2019 ~ 2028)」において復興推進の基本方向を示し、具体的な取組を進めています。

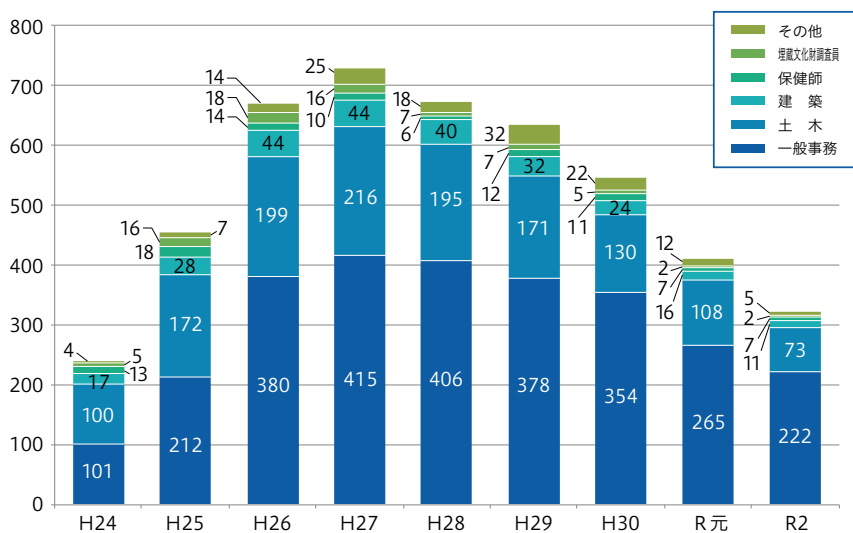
2. 応援職員派遣の状況

県内外の自治体等から被災市町村へ派遣いただいた応援職員（中長期派遣）は、平成27年度の

726人をピークとして、平成24年度から令和2年度までに延べ4,668人となりました。

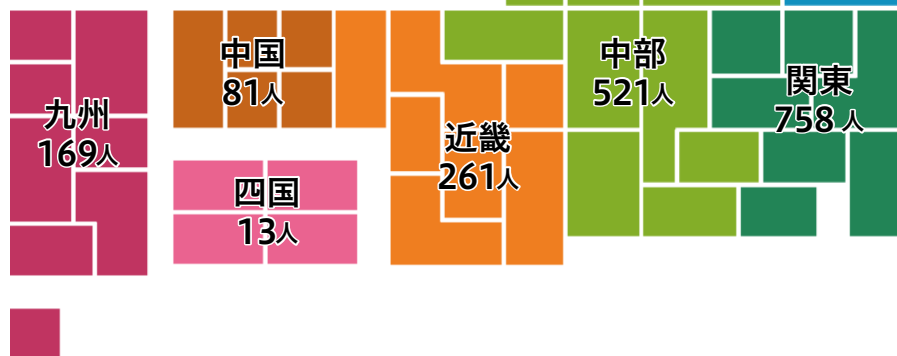
（ふるさと振興部市町村課調べ 各年度の4月1日現在、単位：人）

	H24 (2012)	H25 (2013)	H26 (2014)	H27 (2015)	H28 (2016)	H29 (2017)	H30 (2018)	R元 (2019)	R2 (2020)	合計
一般事務	101	212	380	415	406	378	354	265	222	2,733
うち用地	—	53	86	73	45	49	37	21	13	377
うち税務	—	—	32	34	38	36	36	32	21	229
土木	100	172	199	216	195	171	130	108	73	1,364
建築	17	28	44	44	40	32	24	16	11	256
保健師	13	18	14	10	6	12	11	7	7	98
埋蔵文化財調査員	5	16	18	16	7	7	5	2	2	78
その他	4	7	14	25	18	32	22	12	5	139
受入数	240	453	669	726	672	632	546	410	320	4,668
	第1期 基盤復興期間			第2期 本格復興期間			第3期 更なる展開への連結期間		復興推進プラン (R元<2019>～R4<2022>年度)	
	東日本大震災津波復興計画(H23<2011>～H30<2018>年度)							いわて県民計画長期ビジョン (R元<2019>～R10<2028>年度)		



北海道
52人

東北
(被災3県除き)
80人
岩手 1,528人
宮城
福島



これまでに
本県被災市町村へ
中長期派遣いただいた
応援職員の数
延べ 4,668人

このうち自治体からの
応援職員の数
延べ 3,463人

応援職員の皆様を支えるための取組を県・被災市町村で連携して進めました。

応援職員の皆様は、慣れない土地や職場環境の中で前例のない膨大な復興業務を遂行するため、安心して業務に専念できるよう、心身の健康を管理し維持していただくことが大切です。

県では、被災市町村における日常的なフォローアップに加え、関係機関の御協力を得てメンタルヘルスケア研修会を開催するなど、応援職員の皆様が心身の健康を維持し、全力で応援していただくための体制の構築に努めました。

○フォローアップ面談

県ふるさと振興部職員が被災市町村を訪問し、応援職員の皆様から業務や生活の状況を伺い、改善が必要な場合には被災市町村に対応を求めました。

平成23年度は、多くの方からお話を伺うためにグループでの面談を行っていましたが、被災市町村のフォローアップの体制が充実してきたことなどから、平成27年度からは、希望者に対する個別面談に切り替えました。

面談に当たっては、事前に面談票を記入いただき、職務内容、勤務環境、生活環境等を伺いました（右図参照）。

<フォローアップ面談の内容>

項目	内容
職務内容	職務経験等とのマッチング、業務の質・量、相談相手の有無など
勤務環境	超過勤務の状況、年次有給休暇の取得状況、執務環境など
生活環境	居住環境、通勤手段、食事や睡眠の状況など
その他	心配事、派遣調整等への意見など



H26.6.23 vol.1 表紙 ~発行にあたって~

○相談窓口の開設

フォローアップ面談のほか、随時相談ができるようにするため、平成25年度から県ふるさと振興部に相談窓口を設置しました。

業務遂行や生活環境等に対する課題や悩み、各種要望などを電話と電子メールで受付、派遣先の被災市町村へ改善を求めました。

○情報誌「KAKEHASHI」

平成26年度から、応援職員の皆様の活躍を派遣元自治体へ情報提供することや、応援職員同士のつながりを作るサポートを行うために、情報誌「KAKEHASHI」を発行しました。

一回当たり15～20人程度の応援職員の皆様から、業務や生活の様子、地元の紹介等をしていただきました。

また、紹介した応援職員に対する被災市町村職員からの感謝のメッセージも併せて掲載したほか、派遣元自治体に帰任した派遣経験者の方から、派遣時の思い出や現在の状況を紹介していただいたり、少しでも岩手県のことを知っていただくために、県内各市町村で行われるイベント等の紹介も行いました。

この情報誌は、応援職員と被災市町村、応援職員同士、被災市町村と派遣元自治体、全国自治体と岩手県などの間を取り持つ「KAKEHASHI」となりました。

○メンタルヘルスケア研修会

応援職員の皆様を対象に、メンタルヘルスケアの知識習得や他の応援職員との交流を目的として、平成25年度からメンタルヘルスケア研修会を実施しました。

派遣先での生活や業務に慣れてきた6～7月を中心に、県庁所在地である盛岡市内において、年2～3回開催しました。研修は2日間で、岩手医科大学医学部神経精神科学講座の大塚 耕太郎教授（岩手県こころのケアセンター副センター長）をはじめ、岩手県こころのケアセンターの御協力のもと、実習を交えて実施しました。

令和元年度の研修では、1日目はストレスと健康管理の講義やマインドフルネス呼吸法等の実践を行い、研修終了後には、知事をはじめ県幹部も参加した懇親会を開催し、応援職員の日頃の労をねぎらいました。

2日目は、応援職員同士の交流も深められるよう工夫しながら、メンタルヘルスケアの知識を学んでいただきました。

研修の最後には参加者にアンケートを行い、研修内容のほか、業務全般、職場環境、生活環境等への意見も記入いただきました。この内容を派遣先の被災市町村と情報共有するほか、フォローアップ面談等で重点的にお話を伺うなどの対応を行いました。

なお、会場経費など開催に係る経費は、一般財団法人地域社会ライフプラン協会に御支援いただきました。



岩手医科大学医学部神経精神科学講座 大塚 耕太郎教授



意見交換を行う応援職員の皆様

〈応援職員の皆様からの御意見〉

- ・ストレスや健康について普段は考えることがないので、今回の研修はストレス対応や健康について見直す良い機会となった。
- ・マインドフルネスは今後も活用したいと思った。残り8ヶ月、今回学んだことをいかしていきたい。昨年に引き続き参加したが、昨年とは立場も変わり考える事も増した今、改めて参加することは非常に意義のあることだと思った。
- ・この機会を設けていただき感謝している。大勢の方々が準備をされ、当日もリラックスするためのお茶やお菓子等用意してもらいありがとうございました。リラックス・リフレッシュできたと感じている。
- ・他市町村の方と交流する機会となり、有意義な時間となった。研修中は講義だけでなく、実際にマインドフルネス呼吸法等を体験する時間があり、今後活用できると思った。



日頃の労をねぎらう達増知事

「誰一人として取り残さない」という理念の下、一人ひとりに寄り添いながら、復興を進めていきます。

令和3年3月11日で、東日本大震災津波から10年の月日が経ちました。

県内外の自治体等からの応援職員の皆様の御尽力により、復興は大きく進みました。災害公営住宅は昨年全て完成し、応急仮設住宅の全ての入居者が、3月までに恒久的な住宅に移ることができる見通しとなったほか、復興道路等は順次開通し、県土の縦軸・横軸を構成する高速道路ネットワークの構築が最終段階となっています。

一方で、こころのケアやコミュニティの形成支援、被災者の孤立防止や既往債務を抱えている事業者の大幅な減収に対する支援、漁獲量の減少への対策など、被災地の実情を踏まえた切れ目のない取組を進めていかなければなりません。

これからも、「誰一人として取り残さない」という理念の下、一人一人に寄り添いながら、復興を進めていきます。

【高田松原津波復興祈念公園】

東日本大震災津波の犠牲者への追悼と鎮魂の思い、震災の記憶と教訓を継承するとともに、復興への強い意志を国内外に向け発信するために、国、県及び陸前高田市が連携して整備しました。

中核的施設として、国営追悼・祈念施設、道の駅高田松原及び東日本大震災津波伝承館が令和元年9月にオープンしました。



【三陸鉄道リアス線】

東日本大震災津波により甚大な被害を受け、全線が不通となった三陸鉄道は、平成26年4月に南・北リアス線の全線で運転を再開しました。

その後、旧JR山田線（宮古 - 釜石間）が平成31年3月に三陸鉄道へ経営移管され、国内の第三セクター鉄道としては最長となる163km（盛 - 久慈間）が新たに三陸鉄道リアス線として生まれ変わりました。

令和元年東日本台風で再び被害を受けましたが、令和2年3月、全線で運転を再開しました。

【ラグビーワールドカップ2019日本大会】

令和元年9月25日、東日本大震災津波の被災地で唯一の試合会場となった釜石鵜住居復興スタジアムにおいて、ラグビーワールドカップ2019日本大会「フィジー対ウルグアイ」戦が行われました。

東日本大震災津波の被災地を代表して、世界中からいただいた復興支援への感謝と、復興に取り組む姿を国内外に力強く発信する機会となりました。

試合の前に、地元の子供達によりスタジアムに掲げられた旗には「Thank you for your support during the 3.11 Earthquake and Tsunami（東日本大震災津波の際の皆様の御支援に感謝します）」と記されています。



第2章

復興の現場から ～仲間となった 応援職員の思い～

第1節 陸前高田市

第2節 大船渡市

第3節 釜石市

第4節 大槌町

第5節 山田町

第6節 宮古市

第7節 岩泉町

第8節 田野畑村

第9節 野田村

第10節 久慈市

第11節 普代村

第12節 洋野町

市町村長メッセージ

陸前高田市長 戸羽 太



東日本大震災津波の襲来から10年を迎えました。震災で犠牲となられた方々に対し、改めて哀悼の誠を捧げます。

これまで本市には、全国各地から55団体、505人もの応援職員に来ていただき、復興事業の推進に当たり、非常に大きな役割を担っていただいております。岩手県内において最も被害が大きく、また、多くの市職員を失った本市が円滑に復興事業を進めることができたのは、ひとえに応援職員の皆様の御尽力によるところが大きく、改めて派遣元自治体及び団体様、そして応援職員の皆様一人一人に対し、心より御礼を申し上げます。

思い返せば、震災直後は十分な執務環境を用意することが叶わず、また、宿泊施設もなかったことから、ユニットハウスで業務を執り行い、片道1時間弱かかる隣の宿舎としていた旅館等から毎日出勤されながら、懸命に仕事に励んでいただきました。そのような応援職員の皆様の仕事に取り組む姿勢が、本市職員に刺激を与えたことは言うまでもなく、復興事業の推進に向けて、組織一丸となって取り組むことができていると考えているところです。

さて、本市の復興事業も終盤に差し掛かり、一昨

年は、新たな交流施設となる高田松原津波復興祈念公園及び道の駅高田松原が、昨年は、文化・スポーツ事業の中核となる市民文化会館（奇跡の一本松ホール）や高田松原運動公園など、多くの市民が待ち望んだ施設が完成し、市内の方々の利用はもとより、市外の方々にも多くお越しいただき、新たな賑わいと交流が生まれております。

また、平成31年3月には、本市のまちづくりの指針となる「まちづくり総合計画」を策定したところであり、その基本理念である『ノーマライゼーションという言葉のいらないまち』が、「誰一人取り残さない」持続可能な社会を目指すSDGsの理念に合致したことから、内閣府より「SDGs未来都市」に選定されたところです。今後におきましても、一日も早い復興事業の完遂に向けて、応援職員の皆様とともに、誰もが安心して暮らせる共生社会のまちづくりを進めてまいります。

結びに、派遣元自治体及び団体様との末永い交流と、応援職員の皆様のご健勝並びにご多幸を祈念するとともに、「新しいまち」でまたお会いできることをご期待申し上げまして、ご挨拶といたします。

復興の状況



中心市街地の街並み（商業・図書館複合施設 アバッセタカタ）



奇跡の一本松ホール（市民文化会館）



高田松原津波復興祈念公園・道の駅高田松原



高田松原運動公園

ひだか きつこ 日高 橘子

災害対策本部があった
給食センターにて
(中央正面を向いているのが日高さん)



- 派遣元：愛知県名古屋市 ■ 派遣期間：H23.4.22～H24.3.31
- 派遣先所属：民生部健康推進課
- 派遣先の主な担当業務：被災者の健康管理、保健指導

名古屋市“丸ごと支援”の第1陣として、陸前高田市へ派遣されました。まだその頃は、高台にある鳴石地区の給食センターに災害対策本部とプレハブの仮庁舎があり、市内全体も断水しており、被災者の方の生活が非常に不安定な時期でした。全国から14の保健支援チームやこころのケアチームなど多くの支援者の方々が集まって、第1回健康調査（ローラー作成）を実施している頃です。

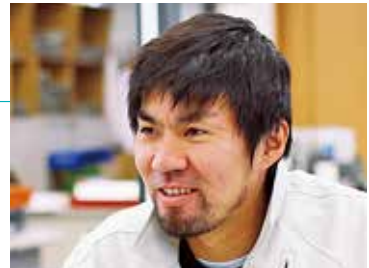
私たちが早速健康調査に参加し、被災者の方の健康課題を把握することに努めました。毎日保健支援チームでミーティングを行い、チーム全体で情報共有するシステムができ上がっており、各チームが把握した新たな健康課題を把握し、それにどのように対応していくかを話し合うシステムとなっていました。医療・福祉分野の支援チームとの情報共有会議として、3月27日から地域包括ケア会議

(現在は未来図会議)が2週間に1回(7月からは月1回)開催され、市全体の保健福祉医療サービスの復興をどのようにしていくべきか検討していました。コーディネーター役として、ヘルスプロモーション協会や日本赤十字秋田看護大学から派遣された医師が市当局や各部門の調整役として奔走してくれていました。こうした被災地と支援者間の情報共有システム中での連携協働が、陸前高田市の保健師、社会福祉協議会、NPOの方々の協働による応急仮設住宅での「お茶っこサロン」や介護予防事業に成長しました。

こうした体験は、名古屋市に帰任してからの私の宝となり、地域での様々な団体との連携・協働事業に役立っています。今後も被災地で職員の皆さんがこの宝を大切にして、市民の皆さんとともに元気なまちづくりに取り組んでいただきたいと思います。

ばんの たけお 阪野 武郎

- 派遣元：愛知県名古屋市 ■ 派遣期間：H23.5.11～H24.3.31
- 派遣先所属：復興対策局
- 派遣先の主な担当業務：復興計画策定事務



平成23年5月に応援職員として赴任した当時、岩手県はもとより東北地方に足を踏み入れたのは初めてであり、右も左も分からない状態でしたが、名古屋市の場合、行政全体をパッケージでサポートする“丸ごと支援”の枠組みで派遣が行われており、職員のサポート体制が充実していたことから、受入側である陸前高田市に多くを求める必要がありませんでした。

大震災以降、被災地において受入体制の構築を求める声がありますが、あれだけの被害を受けた被災地側で対応することは限界があると感じており、応援側と受援側の調整等は中間役として県が前面に立って仕切ることが望ましいと思います。

どんな場所でもどんな内容でも懸命に取り組む覚悟で臨んだので、被災地での業務内容や職場環境、生活環境などの心配は全くありませんでしたが、唯一心配していたのが現地での人間関係でした。長期にわたり一緒に働くことから、職場での関係構築は最重要事項

と考えており、同僚や家族を失った市職員とどのように接すれば良いのか答えが見つからないまま派遣の日を迎えました。そんな心配を全くもって吹き飛ばしてくれたのは、同じタイミングで派遣された県職員の存在でした。着任初日から持ち前の明るさと社交性で積極的に市職員と交流してくれたおかげで、それまで悩んでいたことが馬鹿らしく思えるほど、現地職員の中に溶け込むことができました。

長期の派遣になる場合、現地での人間関係の構築はとても重要で、そんな状況下では中間的な存在がいることはとても有効であり、今回の場合は県職員でしたが、派遣先自治体職員と応援職員をつないでくれるサポート役がいることが望ましいと思います。

最後に、名古屋市をはじめ、復興を通じて様々な自治体や団体、企業と深い絆ができた陸前高田市は多くの可能性を有しており、更なる発展を期待しています。そんな陸前高田市の復興に微力ながら携わることができたのは私の誇りです。

第1節 陸前高田市

2 応援職員から

きたじま しんや
北島 慎也

- 派遣元：福岡県福岡市 ■ 派遣期間：H24.4.1～H25.3.31
- 派遣先所属：建設部都市計画課
- 派遣先の主な担当業務：復興区画整理



平成24年度に派遣され、その当時の被災状況下でも温かく迎え入れていただき、特に不満などはありませんでしたが、市町村での受入体制の構築は非常に難しいと思われるので、県単位での取りまとめ及び調整が効果的ではないかと感じました。

また、文房具や長靴など必要となりそうな物品を派遣先自治体が購入していたことから、負担になっているのではないかと感じたため、派遣元自治体の体制構築が必要と思われました。

福岡市から派遣された職員は、着任2日前の夜に陸前高田市に到着しましたが、夜は被災した市街地に街灯などもなく、状況が全く把握できずに翌朝被災した市街地をみんなで確認して唖然としたのを覚えています。その時、どのような内容の仕事をするか知らされていませんでしたが、改めて復興の力に

なれるよう頑張っていこうと語り合いました。

着任当日、配属された部署は都市計画課の復興区画整理を担当する係で、陸前高田市の職員3人と様々な自治体からの応援職員4人で、みんな違う方言を使いながら仕事を始めました。業務内容は、被災前に実施していた区画整理業務の完了処理から始まり、復興区画整理事業の立ち上げ、住民説明会、用地買収交渉など様々な業務に従事し、無事に復興へのスタートを切ることができたと感じています。

復興を通じて様々な自治体や団体、企業と深い絆ができ、今では毎年復興状況の確認や当時お世話になった方々の近況確認に陸前高田市を訪問しています。

今後も陸前高田市の魅力を伝え、更なる発展に少しでも寄与していきたいと思えます。

こが りゅういちろう
古賀 龍一郎

- 派遣元：佐賀県武雄市 ■ 派遣期間：H24.4.1～H25.9.30
- 派遣先所属：企画部まちづくり戦略室
- 派遣先の主な担当業務：公式フェイスブック、公式ツイッター、自治体通販サイトの立ち上げ



発災1年後の平成24年3月、赴任3週間前に突然市長から呼ばれ、「復興支援にぜひあなたに行ってほしい」と告げられた記憶は今も鮮明に覚えています。東日本大震災発災から何度か被災地に市長とともに足を運ばせていただいたこともあり、少しでも力になればとの思いで「行かせてください」と答えました。

私に課せられた業務は「被災地からの情報発信」。陸前高田市役所企画部に配属と同時に課せられたミッションに取り掛かりました。正直、当時の現場では前例もなく、一般的な職員の業務としては受け入れがたいやり方などで、少なからず批判の対象になることもあったかと思えます。しかし、そのたびに市長からは「気にせず思いっきりやってください」と声を掛けていただき、この言葉を胸に陸前高田市公式フェイスブックページ、公式ツイッターの立ち上げ、自治体通販サイトを立ち上げていきました。同時に、少しでも被災地の日常を全国の方に知ってもらうために、毎日

のように市内を動き回り、フェイスブックなどに公開していきました。当初1年の予定だった派遣を半年延長し、数多くのミッションに参加させていただいたことに大変感謝しております。

業務外では、職員の皆さんに温かく迎えていただき、充実した毎日を送れたと思います。休日でも食事やスキーなどに誘っていただき、九州ではできない経験も数多くさせていただきました。

ここで結ばれた絆は、派遣から10年になる今も強く結ばれており、令和元年8月九州北部豪雨の際には、陸前高田市からもいち早く職員の皆様からご支援やお手伝いをいただき、大変感謝しております。

私が東北で過ごした期間は1年半で、どれだけのお手伝いできたか不安ですが、私のこれまでの人生の中で最も濃密で忘れることのできない貴重な経験をさせていただいた期間だった事には間違いありません。戸羽市長はじめ市職員の皆様、陸前高田市の皆様本当にありがとうございました。

ますやま ひろたけ
増山 博文



- 派遣元：神奈川県大和市 ■ 派遣期間：H25.10.1～H28.3.31、H29.4.1～H30.3.31
- 派遣先所属：復興局市街地整備課
- 派遣先の主な担当業務：被災市街地復興土地区画整理事業

神奈川県を中心に位置する大和市は、大木哲市長のもと、発災直後から様々な被災地支援を実施してきました。そして、早い段階から陸前高田市への職員派遣を打ち出し、陸前高田市へ派遣された職員の延べ人数は、政令指定都市を除いた県外自治体の中で第1位となるほど密接に関わっています。

私は、発災直後から、週末に陸前高田市や石巻市などで被災した子供達のこころのケアなどを行うボランティア活動に参加していましたが、いつも帰りの時間が近付くと、子供達から「もう帰っちゃうの？今度はいつ来てくれるの？」と聞かれるたびに、もっと継続的な支援をしたいと考えていました。ですので、大和市で派遣の募集を開始したと知ったときは渡りに船とばかりに手を挙げました。

その後、通算4年間にわたって被災市街地復興土地区画整理事業に従事しました。赴任当初は、まだがれきの中に毀損建物が多数残り、側溝もなく、アスファ

ルトも剥がれたような状況でした。そんなデコボコ道を歩きながら、「一日も早く住民の笑顔を見よう！」と市職員と声を掛け合い、復興計画図を握りしめて被災された方々のお宅を一軒ずつ回り、事業説明や用地買収のお願いなどに奔走した日々は、まるで昨日のこのように思い出されます。

派遣中、岩手県や陸前高田市の職員の皆さんは、公私ともに、まるで兄弟のように接して下さり、仕事以外でも、自宅で振る舞っていただいた三陸の海の幸の料理、一緒に行った温泉や釣り、屋内球技やスキーなどの楽しい思い出は、私にとって一生の宝物です。

今でも、仕事で行き詰まったときなど、ふと空を見上げれば、美しかったあの陸前高田市の星空や氷上山、一本松が脳裏に浮かび、心が落ち着きます。いつかまた帰りたいたいと思える第二の故郷ができたことは、自分の人生にとって貴重な経験となりました。

ふじわら まさゆき
藤原 正行



- 派遣元：愛知県名古屋市 ■ 派遣期間：H26.4.1～H28.3.31
- 派遣先所属：都市整備局市街地整備課
- 派遣先の主な担当業務：土地区画整理事業

私が陸前高田市に赴任した平成26年4月は、国道45号をはじめ、市内の道路には復興事業関連の数多くの工事車両が行き交っている状況で、また、今泉地区の高台で発破により採掘した土砂を高田地区に運ぶためのベルトコンベアが本格稼働し、大量の土砂が毎日のように気仙川を越えていて、3年前までそこにまちがあったことが想像できない様子でした。

市役所では30名ほどの職員が土地区画整理事業を担当し、その3分の2は私も含め他の自治体等からの応援職員で、年代も経歴も様々でしたが、まちの復興のために一生懸命仕事をする個性豊かなメンバーの集まりでした。もちろん市職員の復興に対する思いは人一倍だったと思います。

私がいた間には、仮換地指定に向けた土地区画整理審議会の立ち上げと地権者への意向確認、事業内容の見直しなどを行いました。また、岩手県などとの打合せや他の復興事業との工事調整のために広い岩手県内

を公用車で何度も移動したこと、工事上のトラブルで住民や関係者の方々に迷惑をかけたことなど、思い出すといろいろなことがあった2年間でした。

名古屋市に戻る頃にはかさ上げ部では盛り土造成工事が広範囲に進み、ベルトコンベアは土砂運搬の役割を終え撤去されました。それに加え、高田地区の高台の一部では被災された方々の住宅が建ち始め、今泉地区でも高台の造成工事やかさ上げ部の盛土工事が始まるなど、市の復興が着実に進んでいることを感じられるようになっていました。

あれから5年が過ぎましたが、一緒に仕事をした市職員から宅地の造成工事は今年度中に完了する見込みということを知り、とてもうれしく思っています。

今後は、整備されたまちにどのように市民生活や活気を呼び戻すかが大きな課題になると思います。これまで以上に難しい仕事かもしれませんが、全国や世界に誇ることができるまちになるよう応援しています。

第1節 陸前高田市

2 応援職員から

ながた としゆき
永田 敏幸



- 派遣元：島根県松江市 ■ 派遣期間：H26.4.1～H28.3.31
- 派遣先所属：建設部建設課
- 派遣先の主な担当業務：被災した土木施設の計画・設計

平成23年6月に茨城県東海村へ東日本大震災の応援職員として1か月従事しましたが、テレビや新聞報道で見聞きした東北3県の被害があまりにも甚大であるため、東北での復興応援をしたいと考えていました。

陸前高田市には、平成26年度から27年度に応援職員として、被災した道路の復旧や復興計画に基づく避難道路、橋梁の設計に従事しました。

最初は、地名や電話で話される言葉がよく分からず、応援職員では駄目だとか、正職員でないと話をしないなど、地元の皆さんの受入れが厳しい場面にも遭いましたが、誠実な対応を心掛け、徐々に被災された皆さんと打ち解けながら、事業を進めることができました。

そこで、被災された方が今の心情や思いを吐露された時に、初めて私を受け入れてくださったという

うれしさと、松江市に戻っても被災地の皆さんの思いを届けることができるようなセクションへ戻りたいと思いました。

松江市に戻ってからは防災のセクションへ配属され、「防災出前講座」などで被災地の状況や被災者の思いを伝えています。

また、2年の派遣期間で市職員、地元の方、飲食店（居酒屋）の皆さんと懇志になることができ、今でも1年に1回は必ず陸前高田市を訪問し、復興状況や皆さんとの再会を楽しみにしているところです。

震災から10年を経過するという一方で、被災地を取り巻く環境は激変する時期にきていますが、歩みを止めることなく、完全復興に向けて頑張っていたきたいと思います。東北からは遠い、松江市から応援しています。

もりした まゆみ
森下 真弓



- 派遣元：三重県松阪市 ■ 派遣期間：H28.4.1～H30.3.31
- 派遣先所属：教育委員会生涯学習課
- 派遣先の主な担当業務：公民館事業

私は、陸前高田市への派遣が決まる前に、イベントのボランティアスタッフとして陸前高田市を訪れたことがありました。震災から5年が経過した頃でしたが、市街地には盛土が広がり、店舗の多くが仮設のまま、津波が壊したまちの復興がいかに難しいかを知りました。しかし、その中で、市職員やイベントに参加された地域の皆さんはとても明るく、まちの復興を信じて地元で暮らし続けている姿がとても印象的でした。

その時の景色や経験が「このまちに関わりたい」と思うきっかけとなり、応援職員の派遣を希望しました。

私は教育委員会生涯学習課に所属し、公民館で地区の住民の方々を対象に健康や教養に関する講座などを、また乳幼児を育てる親や小学生を対象に講座を開催したり、中高生を対象に地域ボランティア養成事業を実施したり、長く受け継がれてきた郷土芸

能に関する事業などを行っていました。

これらの業務を行う中で、応援職員でありながら、たくさんの市職員や地域の方々に助けていただきました。そして、災害時のことや避難生活のこと、復興に必要なこと、震災前後の東北のことなど、様々なことを教わりました。災害時や避難生活のことは派遣以前にもメディアなどで情報を得ていたつもりでしたが、実際に陸前高田市で見聞きしたことはいかに自分の認識が甘かったかということを感じさせられるものでした。激甚災害発災時に自分自身の命を守ることを、そしてその後の自分の人生にかけがえのない人を死なせないために平常時から準備や心構えが必要であることを知り、「3.11を忘れない」というメッセージの真意を理解しました。そして、伝え続けることの大切さを今も強く感じています。

これからも、陸前高田市が笑顔あふれるまちになることを心よりお祈りいたします。

かじさ たくや
加治佐 拓也

- 派遣元：東京都武蔵野市 ■ 派遣期間：H28.4.1～R2.3.31
- 派遣先所属：民生部地域福祉課
- 派遣先の主な担当業務：生活保護、国民健康保険業務

平成 28 年 4 月から令和 2 年 3 月までの 4 年間、陸前高田市に応援職員として赴任しました。1 年目から 3 年目は主に生活保護業務を担当、岩手県奥州市から派遣された方と 2 年間、神奈川県大和市から派遣された方と 1 年間パートナーとして業務に従事、4 年目は国民健康保険業務を担当しました。また、毎年、東日本大震災追悼式の業務に従事するという貴重な経験をさせていただきました。

派遣当初の陸前高田市は中心市街地のかさ上げを行っている状況でしたが、4 年過ごしている間、大型商業施設「アバッセたかた」のオープンを皮切りに、併設された図書館、商店街の形成、人が集まる公共施設や広場が次々と形成され、市役所までの通勤経路にはたくさんの住宅が建ち並び、日々、町が復興していく様子を肌で感じながら過ごすことができました。

4 年間を通して一番印象に残っていることは、市職員をはじめ、地域住民の方々に被災した際の体験談を聞いた時のことでした。多くの人が大切な人を亡くしたことや、自分自身が被災した話を聞き、改めて自然の脅威を感じる貴重な経験をさせていただきました。

最後に、市職員をはじめ、全国の自治体から派遣された応援職員、各支援団体の職員、地域住民の方々など、多くの人々と協力しながら仕事をしたことが、自分の人生において大きな財産となりました。震災から 10 年が経過して大きな節目を迎えてはいますが、本当の意味での復興はこれからも続いていくと思います。今後も陸前高田市とのつながりは続いていくことになると思いますが、この貴重なご縁を大切にしていき、遠方からではありますが、岩手県並びに陸前高田市をはじめとした沿岸被災地域の更なる発展を心より願っています。

こんどう ちよ
近藤 千代

- 派遣元：京都府京都市 ■ 派遣期間：H29.4.1～H30.3.31
- 派遣先所属：教育委員会生涯学習課
- 派遣先の主な担当業務：埋蔵文化財関係事務

「まだ工事中でびっくりしました。」

「まだじゃなくてやっとここまでのよ。」

これは陸前高田市の職員さんと食事に行った時の会話です。

平成 29 年 3 月末、私は初めて陸前高田市に向かいました。派遣に行こうと思った理由は、同じ日本であんなに大変なことが起こっていて、自分にも何かお手伝いできないかと思い、ただそれだけでした。

派遣での仕事は、埋蔵文化財関係の事務でした。初めは陸前高田市の仕事のやり方を覚えないうけなかったのも、何をすることも時間がかかっていました。同じ市役所なのに市町村によってこんなに仕事のやり方が違うんだと少し驚きました。派遣で全国の市町村職員が来ることは滅多にないことなので、それぞれの市町村から参考になるような仕事のやり方があったら、派遣先自治体で取り入れてみてもいいのではないかと思います。周

りの方々に親切に教えていただき、何とかやってこれたと思っています。

「やっとここまでのよ」、その言葉の意味を、被災地に 1 年間住み、知ることができました。震災で失ったまちをまた一から作り直す、それがどれだけ時間がかかるとのことなのか、京都市に住んでいたら分らなかったと思います。この災害を二度と繰り返してはいけないし、決して忘れてはいけないことだと思いました。

京都市に戻ってからも毎年陸前高田市を訪れていて、その度に新しい建物ができていたり、まちの様子が少しずつ変わっています。陸前高田市をはじめ、東北には素晴らしい自然や温泉、おいしい食べ物があります。復興していくまちを応援しつつ、これからも自分ができる範囲で被災地に貢献していきたいと思っています。1 年間貴重な経験をさせていただいたことは、自分にとって大きな財産になりました。

愛知県名古屋市の 防災危機管理局 危機対策室

本市は発災直後、被災地に関する情報収集を行うため岩手県沿岸部に先遣隊を派遣し、その報告から、陸前高田市では市庁舎が全壊し、多数の職員が亡くなり、壊滅的な被害を受けていることが判明したため、本市で全庁的な協議を重ねた結果、陸前高田市の行政機能を“丸ごと支援”することを決定し、これまで延べ約250名の職員を継続して派遣してまいりました。

職員派遣を行う上で、当初、応援職員の宿舎を確保するのに苦労しました。陸前高田市近郊の旅館やホテルは全国からの応援職員やボランティアで満室となり、確保することができませんでした。一関市大東町の富二屋旅館にお願いしたところ、「名古屋なら貸してもよい」とご理解いただき、拠点とする宿舎として利用させていただきました。

神奈川県茅ヶ崎市 総務部職員課

本市では、平成23年に全国青年市長会陸前高田市復幸応援センターへの職員派遣を契機に、同センターの閉所後も陸前高田市と直接協定を結び、これまでに一般事務職及び土木職の職員13名を継続的に派遣してきており、現在も2名の職員を派遣しております。

陸前高田市の復興に貢献できるふさわしい人材を派遣することは、本市にとって一時的に戦力ダウンとなることは否めないものの、被災地の住民と直接接しながら復興事務に携わり、1日も早い復興支援に尽力できたことにより得られる経験が他に代え難いものであると捉え、これまで継続して職員を派遣してまいりました。

職員派遣を開始して9年が経過しますが、派遣された職員は、帰任後も被災地支援活動報告会や市民まつりへの陸前高田市ブースの出展など、陸前高田市の皆さまのご協力をいただきながら、市民へ被災地の復興

三重県松阪市 総務部職員課

松阪市では、平成23年3月11日の東日本大震災の発災直後より、被災地各地に短期的な職員派遣を進めるとともに、災害用備蓄品の提供や義援金などの取組を進めました。

特に被災により多くの職員を失った陸前高田市は、震災以前より全国青年市長会を通じて親交があったこともあり、平成25年度より現在まで、職員を毎年度1名派遣しております。

冬でも温暖な松阪市にとって、遠く厳しい寒さの東北地方に初めての長期派遣であったため、家庭環境も重要ですが、意欲がありメンタル的にも強い職員をどのように選考するか、前年の早い時期から相当議論しました。選考したある職員に意思確認をし

名古屋市のマスコットキャラクター
「はち丸」



本市では、市民及び職員向けに応援職員による講演会を積極的に実施し、市民と職員それぞれの防災意識の向上につながっていると考えております。また、市の各種計画・対応マニュアルに支援から得た教訓を反映してきました。

現在、平成26年に締結した友好都市協定に基づき、市民美術展での両市の作品展示、郷土芸能の相互披露、中学生同士の相互訪問、博物館の交流、市民交流団による交流など様々な交流の取組を行っています。

陸前高田市への支援を開始してから令和3年3月で10年となります。今後は交流に軸足を移し、未永く友好関係が続くよう、交流の取組を進めてまいります。

状況等について伝える活動を展開しつつ交流を続けており、派遣を通して築かれた両市の絆がとても強いものであると感じております。

東日本大震災からの1日も早い復興の

一助になればと微力ながら職員を派遣してきました。派遣した職員それぞれが直面した現実、克服すべく行動する住民の皆さまとの間で築き上げられた絆は、かけがえのないものになるとともに、自治体職員としての成長の礎になったと感謝しています。

今後も、熱い想いを持つ応援職員を中心に陸前高田市との絆をいかしながら、復興、交流に関わってまいります。



派遣から帰任した職員が茅ヶ崎市の市民まつりで陸前高田市ブースを出展している様子

松阪市のマスコットキャラクター
「ちゃちゃも」



たところ、震災復興支援に強い興味を持っており、早い段階で派遣を承諾し決定することができました。

平成25年4月から計4名の職員を派遣しておりますが、それぞれ思いを持って復興支援に携わったものと思います。応援職員にとって、大きく飛躍する大切な経験になったのではないのでしょうか。

両市の交流は、毎年互いのお祭りにそれぞれ物産品のブースを設置し、PRする場を作るなど交流を続けています。今はコロナ禍の中、思うようにお互いを行き来できませんが、引き続き細くとも長い友好関係を構築していきたいと考えております。

市町村長メッセージ

大船渡市長 戸田 公明



あの東日本大震災津波から10年の歳月が経ちました。顧みますと、被災直後から国内外の皆様からの力強いご支援と温かい励ましをいただき、それらを力に市民と行政が一体となって、大震災からの復興に立ち上がることができました。

誰も経験したことのない大規模災害とあって、困難かつ喫緊の課題が次々と持ち上がり、市職員は不眠不休で業務に当たりましたが、日に日に増える業務を前に疲弊の色が濃くなるばかりでした。そうした中、全国の自治体や団体から派遣された応援職員の皆様が、大きな支えとなってくれました。

応援職員の皆様には、震災直後のがれき撤去に始まり、市復興計画の策定支援、被災者の「住まいの再建」となる災害公営住宅や防災集団移転住宅団地の整備、「生業の再生」に向けた水産業関連施設の復旧、被災地の利活用に向けた検討や地域との調整など、新たなまちづくりのための基盤整備に携わっていただきました。

こうした業務に加え、救援物資の管理や義援金の支給事務、応急仮設住宅入居者へのこころのケアやコミュニティ再生に向けた支援など、被災者に寄り添った業務、また、被災者支援に伴う手続きのため繁忙となった窓口業務などにも従事していただきました。

おかげをもちまして、市復興計画における令和元年度末時点の進捗率は事業費ベースで約95%に達するなど、復興の完遂が見通せるまでになりました。

市の中心部であるJR大船渡駅周辺地区では民間施設や店舗などの建設が進み、まちづくり会社を中心となり年間を通じて多彩なイベントが開催され、近隣に整備された夢海（ゆめみ）公園と相まって、にぎわいを見せています。

また、被災跡地の利活用では、現在、民間によるトマトの大規模栽培施設（高度環境制御栽培施設）やイチゴ生産・担い手育成拠点施設が建設され、新たな雇用を生み出しています。

このように、当市がここまで復興してまいりましたのも、ひとえに、これまで派遣いただいた延べ500人の応援職員の皆様のご尽力の賜物であり、改めて深く感謝申し上げます。

当市の復興、また未来を語る上で、皆様のご功績を忘れることはできません。今後とも、職員派遣を機に全国の皆様と築き上げた絆を大切に、新たなまちづくりを進めてまいります。

結びに、派遣元の自治体や団体、関係の皆様、そして何より業務に精励されました応援職員の皆様から感謝申し上げ、御礼のことばといたします。

復興の状況



中心市街地（JR大船渡駅周辺）



大船渡魚市場



移転した赤崎中学校



おおふなぼと（大船渡防災観光交流センター）

第2節 大船渡市

2 応援職員から

くりわき ゆきひと
栗脇 幸仁

青森県岩木山にて大船渡職員と応援職員と一緒に
バックカントリースノーボード



- 派遣元：鹿児島県鹿屋市 ■ 派遣期間：H25.4.1～H28.3.31
- 派遣先所属：農林水産部水産課
- 派遣先の主な担当業務：災害復旧工事の設計、監理

平成25年度から3年の派遣期間が終了し約5年が経過しますが、Web等で見える復興の様子に驚きと喜びを感じています。

私はスキーが好きで、毎年1月下旬に仙台空港を利用し東北のグレンデへ旅行していましたが、東日本大震災で仙台空港が津波にのまれたテレビ中継を見て、あと一月遅く旅行していたらと恐怖を感じました。

震災後、報道される被災地の現状を見て、東北地方への恩返しも兼ねて自分の培ったものを復興に少しでも生かせないかと思っていた矢先に、応援職員の要請があったので家族を説得し、鹿屋市に隣接する肝付町と銀河連邦でつながりのあった大船渡市へ家族で赴任しました。

赴任当時は、がれき撤去後の土地が広がり、復興に向けての槌音が聞こえ始めた頃でした。家族での赴任は、衣食住はもとより、幼稚園等生活基盤を築くのに大変苦労したことを覚えています。鹿児島弁の中で育ってきた私たちにとって、ケセン語は衝撃的で初めは理解できませんでした。住居のあった越喜来地区や子供の幼稚園のあった吉浜

地区の方々には大変親切にいただき、赴任が終わるころには子供たちがケセン語を話す始末でした。現在はバリバリの鹿児島弁です。また、生活基盤を築くにあたり、生活様式が大きく違うことから、大船渡市の総務課担当職員の方には細やかな配慮をいただき大変助かりました。

一方、仕事では土木技師として道路の新設改良・維持補修のノウハウを培ってきましたが、水産課に配属され、未経験の漁港と防潮堤の災害復旧業務に従事し、大変苦労しました。

業務遂行に当たっては、市職員をはじめ、先に配属された東京都応援職員、宇部市応援職員の方々に丁寧に指導していただきました。

派遣期間中に趣味を通じて仲良くなった仲間とは、東北の冬山で毎年交流を図っています。

津波による被災から長い道のりでしたが、第1期復興・創生期間が終了し再出発の年となります。これから、大船渡市が笑い声の絶えない安全で住みやすく活気のあるまちとして発展しますよう応援しています。

ふじわら はつみ
藤原 初美

- 派遣元：山口県周南市 ■ 派遣期間：H26.4.1～H27.3.31
- 派遣先所属：生活福祉部市民生活環境課
- 派遣先の主な担当業務：環境担当（地球温暖化、エコライフ、廃棄物）



大船渡市へは1年間の派遣で、地球温暖化、エコライフ、廃棄物などの環境業務を担当していました。不法投棄の回収で現場業務は大変でしたが、ときにはカモシカやニホンジカに会い癒やされていました。まちは、復旧工事を行う重機や津波、地震の爪跡が多くあり、災害の恐怖を痛感しました。派遣当初は、窓口や電話対応の上でケセン語が分からなく、同僚職員に助けていただきながら業務をこなしていました。

また、応急仮設住宅での生活でしたが、住民の方が住宅内の行事に誘ってくださり、震災当時のお話を聞かせていただいた時は涙腺がゆるみ言葉を失ってしまいました。慣れない土地で生活する中でお誘いいただいたことはとてもありがたく、今でも心から感謝しています。住民をはじめ市職員の方から「遠方からありがとうございます」、「無理せず頑張ってください」と感謝の言葉をいただくこともよくありました。感謝の

気持ちと人を思いやる気持ちの大事さを知りました。

震災は決して他人事ではなく、一人一人が自覚し、非常時においてもお互いを思いやる精神を忘れてはならないということ学びました。平日頃から個人が身を守る（自分の命は自分で守る）ための準備と行動をすることが一番重要だと思います。

東日本大震災の発災から10年。大船渡市の復興の様子をテレビやSNS等で拝見しています。時が流れ、被災地の復興が進みまちの景観が変わっても、東日本大震災が起り、それに立ち向かった被災地の方の前向きな頑張りを決して忘れることなく、大切に思い、伝え続けて行かなければいけません。復興には長い年月が必要ですが、私のできる応援として、派遣後も大船渡市のサンマを地元でPRしており、今後も長期間支援を続けてまいります。大船渡市は人が優しく、食べ物（サンマ、ホタテ、ウニ）もおいしく、景観も良い大好きなまちです。

よしだ ふみあき
吉田 史章

- 派遣元：埼玉県鴻巣市 ■派遣期間：H26.10.1～H28.3.31
- 派遣先所属：企画政策部秘書広聴課
- 派遣先の主な担当業務：広聴広報業務



大船渡市の皆さんお元気ですか。私が赴任したのは震災から3年半が経過した頃で、かさ上げ工事の真っ只中でした。現在は、キャッセン大船渡のオープンなど大船渡駅周辺地区などのまちづくりが着々と進んでいると聞き、間接的ながら復興に携わることができたことを大変うれしく思います。

岩手県及び大船渡市の職員受入体制については、応援職員を対象とした「冬道安全運転講習会」やスタッドレスタイヤ未所有者への無償貸与など、寒冷地に不慣れな職員へのサポートをしていただいたり、「メンタルヘルスケア研修会」、「フォローアップ面談」、「派遣職員懇親会」など気持ちの面での配慮をしていただくなど、手厚いサポートが大変

ありがたかったです。

担当した業務で印象に残っているのは、「おおふなトン」と様々なイベントに参加したことや、NHK特集ドラマ「恋の三陸 列車コンで行こう」の取材で松下奈緒さんにインタビューしたことなどです。

ホタテ、ウニ、アワビ、ホヤ、ワカメ、サンマなどの海の幸、山に住むニホンジカの群れなどの豊かな自然は、関東平野で海なし県育ちの私にとって感動の連続でした。

1年半の間、多くの素晴らしい方に出会うことができ、復興支援で行ったはずが、逆に元気をもらっていた毎日でした。これからの大船渡市の発展を楽しみにしています。

すずき やすなが
鈴木 康永

- 派遣元：静岡県浜松市 ■派遣期間：H27.4.1～H28.3.31
- 派遣先所属：災害復興局市街地整備課
- 派遣先の主な担当業務：津波復興拠点整備事業



私が応援職員として大船渡駅周辺地区被災市街地復興土地区画整理事業に携わった平成27年4月は、被災建物等の撤去が進み、事業計画の実施に向けた本格的な公共施設等の整備を進める段階でした。

自分自身は、平成7年の阪神淡路大震災で短期での応援派遣を経験していますが、東日本大震災の応援職員として大船渡市復興計画の復興拠点整備事業に携わり、被災者の方々の早期復興を願う気持ちに寄り添いながら、市職員や他自治体応援職員とともに復興事業に従事した貴重な経験は、大きな財産となっています。

派遣期間の1年間はとても短く、その中で支援事業の懸案事項であった被災建物の補償案件も県等との協議により解決方針を示すことができ、次の担当者に業務を引き継ぐことができたことは、応援職員としての責務を少しでも果たせたのではないかと受け止めています。その土地区画整理事業も令和元年11月に換地処分公告が行われ、市の拠点としての

生活支援機能と観光・交流機能等を確保し、津波復興拠点区域と一体となったエリアマネジメントによるまちづくりが進んでいます。

大船渡市は全国の自治体から多くの応援職員を受け入れ、被災直後の混乱の時期から市が一丸となり復興計画に掲げた様々な事業を推進するため、戸田市長をはじめ、市職員の方々は長期にわたり激務が続く中、応援職員に対して着任から離任するまできめ細やかな支援やご配慮を賜り、知らない土地での生活であったにもかかわらず、何ひとつ不安なく支援業務に携わることができたことを深く感謝申し上げます。

帰任後においても、復興支援のサイクルイベントとして開催されている「ツール・ド・三陸」にも毎回参加して肌で復興のまちづくりを感じ、派遣期間中にお世話になった市職員等との交流を続けるとともに、今後も被災市町村の更なる復興と発展を願っています。

第2節 大船渡市

2 応援職員から

はたむら みつあき
畑村 光昭



- 派遣元：群馬県富岡市 ■ 派遣期間：H28.4.1～H29.3.31
- 派遣先所属：都市整備部建設課
- 派遣先の主な担当業務：土木工事設計、積算、監督業務

私は、少しでも東日本大震災の被災地に貢献できればという思いから、自ら応援職員の派遣に志願し、平成28年4月1日から平成29年3月31日にかけての1年間、応援職員として、大船渡市都市整備部建設課に配属となりました。その際に、微力ではありましたが、応援職員として大船渡市の災害復旧事業に携わったことについて、当時のことを振り返りながら書きたいと思います。

業務内容については、復興交付金事業に伴う防災集団移転地へのアクセス道路の新設及び拡幅改良、緊急避難道の整備の積算及び監督業務を行いました。初めは、見知らぬ土地に行き、分からないことも多くありましたが、市職員や同じく派遣されている災害応援職員の皆様の温かいご協力のおかげにより、日々の業務や私生活にも慣れました。週末

には、派遣元自治体ではなかなか行くことができなかった海釣りにも数多く行き、充実した毎日が無事に過ごすことができました。また、他自治体の業務に関しての取り組み方の違い等も数多く学ばせていただき、帰任してから今現在も自分の業務にいかすことができ、これからも培った知識や経験を自分の一生の財産として大切にしていきたいと思えます。

最後になりますが、1年間という短い期間でしたが、市職員の皆様、共に災害応援職員として業務に励んだ皆様に心より御礼を申し上げますとともに、大船渡市の一日も早い復興をお祈りしまして締めめの言葉とさせていただきます。また、帰任してからあつという間に4年がたち、近いうちに復興の進んだ大船渡市を訪れたいです。ありがとうございました。

ちば まこと
千葉 真琴



- 派遣元：岩手県奥州市 ■ 派遣期間：H28.4.1～H30.3.31
- 派遣先所属：生活福祉部市民環境課
- 派遣先の主な担当業務：環境衛生業務

私の派遣期間は震災後5～6年目でしたが、経験をいかせる業務があったこと、所属部署の統廃合により事前に異動対象であることが把握できていたことなどタイミングが合ったこともあり、応募したものです。

東日本大震災の発災から5年を経過していたものの、まだまだ市内のあちこちに津波の爪痕が残っていました。また、赴任した頃に宿舎から見えた大船渡湾の海は、防波堤のかさ上げ工事が進むにつれてだんだん見えなくなり、帰任する頃には対岸のセメント工場の煙突が見えるだけになっていました。

担当業務で最大のものは、地球温暖化対策推進実行計画の改定が挙げられます。派遣の初年度に環境省の補助事業（2次公募、実質期間2～3か月）に応募し、本来は計画改定までを含めるべき事業であったものの、スケジュール的に間に合わなかったため調査事業のみ実施し、2年度目の大半は自前で

の計画改定に費やすこととなりました。2年間の派遣期間満了までにどうにか形にすることができましたが、単年度のみで派遣された職員がこのような事業を受け持った場合、後任者の負担は相当大きくなると思われれます。

応援職員が過去に経験したことがある業務であれば即戦力になるかもしれませんが、反面、多忙により業務が任せきりとなる可能性もあります。担当業務ではありませんが、震災から時間が経過するにつれ、主に応援職員が担当し、市職員があまり手掛けず、業務内容の把握や技術の継承などがうまくなされていない業務もあると感じました。

なお、家族同伴で派遣生活の2年間を過ごしましたが、残業時間が多く職場と宿舎の往復に終始してしまったことや、応急仮設住宅ではなく借上げの宿舎であったため職員間の交流が生まれにくい環境であったことが非常に残念に感じられます。

ともむら さこん
友村 左近

五葉山の頂上にて



- 派遣元：神奈川県藤沢市 ■ 派遣期間：H29.4.1～H30.3.31
- 派遣先所属：総務部防災管理室
- 派遣先の主な担当業務：防災計画に関する業務

被災地で復興の力になりたい、そして被災地の今を知りたい。そう思い被災地派遣を希望した私が大船渡市に赴任した年は、商業施設キャッセン大船渡が完成するなど、まちが賑わいを増していく時期でした。一方で、まだところどころに震災の爪痕が残っている箇所もあり、被害の大きさを痛感した記憶があります。

派遣先では防災管理室に配属となり、防災計画に関する業務に携わりました。計画策定には全庁的な調整が必要で、知り合いがいないうちでの業務に不安を感じましたが、市職員が他課との懸け橋となってくれたことによりスムーズに取り組むことができ、最終的には大船渡市と藤沢市で災害時相互応援協定を締結することもできました。

派遣先での生活は、職場の上司経由で地域のお祭りに参加させてもらうなど地域との懸け橋となっていただけ、日々楽しく過ごすことができました。また、食べ物がおいしく、体重が1年で7キロ増加したのも今では良

い思い出です。このような派遣生活を送れたのは、受入体制が整備されていたからだと思います。応援職員は知らない土地での生活への不安が大きいと思いますが、応援職員全員を対象とした交流会などのイベント開催や職場での地域生活全般について相談しやすい環境を作っていたため、不安なく生活できました。

現在は、藤沢市の防災部門で働いております。派遣先で被災当時の話を聞いたことは非常に貴重な経験であり、日々業務に当たる上で防災意識を強く持って仕事に臨むことができています。

最後になりますが、派遣生活は公私ともに充実した思い出ばかりで、岩手県及び大船渡市には感謝の言葉しかありません。毎夏の訪問を楽しみにしていましたが、コロナもあり今年は訪れることができなかったのが残念です。状況が変わり再訪できる日を心から楽しみにしております。

いちかわ ゆうや
市川 裕也大船渡市さんま焼師
実技試験の様子

- 派遣元：長野県佐久市 ■ 派遣期間：H29.4.1～H30.3.31
- 派遣先所属：都市整備部住宅公園課
- 派遣先の主な担当業務：住宅再建支援業務（補助金受付）

友好都市の縁で大船渡市とは派遣前より交流があり、自治体職員の方や地元漁師の方など、少しでもお世話になっている方々の力になればとの思いで派遣に臨みました。

赴任時の大船渡市の様子は、震災後にボランティアで参加した時に見たときから大きく姿を変えており、区画が整理され、災害公営住宅が完成し、応急仮設住宅の撤去が始まるなど、復興に向けて大きく歩みを進めている時期であったと思います。

そのような中で、住宅再建に関する補助金の交付業務に携わり、応急仮設住宅などに暮らす被災者の方に直接お話を聞きながら、その方の気持ちに寄り添い、自立に向けてアドバイスができるよう心がけて取り組みました。

派遣先の大船渡市職員の皆さんには温かく受け入れていただき、業務について相談に乗っていただくだけでなく、おいしい飲食店なども教えていただき、公私ともに頼りにさせていただきました。さらに地元の皆さんとの

交流の場に参加させていただき、ホタテの養殖作業体験や夏まつりの山車作りなど、地域にも温かく迎え入れてもらった体験は一生の思い出となりました。

住居は応急仮設住宅でしたが、夏は涼しく冬は温かい気候であり、快適に不自由なく過ごすことができ、また、周りには他の自治体から派遣された職員の方たちもおり、日用品等をシェアしたり遊びに出かけたりと、交流の輪も広がりました。

県主催の研修などでも、より多くの応援職員との貴重な意見交換会の場がもたれ、さらに交流の輪が広がりました。派遣を通じて、震災に負けず前に進もうとするエネルギーを肌で感じ、多くのことを学ばせていただくとともに、改めて大船渡市と佐久市との絆の強さを体感した1年でした。今後も両市の絆が継続されるよう業務に励んでまいります。

コロナ禍が落ち着いたら、また大船渡市にお邪魔させていただくと思いますので、その時はよろしくお願いします。

第2節 大船渡市

2 応援職員から

むらい ゆうすけ
村井 雄輔



- 派遣元：千葉県山武市 ■ 派遣期間：H29.4.1～H31.3.31
- 派遣先所属：商工港湾部商工課
- 派遣先の主な担当業務：復興特区関連業務、仮設店舗の管理、産学官連携事業

私は、千葉県山武市から応援職員として大船渡市の商工港湾部商工課で復興支援に係る業務に従事させていただきました。

被災地への派遣を希望した理由は、山武市も東日本大震災により被害を受けており、同じ被災自治体として少しでも早期復興につながるようなお手伝いができればという気持ちからでした。

私が大船渡市へ赴任した時は、震災後5年以上が経過していたこともあり、甚大な被害を受けた大船渡駅周辺は津波復興拠点として区画整理が進み、新しい復興まちづくりが始まる希望の兆しが見える光景が広がっていたことを記憶しています。

配属先での主な業務は、被災した自営業者等の営業継続・再開を支援する業務でしたが、市内外の復興イベントのお手伝いもさせていただきました。業務を通じて住民の方々や市職員、応援職員が一丸となり、復興という目標に向け苦労を共有することで生まれる絆を感じられたことや、多くの温かい応援

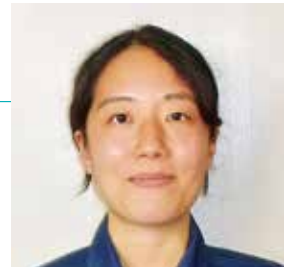
の声が派遣期間中の励みとなりました。業務で得た経験を、山武市のまちづくりにもいかしてまいりたいと思います。

近年、自然災害が増加し、自治体間の協力体制の構築が重要な課題となる中で、応援職員としての経験を踏まえ、受入体制整備に必要と感じた点は、こころのケアと業務のマニュアル化です。被災者対応や平時と異なる環境下において自身の能力不足に苦悩することもあり、こころのケアが重要になります。また、復興には長い期間を要し、多くの職員が業務を引き継ぎます。効率的な業務引継のためには、業務のマニュアル化と連携自治体相互間での情報共有が必要になってくると考えます。

最後に、様々な場面で援助をいただき、大変お世話になった市職員の皆様と、温かく迎え入れてくださった市民の皆様への感謝と早期復興をお祈り申し上げます。

三陸大船渡、復興の総仕上げに向けがんばっぺし！

かみくり ゆうこ
上栗 優子



- 派遣元：東京都板橋区 ■ 派遣期間：H30.4.1～R2.3.31
- 派遣先所属：災害復興局被災跡地利用推進室
- 派遣先の主な担当業務：被災跡地を活用した広場の設計及び工事監督業務

大船渡市では、応援職員が力を発揮できるよう、メンタルヘルスケアを目的とした研修や市の産業医による面接が充実していました。また、個人的な意見としてありがたかった点を以下箇条書きで記します。

- ・ 応援職員の住宅を決めるに当たり、同じ自治体の職員同士が同じマンションや寮に住めるようご配慮いただきました。距離が近いことで、応援職員同士が気軽に相談しやすい環境となり助けられました。
- ・ 手術により2週間の休暇を取った際、職場の皆さんにフォローしていただけたおかげで、自分のメンタルを維持することができました。
- ・ 三陸・大船渡夏祭りに市職員と共に参加しました。道中踊りの練習や浴衣の手配等をしていただき、職員の皆さんと交流を深めることができました。

振り返ると、こうした仕事面や生活面でフォローしていただいたおかげで、慣れない土地でも孤立せずに仕事や私生活に全力で取り組めたと感じます。

大船渡市の皆様、2年間本当にありがとうございました。1年任期で交代する応援職員の受け入れは、引継ぎや業務の点で大変ご苦労されたと思います。それにもかかわらず、毎年やって来る応援職員を温かく迎え、「復興のために来てくれてありがとう」と声をかけていただきましたこと、改めて感謝申し上げます。

また、仕事だけでなく、盛町灯ろう七夕まつり等の地域行事にも誘っていただいたことで、地元の方とも知り合え、派遣後も大船渡市の皆さんと交流を続けることができました。このコロナ禍を乗り越えて、必ずまた大船渡市でお会いしましょう。

静岡県浜松市 総務部人事課

本市は、静岡県が支援を担当する岩手県の市町村のうち、大船渡市から支援要請を受けたこともあり、平成23年から平成31年3月末までの間、43人の職員を同市に長期派遣いたしました。

土木技術職員が全国的に不足する中、本市においても応援職員の調整に苦勞することもありましたが、南海トラフ巨大地震の発生が想定される本市にとって、土木職員の現場経験は今後の業務にいかすことができる大変貴重なものであったと思います。

応援職員は帰任後、被災地支援を経験したことにより公務に対するモチベーションが向上し、本市を外側から見るといった新たな視点を得て、質の高い業務成果を上げるなど活躍しています。また、山車を一から作

り上げて参加した大船渡市盛町灯ろう七夕まつりに魅了され、お祭りの時期には毎年旅行に行くなどの交流を続けている者もおります。

こうした絆を引き続き大事にしていくとともに、震災を乗り越えられた貴県の更なる発展をお祈り申し上げます。

※写真は平成23年11月22日、本市のマスコットキャラクターである「出世大名康くん」が鈴木康友浜松市長(左)とともに、地域公民館の設置費用に役立てていただくための支援金1,800万円の目録を、戸田公明大船渡市長(右)に贈呈している際の様子です。



東京都板橋区 総務部人事課

板橋区は、山形県最上町と災害相互援助協定を締結しています。最上町が姉妹都市提携をして支援をしている岩手県大船渡市から、区に物資の支援及び職員の派遣要請があったことを受けて支援を行いました。区は、平成23年度まで延べ100人の職員を短期・中期派遣し、平成24年度から令和2年度まで延べ33人の職員を長期派遣しました。

職員派遣を行うにあたり、職員寮の確保や生活に必要な家電や備品の準備、応援職員の職種や業務内容の調整と人選、応援職員のフォローやメンタルケアなどの苦勞はありましたが、職員派遣を通じて、応援職員の経験を庁内で共有することで

災害に対する職員の防災意識の向上や、応援職員自身の成長にもつながっています。

区と大船渡市は、平成24年に東日本大震災における支援活動をきっかけに連携協力協定を締結し、花火大会や区民まつり等への招待や交流イベントなどの取組を行っています。職員派遣は令和2年度で終わりになりますが、今後も両都市間で文化や産業などの様々な交流が続くことを願っています。

いたばし観光キャラクター
「りんりんちゃん」



群馬県高崎市 総務部職員課

群馬県高崎市は、平成25年度から30年度までの6年間、毎年2人ずつ、延べ12人、実人数としては7人の職員を大船渡市へ派遣してまいりました。分野としては、大船渡駅周辺の土地利用、区画整理業務のほか、住民生活に密着した地域福祉業務や住民対応業務に従事してまいりました。

本市では、東日本大震災被災3県(岩手県、宮城県、福島県)の大船渡市を含めた3自治体に職員派遣を行ってまいりましたが、応援職員の選考に当たっては、志の高い職員に業務に当たってほしいとの考え方から、自ら派遣を希望する職員を各部局から推薦する方式で募りました。大船渡市は距離的にも500km余り離れており、本市の派遣先の中で最も遠方の自治体でしたので、希望者がどれくらい継続的に続くか当初懸念いたしましたが、毎年、様々な職員の派遣希望が継続し、人事側の懸念は杞憂に終わりました。それは、先に大船渡市で業務に当たった職員からの報告

の中で、大船渡市の皆さんの頑張りや、迎えて下さる職場や地域の温かさ、さらには群馬県にはない海の幸をはじめとする土地土地の食のおいしさが、本市の若手職員を中心に広まっていたことも要因かと思われます。災害派遣は、そもそも被災地を支援するためのものですが、本市や本市職員にとって、災害対応の重要性や復興の際の被災地としてするべきことなどを、逆に勉強させていただくことも多くあったと、この6年間を振り返って感じているところです。

平成30年度で派遣は終了となりましたが、現在でも両市の職員間、また市民間の交流は続いております。令和2年11月にも、応援職員が派遣期間中に築いた人脈によって、大船渡市の市民の方々と、高崎市で浜焼き大会が行われました。今後も派遣で築いた「絆」を大切に、両市の交流が末永く続くことを祈っております。

高崎市のマスコットキャラクター
「タカボン」



市町村長メッセージ

釜石市長 野田 武則



東日本大震災津波からの復興に係る職員派遣に対し、釜石市を代表して心より御礼を申し上げます。

全国各地の自治体におかれましては、日々複雑多岐化する地域の行政課題に対応し、奮闘されておられるにもかかわらず、誇り高い友愛の精神のもと、震災直後から当市に多くの職員を派遣していただき、お力添えを賜りましたことに、衷心より感謝申し上げます。

家族と遠く離れた慣れない土地で、被災した住民に寄り添いながら日夜従事されている職員の皆様のご労苦に思いを馳せると、全市民を挙げて一日も早く復興を完遂しなければならないと、日々自らを鼓舞してまいりました。その中では、応援職員にも随分と負担をかけたかもしれませんが、おかげさまで数々の難題を解決し、震災から10年の区切りを迎えようとしております。

市内各所では応急仮設住宅の解体が急ピッチで進んでおり、未来に続く暮らしと生業をスタートさせ、新たなコミュニティ形成の起点となる節目とするため、被災された方、最後の一人まで生活再建を後押しし、誰もが地域の中でいきいきと暮らしている

環境づくりを進めてまいる所存です。

一昨年は、世界中から頂戴いたしましたご支援に感謝を伝えようと、ラグビーワールドカップ2019™の試合を当市で開催することができました。人口3万人余りの小さなまちには壮大な挑戦でしたが、「One for All, All for One」のラグビーの精神が宿る当市に、新しい誇りが生まれたものと確信しています。

あの日を境にまちの姿は変わり果ててしまいましたが、住宅、店舗、事業所が日々再建を果たし、新しい街並みが生まれていく様子がしっかりと見えるようになってきました。釜石市は、これからもスクラムのごとく力強く、一丸となって前進してまいります。

三陸沿岸道路と東北横断自動車道、海と陸との結節点となる当地の強みを生かし、この地に根差したまちづくりを追求しながら、『三陸の大地に光輝き、希望と笑顔があふれるまち釜石』の実現を目指していくことをお誓い申し上げますとともに、改めましてこれまでの復興支援に対し、心から感謝を申し上げ、御礼のご挨拶とさせていただきます。

復興の状況



TETTO (釜石市民ホール)



釜石祈りのパーク (東日本大震災犠牲者慰霊追悼施設)



釜石鵜住居復興スタジアム



鵜住居小学校・釜石東中学校

すえなが よしはる
末永 芳治



- 派遣元：福岡県北九州市 ■ 派遣期間：H24.1.16～H25.4.24、H27.4.25～H31.3.31
- 派遣先所属：産業振興部水産課
- 派遣先の主な担当業務：漁港、海岸施設の災害復旧業務

私は、自ら希望して釜石市に2回派遣されました。最初の派遣は、東日本大震災からまだ1年も経っていない平成24年1月、漁港の災害復旧業務に従事しました。当初は3か月の短期派遣の予定でしたが、民家や街灯の明かりがほとんど無い日常とはかけ離れた状況を見てしまうと、帰るとは言えず派遣期間の延長を希望しました。資材や作業員不足などの問題があり、思うように業務が進まず、これといった成果も残すことなく1年3か月が過ぎてしまいました。

2年後の平成27年4月から2度目の釜石市派遣。北九州市では、平成23年8月に釜石市役所内に「北九州市・釜石デスク」を設置し、支援活動を行う職員のみめ細かなサポート体制があったため、家族を連れての派遣でも生活に困ることはありませんでした。

漁港の災害復旧は完成まであともう少しだったのですが、平成28年1月の冬期風浪、8月の台風10号により復旧した2か所の防波堤が被災してしま

い、その復旧と防潮堤の復旧業務に従事しました。厳しい現場条件で派遣期間中に防潮堤を完成させることができなかつたのが心残りです。

今回の被災地派遣については、家族や職場の方々にご迷惑をおかけしましたが、北九州市においては絶対に経験できない業務に携われたことは、私の人生における財産となりました。この経験を今後の業務に役立てたいと思っています。

震災から10年となる今年度に釜石市を訪れ、復興の状況を見たいと思っていましたが、コロナ禍の中、訪れることができそうもなく残念です。また、毎年11月に開催していた北九州市での釜石サンマの振る舞いが中止となりましたが、コロナが落ち着いたらぜひ再開してほしいと思います。

最後になりましたが、派遣中は釜石市の皆様には大変お世話になり、感謝申し上げます。現在も復興に尽力されている釜石市の皆様に、一日も早い心穏やかな日々が訪れますようお願い申し上げます。

ふじた しんいち
藤田 慎一



- 派遣元：東京都文京区 ■ 派遣期間：H25.4.1～H26.3.31、H28.4.1～R2.3.31
- 派遣先所属：教育委員会事務局総務課及び学校教育課
- 派遣先の主な担当業務：教育関係事務（学校施設関係、庶務関係及び就学援助等）

私は、平成25年度の1年間と平成28年度から令和元年度までの4年間の通算5年間、岩手県釜石市にお世話になりました。

このように、結果として2回お世話になることになったのですが、最初のきっかけとしては、復興に従事したい…というのではなく、偶然、派遣されることになったというものでした。ところが、そこで仕事をし、また、生活していく中で、1年間では余りに短いと思い、再度希望したところ、幸いにして再び派遣されることとなった次第です。

派遣された当時のまちの様子は、震災直後のようなことはなかったとはいえ、平成25年度の際はまだ壊れかけた建物等が残っていました。ところが、令和元年度末、東京へ戻る際にはそういったことはなく、ハード面の復興は大幅進んだと改めて実感しました。

仕事内容としては、5年間ずっと教育行政に従事しておりました。その中で学校の復興にほんの少し

ではありますが携われたことは良い経験であったと思っております。また、震災を起因とする就学援助対象者数を見て、震災の影響の厳しさについて考えさせられました。

復興を間近にて感じられたことは喜ばしいことではありますが、反面、子どもの数の減少や、今後、ますます厳しくなる財政状況の中で何を優先すべきかについて考えさせられるとともに、これらについては自分達の課題としても考える必要があると痛感しております。

最後になりますが、釜石市の皆様には公私ともに、それこそ言葉に言い表せないくらい大変お世話になりました。新型コロナウイルス感染症の影響で、なかなか行きづらい状況ではありますが、これからも定期的に訪問し、お世話になった人達との交流を継続し、かつ、深めたいと思っております。今後ともよろしくお願いたします。

さかい ともりのり
酒井 智則

- 派遣元：北海道旭川市 ■ 派遣期間：H26.4.1～H28.3.31
- 派遣先所属：産業振興部商工労政課
- 派遣先の主な担当業務：仮設店舗の運営・事業者の再建支援



赴任時は震災から3年が経っており、被災した商店や飲食店など多くの事業者が仮設店舗に入居し、再建を目指して営業を続けていました。床の張り替えや雨漏りの点検、故障したトイレの修繕など、日常的な仮設店舗の運営に携わる一方、新たに建設されるテナントビルや復興住宅に設けられる店舗への出店支援、区画整理事業が進む地区で再建を希望する事業者と地権者とのマッチング、市独自の再建支援策創設など、再建に向けた動きが加速する中で、様々な業務を経験させていただきました。

釜石市では、仕事、プライベートを問わず、出会った方たちのまちに対する強い想いが印象的でした。都市に対する市民の誇りを表す「シビックプライド」という言葉がありますが、市民が高いシビックプライドを持ち、まちづくりに関与する姿勢を感じます。市民自らも担い手となり、まちが掲げる「オープンシティ釜石」の文字どおり市外や県外、さらには国

外のような企業や研究機関、NPOなどの人々と協働し、ラグビーや世界遺産、豊かな水産資源などの魅力を最大限に活用しながら新しい釜石市を作ろうと努力を続けられています。そうした皆さんと力を合わせ、まちの再建に微力ながら携わることができた経験は、旭川市での仕事でもいかしていきたい財産となっています。

応急仮設住宅に住み、近所のスーパーで買い物をして、仮設の洋食店や居酒屋で食事をするなど、市民の一人として2年間暮らした中で、釜石市をはじめ岩手のファンになり、派遣期間終了後も幾度となく訪れています。仮設から再建を果たしたいくつかのお店にも行くことができました。季節になると食べたい味や会いたい人の顔、久しぶりに見たい風景も思い浮かびます。今は全国的な感染症の影響で旅行もままなりません、落ち着いたらまた出かけてみたいと考えています。

かとう ひろあき
加藤 浩昭

- 派遣元：大阪府大阪市 ■ 派遣期間：H26.4.1～H29.3.31
- 派遣先所属：復興推進本部都市整備推進室
- 派遣先の主な担当業務：区画整理事業（換地関係）



平成23年3月11日、私は大阪市住之江区のワールド・トレード・センタービル（現在は大阪府咲洲庁舎）16階で仕事をしていました。ある時間になると乗り物酔いになったような気分になり、これが東日本大震災の発生でした。

それから3年後の平成26年4月、先行して派遣された先輩からのお誘いがあり、岩手県釜石市への応援職員として復興推進本部都市整備推進室都市復興係に配属されました。

釜石市の第一印象は『遠っ！』そして『寒っ！』でしたし、单身という寂しさ（最初だけですが…）もあり、『やっていけるかなあ？』と考えたものですが、釜石市の方々は温かく受け入れていただき、また住居についても職場から徒歩圏内に確保していただくなど、多くのご配慮をいただき大変感謝しております。

一方、当時の係は市職員の方と我々応援職員の計12名で、区画整理4地区、津波防災拠点2地区

を所管することになり、『この人数で大丈夫かいな…？』と多少の不安を感じたことを覚えています。

このように始まった釜石市での生活ですが、半年、1年と月日の経過に伴い周りの環境も整備され、生活は大変便利になってきました。それに比例するように私の釜石市に対する思いも日々強くなり、『最後まで復興のお手伝い如果能したら…』と強い思いを持ちましたが、平成29年3月に大阪市へ帰ることになりました。

釜石市での3年間は色々な経験をさせていただきましたが、何よりも釜石市の方をはじめ、全国から集まった方々と交流できたこと、これが私の大きな財産となっています。

帰阪から4年経った現在、時折釜石市のホームページを拝見させていただくのですが、そこには生まれ変わった「まち」の様子があります。

これからは釜石市の皆さんで、生まれ変わった「まち」をいつまでも育てていただきますよう、お願いします。

たかはし そうへい
高橋 惣平

- 派遣元：秋田県横手市 ■ 派遣期間：H26.4.1～H29.3.31
- 派遣先所属：教育委員会事務局総務課
- 派遣先の主な担当業務：小中学校・幼稚園の災害復旧事業

私は平成26年4月から3年間、釜石市教育委員会事務局総務課に所属し、東日本大震災で被災した唐丹地区と鶴住居地区の学校再建事業を担当しました。

主な業務内容は、学校建設に必要な事業費の財源確保のための関係省庁協議、各種事業計画書の作成、小中学校や幼稚園との協議や調整などでした。

横手市からは発災の半年後から職員が派遣されており、私で4人目で、主に2つの地区の学校再建事業を引継ぎ業務に当たりました。

私が所属した総務課は、課員十数名のうち約半数が応援職員であり、3か月や1年ごとに人が入れ替わり、それぞれの派遣元自治体の単位で業務の引継ぎが行われました。前任者からの引継ぎの際に、業務量の多さや複雑さとともに、応急仮設校舎で学校生活を送る子供達のためにも、早期完成を求められ

る事業の重要性と責任の重さを強く感じたことを記憶しております。

両地区の学校再建事業は年度の区切れがなく、関係機関等との協議が同時並行で期限を定めて進められていました。当初は、全体像が把握できていなかったこともありその対応に大変苦慮しました。しかし、2年目からは、市職員と応援職員が学校建設担当として増員され、役割分担、連携し業務に当たりました。関係者との協議やトラブルへの対応など様々な場面で市職員の方の存在はとても大きく感じました。

釜石市で、市職員や全国から集まった応援職員と協力し復旧事業に携われたことは貴重な経験でした。被災した施設が年々再建され、応急仮設住宅は今年で大方無くなると聞き、とてもうれしく思います。被災地の皆さまに少しでも早くごく当たり前の日常が戻りますよう祈念しております。

やの けい
矢野 圭

- 派遣元：大分県大分市 ■ 派遣期間：H28.4.1～H29.9.30
- 派遣先所属：復興推進本部都市整備推進室
- 派遣先の主な担当業務：復興（高台移転）事業における設計及び施工管理

私は東日本大震災の発災を報道等を見て、土木技術者として復興に携わりたいと考え、派遣を希望しました。赴任時には担当地区の復興事業は大分進捗していましたが、まだ人が住める状況ではなく、一日も早く被災者の方々が応急仮設住宅を出られるよう事業を完了させたいと考え業務に取り組みました。

所属先は半数程度が他県からの応援職員でしたが、長期間にわたり一緒に復興に携わらせていただいたことから、派遣先の釜石市をはじめ、他市町村の職員とも絆が生まれ、今でも連絡を取り合うことができています。

私は釜石市では希望どおり復興事業に携わることができましたが、他事業との関係や今後の管理

など全体のことを考えると復興事業を派遣先自治体職員が実施し、不足する通常業務分を応援職員で補うというような方法も今後検討していく必要があると思います。

大分市は近い将来必ず発生すると考えられている南海トラフ巨大地震の被災想定区域内であるため、万が一災害が発生した際は今回の派遣の経験をいかしていきたいと考えています。

東日本大震災という未曾有の災害により日本中から多くの応援職員が派遣され、受入側も未経験のことばかりで本当に大変だったと思いますが、温かく迎え入れていただき、釜石市を第二の故郷と思えるようにしてくれた釜石市の皆様には本当に感謝しています。ありがとうございました。

ふしみななお
伏見 七夫

- 派遣元：岐阜県高山市 ■ 派遣期間：H28.4.1～H30.3.31
- 派遣先所属：産業振興部農林課
- 派遣先の主な担当業務：農畜産業の振興



私は、高山市を定年退職後に再任用により岐阜県市長会を通じて釜石市へ派遣いただき、2年間お世話になりました。私自身は、能天気な性格と体力にも恵まれ毎日を過ごす事ができましたが、他の自治体からの応援職員で体調を崩し、精神的にも衰弱している姿を見ることがあり、同じ応援職員としてつらい思いをしました。自治体ごとの事務システムの違いや職場の雰囲気、体制の難しさを感じました。

間もなく大震災の発災から10年を迎えられますね。ライフライン等の復興の姿を報道で折に触れ拝見しています。また、1試合のみの開催となってしまいましたが、ラグビーワールドカップの釜石鶴住居復興スタジアムでのゲームは世界が称賛し、大漁旗が青空になびく光景には鳥肌が立ちました。被災者の方が失われたものは何年たっても癒えないと思いますが、釜石市で知り合った人たちの結婚の知ら

せに触れる度に、こうして命が繋がれていく事をうれしく感じています。

業務としては、短角牛の放牧地、和山牧場の衛生管理に携わりました。除染により更新された放牧地で多発していた低マグネシウム血症の対策を、地元NOSAIの獣医師の協力のもと実施しました。最初は、方言がきつい農家さんとのコミュニケーションが大変でしたが、対策の成果が出るにつれ理解いただき、遅くまで酒盛りした事、離任する際に送別会を開いていただいた事が思い出です。

今は、Withコロナの社会。命を守る家籠りから、正しく恐れて経済活動を動かして行く時となりました。5年先、10年先に振り返った時に、あの時自分はどの行動したか、悔いがないよう生きていこうと思います。釜石市で経験させていただいた不屈の精神を思いながら。ハイ、岩手!!

しむらまさひと
志村 匡仁

- 派遣元：東京都北区 ■ 派遣期間：H28.4.1～H30.3.31
- 派遣先所属：(H28) 総務企画部ラグビーワールドカップ2019推進室
(H29) 市民部生涯学習文化スポーツ課
- 派遣先の主な担当業務：(H28) ラグビーワールドカップ2019
(H29) スポーツイベントの準備、市民体育館建設事業



被災地応援は、私にとってかけがえのない出会いと学びの機会でした。

私が派遣されたのは、釜石市がラグビーワールドカップ2019の準備に取り組み始めた頃でした。市内には、大会を励みに復興に取り組みたいという考えと、それどころではないという考えがあり、その繊細な気持ちに寄り添いながら、市職員の皆様が様々な事業を進めていました。

私は1年目、大会準備の担当部署をお手伝いさせていただきました。契約やシステムなど、市の仕事の進め方を知らない中でしたが、私自身がラグビーをしていたことが幸いしたのか、気運醸成を担当し、たくさんの方々と地道な活動に取り組みました。

2年目には、スポーツ全般の普及・推進のお手伝いもさせていただきました。ラグビーの聖地と言われる釜石市で、ラグビー以外にもスポーツによる復興への熱い思いをお持ちの方々と、イベント開催等で関わ

らせていただいたのは大切な思い出です。事務処理は市職員の方に代わっていただきつつ、施設管理等の業務改善のお手伝いやイベントの発展可能性を考えたりと、できることに専念させていただきました。

振り返ると、仕事でもご近所付き合いする中でも、市民の皆様ととても近い距離で一緒に復興を考えさせていただきました。私は、行政に求められる協働とは何か、市民の力とは何かを学ばせていただいたのだと感じています。

そして、とてもたくさんの方のお世話になりました。その誰もが日本を、世界を見てお話をしていたのが印象的です。そうした方々が、一人一人とのつながりを大事にされ、今でも訪れる度に仲間として温かく迎えて下さることを感謝せずにはられません。

末筆ながら、大会レガシーを弾みとし、釜石市が、ひいては岩手県がますます発展することを祈念いたしまして、結びの言葉とさせていただきます。

たかはし よしなお
高橋 良直

- 派遣元：愛知県東海市 ■ 派遣期間：H29.4.1～R2.3.31
- 派遣先所属：(H29) 総務企画部ラグビーワールドカップ2019推進室
(H30・31) ラグビーワールドカップ2019推進本部事務局
- 派遣先の主な担当業務：ラグビーワールドカップ・イベント運営・施設運営



鐵の町ということでご縁のあった姉妹都市である釜石市とは、毎年震災復興部局への派遣を行っていることもあり、公私にわたり常に温かく接していただきました。

派遣当時は、震災から6年を経過した頃で、市中には建設用のダンプカーが多く走っていたことが印象に残っています。まさに釜石鶴住居復興スタジアムの建設工事着工というタイミングであったので、無事ワールドカップが開催できるのかと不安が頭をよぎりましたが、ワールドカップ開催に合わせて、道路網の開通と三陸鉄道の開通(山田線の復旧)、ファンゾーンの会場となった市民ホールの建設など、目に見えて施設の整備が進み、いつの間にか市中でダンプカーを見つけることが珍しくなってきました。

ワールドカップは、2019年9月25日にフィジー

対ウルグアイ戦を14,025人の入場者を迎えて開催し、東日本大震災から復興した姿と感謝の想いを世界に向けて発信することができたと思います。残念ながら、令和元年東日本台風のため第2戦目は中止となりましたが、カナダチームの選手たちによる被災家屋の清掃ボランティア活動が、世界中から称賛の声が挙がったことは記憶に新しく、誇りに思う出来事でした。

震災から10年を経過する中で、復興に取り組みながら未来への夢と託した一大イベントに関わられた市民並びに関係者の努力と想いには敬服いたします。決して短くない3年間でしたが、あっという間に時が経過したというのが所感です。

また皆さんと、釜石鶴住居復興スタジアムでナミビア対カナダ戦の試合の場で再会し観戦することを夢見て、新しい釜石市のスタートを応援したいと思います。

ありやま たかこ
有山 貴子

- 派遣元：鹿児島県南さつま市 ■ 派遣期間：H30.4.1～H31.3.31
- 派遣先所属：市民生活部市民課
- 派遣先の主な担当業務：市民登録業務



本市は平成24年度に大槌町に1名派遣し、同年に釜石市と「災害時の相互応援に関する協定」を締結後、平成25年度から平成30年度まで釜石市へ毎年1名ずつ応援職員を派遣しました。私は本市から最後の応援職員として派遣され、東日本大震災から7年が過ぎた釜石市の復興に1年間携わることができました。

赴任に当たっては、ある程度の要望を聞いて両市の職員係間で調整され、赴任・帰任日程の決定や応急仮設住宅への入居手続きなどを行うことができました。住居は応急仮設住宅が指定ホテルを選択できたようですが、前任者から家電製品等を譲り受けることができたため、入れ替わりで応急仮設住宅を使用することにしました。私個人の意見としては、自由に自炊や洗濯ができ、収納スペースや自家用車の駐車場の確保ができたので、応急仮設住宅を選んで良かったと思います。

配属先の市民課市民登録係は、9名のうち4名が応援職員で、職員同士もコミュニケーションがうまくとれて雰囲気良かったです。応援職員が定期的

に帰庁することに対して理解があり、不在時にも対応できる体制や業務分担を配慮してくださっていました。また、ワークライフバランスの一環として月に1日以上の子休取得を推奨し、係全員が無理なく働けるように声掛けしていました。

県が実施する応援職員に対するメンタルヘルスの講習会や面談(2回)、雪道安全運転講習会が実施され、メンタルケアや派遣生活へのフォローがあり大変助かりました。派遣先へ直接相談しづらいことも第三者機関に話すことで心理的負担が軽くなったような気がします。また、応援職員同士で情報交換することもできました。

最後に、派遣中、釜石市の皆さんには大変お世話になりました。釜石市での経験や人との出会いは、私のかげがえのない宝となりました。本当にありがとうございました。

今後ますます発展する釜石市を遠く鹿児島県から応援しています。

福岡県北九州市 危機管理室危機管理課

釜石市と北九州市はともに「製鉄のまち」としてゆかりがあり、震災以前から「明治日本の産業革命遺産」の世界遺産登録を目指す間柄でした。厚生労働省からの要請を受け、震災3日後からの保健師の派遣に始まり、現在も事務職員、技術職員による支援が続いています。

平成23年8月からは本市職員が常駐し、復興への助言や両市の連絡調整を行う「北九州市・釜石デスク」を設置し、スマートコミュニティ事業の実施等につなぐことができました。

支援先を特定し、現地に常駐者を置く支援方法は、全国的にも珍しい取組だったと言えます。

また、平成25年には連携協力協定を締結し、市民交流にも取り組んでいます。

北九州市の防災マスコットキャラクター
「チェックル」



職員派遣で留意するのは健康管理です。職員は、激務に加えて異なる環境や慣れない寒さが心身のストレスになりつつも、業務への熱意が上回ることで自身の疲労に気付かないことがあります。そのため、健康状態の確認を兼ねた業務報告（2か月に1回程度帰庁）の実施や、時間外労働の確認による産業医の保健指導等、フォローには万全を期しています。

被災地支援の経験は、活動報告や職員研修を通じ、本市の防災対策にもいかされています。また、支援に関わった職員は皆「釜石愛」にあふれ、釜石市の皆さんとの息の長い交流が続いています。

こうして両市で結ばれた「鉄の絆」を、今後も大切に紡いでまいりたいと考えております。

東京都荒川区 管理部職員課

交流都市である釜石市に向け、発災直後の給水車支援を皮切りに、避難所運営や道路整備など、延べ135人にわたる職員派遣を行ってきました。令和2年度も、長期派遣職員1名が釜石市で事務従事しています。

震災当時は、自治体間での被災地派遣が現在ほど一般的でなく、時には15年以上前の阪神・淡路大震災の記録を紐解きながら、給与や服務などの取扱いについて情報収集し、かじりつくように協定書を作り上げたのを覚えています。

派遣元自治体には、派遣要請に速やかに応えるスピード感が求められる一方で、支援ニーズを正確に把握し、応援職員に使命を理解させ、現場での的確

荒川区のシンボルキャラクター
「あらみいとあら坊」



な活躍につなげることも同時に求められます。暗中模索と試行錯誤の連続でしたが、自然災害に際して自治体に何が求められるのかを実例から学ばせていただき、区の災害対策を有為で実践的なものに練り上げていくための貴重な財産を得ることができたと感じています。

震災以後、とかく人々の「絆」が重要視されるようになりましたが、地方自治体間の「絆」も同様に強まったと感じます。時に助け、時に頼り、また助ける、という自治体間の好循環を広げ、「絆」を次代につなげていきましょう。

岐阜県 市長会事務局

未曾有の被害をもたらした東日本大震災の発災から10年の歳月が経過しました。

ここに改めて、震災で犠牲になられた方々のご冥福をお祈りいたしますとともに、被災されました皆様に心よりお見舞い申し上げます。

さて、岐阜県市長会では、被災地の一日も早い復旧・復興に向けた取組に少しでもお力になればということで、震災直後の平成23年度から、県内各市のご協力をいただきながら釜石市への職員派遣をさせていただき、令和2年度までに延べ209人の派遣を行いました。

県内各市におかれては、行財政改革の一環としての職員数適正化に取り組まれており、人員調整が大変厳しい中ではありましたが、希望される職種・人員に可

能な限り沿えるよう派遣いただいたところ です。

ご存知のとおり、昨今では、毎年のように各地で大規模自然災害が発生していますが、県内各市で取り込まれる災害対策に応援職員の皆様の貴重な経験がいかされ、対策の充実・強化につながることを心から期待するものでございます。

終わりに、県内各市及び応援職員の皆様に改めてお礼申し上げますとともに、被災地の復旧・復興と今後ますますの発展を心から祈念いたしまして、記録誌に寄せる言葉といたします。



市町村長メッセージ

大槌町長 平野 公三



東日本大震災津波により大槌町は甚大な被害を受け、当時の町長をはじめ、多くの職員が犠牲となりました。インフラが完全に破壊され、また、庁舎も被災し、あらゆるシステムが機能せず、資料も文書も、何も手元にないという厳しい現実が目の前に突きつけられました。

想像を絶する緊急応急対応や気が遠くなるような膨大な復旧・復興関連業務に向き合い、終わりが見えない日々が続いてきました。多くの職員が家族を亡くし、家を失い、自らが被災者であるにもかかわらず、昼夜を問わず被災者支援に埋没していかねばならない状況が続いておりました。

そのような中、全国の自治体や民間企業等から、自らの生活を顧みず駆けつけていただいた多くの応援職員の皆さんのおかげで、なんとか業務を遂行できる体制が構築できました。震災直後から令和2年10月1日現在まで、大槌町へ派遣された職員数は民間企業も合わせると114団体、延べ977名となっております。

応援職員の皆さんには、復興事業の推進と住民の一日も早い生活再建のため、不慣れな環境の中で、これまでに培われてきた知識・経験を駆使し、懸命に取り組んでいただきましたことに改めて感謝を申し上げます。

そして今、東日本大震災津波から10年目という

大きな節目を迎えております。当町では昨年までに、自立再建の柱となる土地区画整理事業や防災集団移転促進事業による宅地整備、876戸にも及ぶ災害公営住宅の建築が完了し、令和2年3月末をもって、町内全ての応急仮設住宅の供用を終了したところがあります。ここまで到達できたのも、応援職員の皆さん一人一人のご尽力によるものと感じております。

また、応援職員の皆さんを送り出された職場においては、派遣された職員の仕事を残った職員で分担し合いながら、被災地支援を間接的に担っていただいていることに併せて感謝を申し上げなければなりません。さらに、ご家族のご理解とご支援があったればこそ実現したものであり、ご家族の皆様に対しても重ねて感謝申し上げる次第であります。

応援職員の皆さんには、復旧・復興事業を肌で体感・体験する中で得た、防災や災害復興等に対するいきた知識・経験を持ち帰り、職場の皆さんや地域住民の皆さんに「忘れないで」「伝えて」いただき、将来起こり得る様々な災害への対策に向け、「備えるため」の財産としていただければ幸いです。

結びになりますが、これからも、皆さんとの「縁」と「絆」を大切にしながら、新たなまちづくりにまい進してまいります。本当にありがとうございました。

復興の状況



町の中心部（御社地地区）



鮭とひょうたん島の町（大槌駅観光交流施設）



大槌学園（義務教育学校）



おしゃっち（大槌町文化交流センター＆図書館）

第4節 大槌町

2 応援職員から

やまもと ともひさ
山本 智久

- 派遣元：北海道音更町
- 派遣期間：H23.6.20～H23.6.27、H24.4.1～H25.4.30
- 派遣先所属：H23.6.20～H23.6.27 町民課、
H24.4.1～H25.4.30 復興局都市整備課
- 派遣先の主な担当業務：土地区画整理事業、防災集団移転事業



私が初めて岩手県大槌町を訪れたのは平成 23 年 6 月、多くの職員が亡くなり窓口業務が困難を極めていると姉妹町の軽米町からお聞きし、当時防災係長だった私は岩手県庁を通じて受入れを依頼、一週間の窓口支援を務めました。その後、約 30 名の職員が交代で 9 月まで継続し窓口支援は終了のですが、もともと土木技術者の私としてはもっと役に立ちたい気持ちを抑えきれず、年末に北海道からの応援職員募集に手を挙げ、平成 24 年 4 月から大槌町への再派遣が決定しました。

当時の大槌町役場はプレハブ 2 階建て、トイレは工事用と大変厳しいものでしたが、全国から使命感を持った多くの仲間が集まり、とにかく早くこの町をなんとかしたいという気持ちで一杯でした。私は、まず地域の主だった方々に復興協議会を立ち上げていただき、常にご意見をいただきながら、土地区画整理事業や防災集団移転事業等にまい進いたしました。当時の町長は北海道から沖

縄までご支援をいただいていると挨拶でよく言うておりましたが、まさしく私たちのことで、課長が鹿児島県、班長は北海道、埼玉県、沖縄県と横並びで座り、毎月国土交通省の厳しい進捗チェックがされる中で、お互い切磋琢磨しておりました。

とにかく現地を見て、多くの地元の方々の声を聞き、区画整理区域の盛土や街並み、国道 45 号線の移設、防災集団移転の移転先団地などの計画に目処を立て、平成 25 年 4 月末で 1 年 1 か月に及んだ派遣を無事に終えることができました。

今思えば、毎日が目まぐるしく本当に忙しい日々でしたが、素晴らしい町職員の方々や応援職員の仲間にも恵まれ、とても充実しておりました。あれから毎年大槌町を訪れ、地元の方々との再会や復興が進む様子を見させていただいておりますが、第二のふるさとのような気持ちでこれからも変わらず応援し続けたいと思います。

かわの しげみ
川野 重美

- 派遣元：鹿児島県南さつま市
- 派遣期間：H24.4.1～H25.3.31
- 派遣先所属：復興局都市整備課
- 派遣先の主な担当業務：震災復興土地区画整理事業及び防災集団移転促進事業等に係る実施計画・用地買収



東日本大震災発災から 1 年後の平成 24 年度に、自治法派遣職員として鹿児島県職員の方と共に大槌町に派遣されてから 9 年が過ぎました。

被災者が住宅再建を行うための震災復興土地区画整理事業や防災集団移転促進事業、また、地域全体の復興の拠点となる津波復興拠点整備事業等の計画立案や国・県との協議、さらに県内各地に避難している被災者の意向確認調査など、新たに設置された都市整備課の初代課長として、北は北海道、南は沖縄県など全国各地から派遣された 18 名と町職員 3 名の 21 名と共に、遅れていると言われていた復興事業実施計画を、なんとか近隣の釜石市や山田町などと肩を並べる事ができるよう、区画整理事業の都市計画決定（H24.9.28）や事業認可（H25.3.7）、また防集事業の大臣同意（H24.9.4 赤浜地区の一部）を年度内に得られるよう慌ただしい

日々を過ごした事や、釜石市栗林町の応急仮設住宅での生活など、懐かしい思い出となっております。

その後、縁あって平成 30 年度と令和元年度の 2 年間、町任期付職員として前回と同じ部署で勤務する機会をいただき、復興を進める事ができました。大槌町は私にとって、まさしく第二のふるさとであります。

大槌町は被災した沿岸地域の中でも被害は特に大きく、未だ 400 名を超える行方不明者を含め 1,286 名が犠牲となりました。町を取り巻く環境は人口減少や少子高齢化の進展などますます厳しくなるものと思われまますけれども、平野町長を先頭にオンリーワンのまち創りを継続することにより、今後とも繁栄していくことを祈念しております。これからも鹿児島県から応援していきます。

キバレおおつち丸！

こばやし たけし
小林 武

担当した地区を見渡せる城山公園から



- 派遣元：埼玉県川越市 ■派遣期間：H24.4.1～H25.4.30
- 派遣先所属：復興局都市整備課
- 派遣先の主な担当業務：復興まちづくり事業(土地区画整理事業、防災集団移転促進事業)

私は、震災翌年の平成24年度に川越市から大槌町に赴任、役場調整のもとで隣接する釜石市栗林地区の応急仮設住宅に住み、被災した大槌小学校校庭に設置された仮設プレハブ庁舎にて、北海道から沖縄県まで、全国から派遣された同僚の応援職員、町職員とともに復興まちづくり事業に従事しました。

大槌町に来て目にした光景は未だに忘れられません。震災から1年が経過し、がれきはほぼ撤去されましたが、雑草すらなく基礎だけが残る住宅の跡やむき出しの鉄筋構造物、津波と同時発生した大火災によって黒く焼け焦げた木々や大槌小学校の校舎、被災した旧役場庁舎は津波の恐ろしさを実感するものでした。

復興元年と言われたこの年、自分たちの役割は被災者の声を聴く作業に費やした1年でした。実施した懇談会は計60回、このうち町外避難者の多い内陸の遠野市、花巻市や盛岡市でも開催。この他にも仮設住宅集会所で行った相談会など、一人でも多く

の被災者と会い、話すことが復興への一番の近道と考えていました。震災前の町を知らない“よそ者”の応援職員にとっては、顔を覚えてもらい信頼を得ることが重要でした。また、町の歴史や文化、人々の思い出を知る必要があると考え、震災前の写真を取り寄せ、一枚一枚を見て、復興計画にどのようにいかすのか議論しました。この想いは帰任後も、後任の応援職員が引き継いでくれたと思います。

このたび震災から10年を迎え、復興まちづくりが進捗し、三陸鉄道や三陸沿岸道路の整備も進みました。震災前にはなかった高速道路ネットワークは、大槌町の価値を高める重要なインフラです。これをいかし、町の賑わいや人々の生活に活気が生まれることが本当の意味での復興だと思います。私にとって、大槌町は第二の故郷となりました。これからも時々訪れて町の方々と付き合いを深めるとともに、川越市でも大槌町の現状や素晴らしさを伝えていきたいと思っています。

あかみね つよし
赤嶺 斉

- 派遣元：沖縄県豊見城市 ■派遣期間：H24.4.1～H26.3.31
- 派遣先所属：復興局都市整備課
- 派遣先の主な担当業務：復興まちづくり事業(土地区画整理事業、防災集団移転促進事業)



県・市町村の受入体制等については、宿泊先の確保などを派遣先の県で一括対応していただくと良いと思います。また、帰省費用の支弁は派遣元自治体で対応が分かれていたことから、可能な限り一律となるスキームがあると良いと思います。

気候や言葉、文化の大きな違いに戸惑う自分に、町民及び町職員が温かく接していただいたことから、感謝と安堵の気持ちが湧き、改めて自分をやる気にさせていただき、派遣時は大変お世話になりました。地元でもTVやインターネット等で岩手県や大槌町の名が出るたびに食い入るように見る自分がいます。一日も早く復興し、被災前より賑やかな地になる事を祈念しつつ、またいつか訪れたいと思っています。

職場は土地区画整理事業の経験者も多く、復興事業について意見交換しやすい状況でした。防災集団移転促進事業は皆未経験で、赴任後1か月ほど勉強会的な業務の進め方となり歯痒いものがありました。復興事業の体制が大学の先生方、コンサルタント等と協働で対応することを知りとても勇気づけられました。職場は北海道から沖縄県までの職員が所

属し、まさにオールジャパン。皆“被災住民のために”という強い思いを共有し業務に従事していたので心強く、雰囲気もとても良かったと思います。

生活面では、当初は応急仮設住宅に入居しましたが、寒さが予想を遥かに超えて非常にこたえ、辛かったです。業務に慣れるまで相当な残業となったため食事がレトルト等に偏り体調不良気味でしたが、その後、町が用意してくれたアパートへ入居できたことで生活面での不安要素が減り助かりました。

派遣業務を通じて、事前復興などの防災・減災につながる取組の重要性を強く感じたので、機会を捉えて伝えていきたいと思っています。また派遣先自治体と派遣元自治体とのつながりを強める取組を行っていきたく考えていますが、相当の年数がたった今、ほとんどできずにいる自分に歯痒さを感じています。

被災地と大災害が未経験な地域との災害に対する温度差が非常に大きいと感じており、また自助・共助の意識が不足し公助ありきで物事を考えているようにも見えることから、災害に対する意識が薄れないよう取り組んでいきたいと思っています。

第4節 大槌町

2 応援職員から

なかに あきひこ
中谷 明彦

- 派遣元：大阪府富田林市 ■ 派遣期間：H25.1.1～H25.3.31
- 派遣先所属：総務部総務課
- 派遣先の主な担当業務：総務・秘書業務全般



大槌町は津波により庁舎が全壊し、過去の文書や資料が流出した上に多くの職員が犠牲となりました。町への応援職員の多くが現場に配属されている状況にあり、総務・秘書業務での応援希望があったことを受け、私のこれまでの職歴が少しでも震災復興の手助けになればとの思いから派遣を希望しました。

赴任の際、震災から2年が経過しても、がれきが片付けられただけで基礎が残り荒れ野原となっている町の状況を見てがく然としたことを思い出します。終わりの見えない復興への苛立ち、度重なる入札不調や毎晩深夜にまで及ぶ業務で昼休みには多くの職員が机に突っ伏すなど、職員の疲弊も目の当たりにしました。

大槌町での職務内容は、総務・秘書業務に限らず、視察対応、法規審査、条例改正、議会対応、町勢要覧、機構改革、県との合同慰霊祭の開催など多岐にわたりました。派遣に当たっては、大槌町からの宿舎の提供など受入体制が整っていたことや公私にわたる職

員との交流、町民とのふれあい、県による派遣中の支援、また、派遣に快く送り出してくれた派遣元自治体のバックアップなど、私を取り巻く全ての環境に恵まれていました。私の派遣後も引き続き応援職員が派遣されたことや、近隣自治体にも応援職員の輪が広がったこと、そして、派遣元自治体の小学校で震災伝承の教育が広がったことをうれしく思います。

この手記に寄せて、改めて当時を振り返ってみると、応援職員であった私が逆に多くの勇気をいただいていたと思います。そして、交流やふれあいが絆として今も続いていることに喜びを感じるとともに、派遣終了の際、大槌小学校のみなさんからいただいた感謝の手紙を励みに今も頑張っています。

復興は、元の状態にすることではなく、さらに良い町となること。まだまだ道半ばかもしれませんが、大槌町がさらに良い町となることを願っています。がんばっぺし大槌！ がんばっぺし岩手！

いまい しげのぶ
今井 重伸

- 派遣元：新潟県長岡市 ■ 派遣期間：H25.4.22～H27.3.31
- 派遣先所属：復興局復興推進課
- 派遣先の主な担当業務：災害公営住宅関係業務



私に大槌町への派遣の打診があったのは、平成25年1月下旬でした。長岡市からの長期派遣は前例がないこともあって、事前に大槌町で業務・生活について打ち合わせしたため、スムーズに業務に加わることができました。

震災2年後に赴任しましたが、町は一部被災建物がまだ残っているなど、復興には程遠い状態でした。長岡市も平成16年に被災し大規模な被害を受けましたが、2年後はインフラ復旧は終わり、災害公営住宅も半分程度完成していました。平成25年4月の大槌町は、長岡市の震災直後2か月目の姿のようでした。

大槌町は応援職員の割合が高く、私の所属した班も6人全員が応援職員か任期付職員でした。全国からの集まりのため、いろんな考えでより良い方向に進められたことは良かったですし、ここでの地域性については、他班の町職員から助言をもらい助かりました。今となっては笑い話ですが、住民（特にお

年寄り）の訛りが理解できずに苦しんでいたら、今井さんの訛り（長岡弁）も理解できないと言われたことを思い出します。

大変だったことありますが、今思い返すと良さ思い出ばかりが目につかびます。

派遣が終わり6年がたちましたが、派遣後も何度か大槌町を訪れ、復興状況を見ながら、ホタテ、ウニ、イカ・・派遣時に知った味を楽しんでいます。ワールドカップは行けませんでした。前哨戦の日本対フィジー戦は観戦することができました。最近ではコロナ禍で岩手県に行くことはできませんが、山田の醤油が長岡市で売られ、長岡（栃尾地域）の巨大油揚げが大槌町で売られる等、民間の経済レベルでの交流が進んでいることをうれしく思います。

今後も、私は岩手県と交流（応援）を続けていきたいと思っています。そういう意味でも、応援職員として働く機会を与えていただいたことに感謝しています。

なかお ゆうじ
中尾 祐次

- 派遣元：神奈川県横浜市 ■派遣期間：H26.4.1～H28.3.31
- 派遣先所属：復興局環境整備課
- 派遣先の主な担当業務：災害公営住宅入居管理業務



東日本大震災が起こった直後は、教育委員会で課の庶務担当として被災地派遣に行く職員の調整業務を行っており、調整役の自分が被災地に行けないことがずっと心残りとなり、2年後に異動した際に被災地派遣を希望しました。

岩手県や被災市町村の受入体制等の構築に際しては、今まで誰も経験したことがないほどの規模の災害でしたので、受入体制を整えていただくだけでもご苦労されたと思います。むしろ、被災地に赴任する職員は「自分はお客さんではなく、自分のことは自分でやる気概で行かなければいけない」と思います。

私が赴任した大槌町では、ピーク時には町職員よりも応援職員の数の方が多くなり、様々な議論をぶつけ合いました。自分の発言が横浜市としての発言となることには想像以上にプレッシャーがありましたが、様々な地方の自治体職員と議論することがで

き、横浜市にいただけでは得ることができなかった全国の仲間が自分の仕事の支えになっています。

町民の皆さんには、地域コミュニティの大切さを教えていただきました。よそ者の私を祭りに参加させてくれたり、私の生活のことや体調のことを気遣ってくださる大槌町の父さん、母さんもできました。

2年間の派遣期間を終えて、横浜市に帰ってきてからは、ふとした瞬間に「自分は震災復興の何の役に立ったのだろうか」と自問する時があります。その答えが出るのは10年後、20年後かもしれませんし、一生出ない答えなのかもしれません。

3月11日で震災から10年が経ちました。

今は新型コロナウイルス感染症の影響で、みんなで会うことはできませんが、いつの日か復興に向けて一丸となった町民、町職員、応援職員と復興した大槌町でお祭りでも見たいですね。

たかぎ りょう
高木 良

- 派遣元：静岡県 ■派遣期間：H29.4.1～H31.3.31
- 派遣先所属：復興局住宅課
- 派遣先の主な担当業務：公営住宅の管理



私は、平成29年度から2年間、静岡県庁から大槌町への災害派遣職員として赴任いたしました。

震災発生当時、仙台市内の大学に在学しており、発災後は震災ボランティアとして支援物資の仕分けなどの活動をした経験から、災害派遣の打診があった際には、迷わず快諾しました。

災害派遣自体に抵抗はありませんでしたが、3日間で静岡県から岩手県に引越し、4月1日から始業する必要があったため、住居や業務引継ぎなどの点に大きな不安を持っていました。しかし現地へ赴任後、役場の総務担当職員の方々から転居や業務に必要な諸手続について、適切な説明、サポートをいただいたおかげで、4月1日から安心して業務に従事することができました。また、周囲の町職員の方々も生活上の不安な点について、気さくにアドバイスしてくださったので、現地での生活にはすぐに順応することができました。

私が大槌町に派遣された時点では、町中心部のかさ上げ工事が完了したばかりで、まさにこれから住宅や商店、災害公営住宅の建設が始まろうとしていました。役場での私の主な業務も、こうした災害公営住宅への被災者の入居手続きなどを行うことでした。毎日のように町民の方から入居の相談や家賃の相談を受けましたが、公営住宅制度上、必ずしもご希望に添えない場合もあり、ジレンマに苦しむこともありました。一方で、入居手続きの最後の鍵を渡す際に、入居者が涙ぐんで喜んでくださったときには、業務のやりがいを強く感じました。

2年という短期間でしたが、被災者の方々と同じ応急仮設住宅に住み、復興事業に関与できたことはとても有意義でした。町職員の方々はもちろんのこと、今後、復興という大事業に携わるの方々には、心身の健康を大事にいただき、日々を過ごしていただけたらと思います。

第4節 大槌町

2 応援職員から

せき かつゆき
関 勝之

- 派遣元：長野県軽井沢町 ■ 派遣期間：H30.4.1～H31.3.31
- 派遣先所属：復興局復興推進課
- 派遣先の主な担当業務：工事契約関係



私が大槌町へ派遣された時期は復興事業が終盤に差し掛かっており、大部分の工事が完成していました。津波の被害があった場所も家屋が建ち始めており、被災の傷跡もだんだんと消えてきているという状況でした。

私が配属された部署は、復興推進課という主に工事の契約等を行っている部署でした。職場環境については、町職員の皆さんがとても親切で職場の雰囲気も良く大変過ごしやすかったです。

住居は応急仮設住宅でした。応急仮設住宅の暮らしについては、断熱がなく、大槌町より気温が低い地域からの派遣であったため、夏の暑さがちょっと大変でした。逆に冬の寒さは平気でしたが、暖かい地域から来ていた応援職員は冬の寒さはつらいとのことでした。

被災直後の様子は話でしか聞いたことがありませんが、町職員の負担は相当なもので、深夜や明け方まで仕事をするというような状況が続いていたと聞

いています。これを解消するには、マンパワーが必要だと思います。災害が起きた時には1日でも早く多くの応援職員の派遣を行い、町職員の負担をできる限り減らせればと思います。早急な応急仮設住宅の設置による被災者の避難場所の確保はもとより、応援職員の早期の受入れが可能になると考えます。

この東日本大震災でかけがえのない多くの方の命が失われました。大槌町も旧役場庁舎が被災し同僚職員が亡くなるなど、悲しい思いや大変な思いをされたかと思います。私たちには想像ができないほどの出来事だったと思います。

復興事業はおおむね完了しましたが、被災した方へのケアやコミュニティの再生など継続して取り組まなくてはならないことはまだまだたくさんあるかと思っています。しかし、皆さんのひた向きさや明るさを見てみると、きっと乗り越えられると思います。一日も早い復興を願っています。

かわぶち ゆうだい
川 雄大

- 派遣元：東京都千代田区 ■ 派遣期間：H31.4.1～R2.4.3
- 派遣先所属：復興局環境整備課
- 派遣先の主な担当業務：調査回答や支払いなどの事務



私は、大槌町役場にて1年間勤務しました。

大槌町への派遣を希望した理由は、月並みですが「東日本大震災の復興の力になりたかったから」です。

震災当時、私は高校を卒業し、春休みの最中でした。そんな中、テレビ越しに被災地の惨状を目の当たりにし、大きくショックを受けたことを覚えています。そして、千代田区役所に入庁後、大槌町への被災地派遣があることを知り「私でも力になれるなら」と派遣を希望いたしました。

実際に大槌町に到着してみると、想像以上に町は復興しているように見えました。スーパー、コンビニ、図書館は通常通り営業していましたし、道路もきれいに整備されていました。新しい家も立ち並び、ここは本当に津波の被害があったのかと思ったのが第一印象でした。

しかし、一步海に近いエリアに足を踏み入れてみると、そこは空き地だらけで、重機やダンプカーが多く

走っていました。私がきれいな町だと思っていたのは、復興がある程度形になった一部の地区だったということ、まだ復興は完了していないのだということを思い知らされました。ですが、1年間を通し、町の復興していく様子を間近で見ることができました。そこに少しでも関わることができたのなら幸いです。

当手を振り返って、町の皆様は私のことをとても温かく受け入れてくださいました。体制・制度面でも町の職員の方と同様に扱っていただき、また帰省の補助も十分にいただいたこともあり、1年間大きく不安になることもなく業務に集中することができました。また、職員の皆様には本当に色々とお助けいただきました。仕事の進め方はもちろん、生活に関しても町のことやおいしい飲食店を紹介していただくなど、多方面にわたりサポートをしていただきました。本当に頭が上がりません。

1年間、ありがとうございました。

東京都立川市 行政管理部人事課

立川市では、平成24年度から令和2年度までの9年間で、岩手県大槌町に対し、延べ16名（一般事務6名、土木技術10名）の職員を1年単位で派遣してきました。

当初は、現地の状況も分からず、被災地への長期派遣が初めてということもあり、応援職員に対してどのような支援をすれば良いのか手探りの状態で、1人目の職員には大きな負担を掛けてしまったと思います。それでも、派遣された職員は、各々が大変な苦勞をしながらも力を尽くしてくれて、大きな成長とともに、被災地復興に対する強い想いを抱いて帰ってきます。派遣延長や2回目の派遣を希望した職員もあり、非常に心強かったです。

毎年の職員派遣は、人員確保（特に土木技術）の点

において苦勞した面もありますが、少しでも復興のお役に立てていることはうれしいことですし、立川市にとっても得るものは大きかったと感じています。特に、応援職員は被災地での業務を経験しておりますので、もし立川市で災害があったときには、大きな力を発揮してくれるものと思います。

現在も2名の応援職員が奮闘していますので、大槌町職員の皆様の力となり、復興が少しでも早く完了することを心より祈念しています。



立川市キャラクター
「くるりん」
©立川市

兵庫県神戸市 水道局

神戸市水道局は、発災当初から大槌町の給水支援等に携わった経験から、国の水道復興支援連絡協議会において、「大槌町水道施設復興基本計画」策定支援を担当することになりました。

策定を担当する職員は、大槌町の応急給水・災害査定支援を担当し、町の水道システム及び地形等を熟知した職員を派遣しました。計画の策定に当たっては、町の復興計画との整合を図りながら、短期間で施設配置から維持管理まで考慮した計画としています。震災から10年になりますが、大槌町水道の姿はこの計画を基に整備し運用されています。

派遣した職員のバックアップとして、現地をよく知る職員による神戸市からの遠隔サポート体制を整え、神戸市水道局全体で支援する形をとりました。また、派遣職員が大槌町のイベントや祭りなど交流の場に参加し、復興支援にとって大切な人と人とのつながりを築くことができました。（神戸市水道局からの派遣：延べ97名）



大槌町役場にて、応援職員と町職員と一緒に

また、水道から始まった大槌町と神戸市のつながりから、町の復興支援に神戸市OBおよび神戸すまいまちづくり公社から18名の職員派遣が行われました。

現在も、神戸市水道局の職員は、公私にわたって大槌町職員と連絡を取り合い、度々訪問して交流を深めるなど、互いに震災経験を持つ都市として、心のかかわりを築いているところです。

最後になりますが、人・物・心での復興が一歩ずつ進むことを祈念いたします。

市町村長メッセージ

山田町長 佐藤 信逸



東日本大震災津波の発災から、10年の歳月がたちました。

当町は、死者・行方不明者 825 人、家屋の被害 3,369 棟と町内の約半数の家屋が被災しました。この未曾有の大災害により発災直後から緊急対応など多忙を極め、これと並行して復興計画の策定や膨大な復旧・復興事業と、未だかつて誰も経験したことのない規模の業務に息つく暇もない状況がありました。

そのような折、どの自治体でも限られた人員で業務に当たる中、職員を派遣していただいた自治体、そしてこれまでご尽力いただいた応援職員、また不慣れな土地へと送り出していただいた職員のご家族の方々、全ての皆様に感謝を申し上げます。

当町へ派遣いただいた職員数は、令和元年 10 月に襲来した令和元年東日本台風での災害派遣と合わせ、47 団体、延べ 396 人となっております。皆さんの献身的な活躍により町内各地では、新たに整備された宅地での住宅再建、災害公営住宅への入居、沿岸部では復旧した防潮堤など、多岐にわたる業務の成果が現れております。復興まちづくりの指針である山田町復興計画の計画期間を 10 年とし、具体

的に復興を進めていく中では、想定した通りに事業が進まないなど、応援職員の皆さんには大変ご苦勞をお掛けしたと思っておりますが、おかげさまで復興計画の最終年度という一区切りを迎えることが出来ました。

災害から今日までの道のりは、決して平坦なものではありませんでしたが、ここまでの復興を成し遂げることができましたのも、全国の自治体から駆けつけてくれた応援職員の皆さんの力強いご支援とご協力の賜物であると強く実感しております。

来年度以降につきましても、令和元年東日本台風災害からの復旧、新道の駅や山田小学校の建設など、まだまだ課題が山積しておりますが、「個性豊かにひとが輝き まちが潤う 山田町」を目標に掲げ、さらにより良いまちづくりが実現できるよう、一致団結して取り組んでまいります。

末筆ではございますが、改めまして、これまでの多大なるご支援に感謝申し上げますとともに、災害派遣が縁となり生まれた自治体間、職員同士の絆を大切に、町の更なる発展に向かい今後も一層尽力してまいりますことをお誓いし、ご挨拶とさせていただきます。

復興の状況



中心市街地（陸中山田駅周辺）



新生やまだ商店街



県立山田病院



山田町ふれあいセンター「はびね」（図書館）

せとう かずひで
瀬藤 和秀

- 派遣元：和歌山県和歌山市 ■ 派遣期間：H23.7.1～H23.9.30、H27.4.1～H30.3.31
- 派遣先所属：復興企画課
- 派遣先の主な担当業務：復興推進業務

震災後、テレビで連日放送されていましたが、時間の経過とともに、自分も含め周りの人もまるで他人事のような感覚になっているように感じ、居ても立っても居られず再度派遣を希望しました。

担当業務は、主に防災集団移転促進事業計画についての業務、復興支援して下さる団体の対応業務等を行っていました。職場状況は、全ての職員が通常業務に加え、復興に関する業務等に一生懸命携わり、その忙しい中でも応援職員に対しての対応も非常に良かったです。

赴任時は、復興に向け町のいたるところで工事が行われており、日に日に町の姿が変わっていききました。

被災県・市町村で受け入れていただく際、応援職員に対して個々に違う内容の手続き業務をしていただきありがとうございました。派遣先自治体の負担が大きいと思われるので、この先に他地域

で起こる可能性のある大規模災害に備えて受入側の負担を軽減できるように、派遣先自治体として、改善策や対応策があれば提示、提案等していただけたらと思います。

生活環境は、必要な生活設備があったので、不自由することなく良かったです。

山田町は、風光明媚な住み良い町であると思います。復興後の新たな賑わいを創出し、町民が安心して安定した生活ができるよう、また町外からの定住者や観光客が増え町中で多くの人々が行きかうよう、行ってみたい・住んでみたい魅力ある山田町を目指して下さい。

この先、いつか起こる可能性のある大規模災害に対して、地元で発生した場合の復興業務に経験をいかしたいと思います。また他所での災害に対しても、自分でできること（応援職員等）を行いたいと思います。

すけがわ かずのり
助川 和典

- 派遣元：青森県南部町 ■ 派遣期間：H26.4.1～H28.3.31
- 派遣先所属：建設課
- 派遣先の主な担当業務：大沢地区漁業集落防災機能強化事業、土木事業

派遣を希望したのは、復興のお手伝いを少しでもできたらという気持ちと将来に予想される地震災害等への準備として、復興事業に携われる経験を派遣元自治体へ役立てる使命があったからでした。

南部町と山田町は平成24年に災害時における相互応援に関する協定を結んでおり、受入体制計画も整備され、体制は万全であると感じました。

赴任時のまちの様子は、応急仮設住宅、プレハブの仮設店舗、建築物や公共施設の撤去工事、高台道路や各地区の団地造成等、慌ただしい中でもONE TEAMとなって町の復興が進んでいると感じました。

担当業務は、大沢地区の漁集事業及び土木事業における工事、住民合意形成に携わりました。と

ても雰囲気の良い職場でなんでも相談しあえる環境でした。

町職員の方々をはじめ、応援職員同士のつながりや地域の方々にもお世話になり、また、応急仮設住宅への入居も2回目ということもあり、不安もなく快適に過ごすことができました。

仕事面はもとより、生活面においても、様々な方に大変お世話になり感謝しかありません。全ての経験が私の財産となりました。山田町は私にとって第二の故郷です。派遣後も何度もお邪魔していますが、当時の事が思い出され感慨深い想いになります。一刻も早い復興と更なる繁栄を願っております。

公私共に全力で復興事業に関われた経験は、全ての仕事にいかせたいと思います。『気は心』という気持ちを忘れず、丁寧な仕事を心がけたいと思います。

おおまえ あきお
大前 明生

- 派遣元：静岡県静岡市 ■ 派遣期間：H26.4.1～H28.3.31
- 派遣先所属：復興推進課
- 派遣先の主な担当業務：防災集団移転促進事業・区画整理事業の進行管理



私は、山田町復興推進課に平成26年度から27年度の2年間お世話になりました。実は、震災発生の半年後の大変な時期の視察に快くご対応下さり、『派遣で行くなら山田町!』と決めて志願しました。

赴任当初は目に見える事業進捗は感じられませんが、実際には復興計画策定、防集団地の意向調査、事業計画作成、復興交付金申請など、復興事業の土台作りの苦労を知り、はたから見ると実際は全然違うと感じました。

私の担当業務は、まちなか再生計画の策定、復興交付金申請、支援団体調整、防集跡地活用の検討・事業化などでした。特に関係者間の計画・工程調整が多く、関連事業の情報共有不足、費用負担者調整のための事業経過整理、調整漏れ対応や認識相違など、苦労もたくさんありましたが、2年目が終わる頃にはだんだんと事業進捗も見て取れ、夜に復旧した住宅から明かりが灯り始めるのを見ると、なんだかうれしい気持ちになりました。

事業フェーズの変化が大きい復興事業を、誰もが未経験の中で進めていくことは本当に大変なことです。『応援職員は慣れた頃にはもう終わり』という言葉も定番でした。例えば、派遣期間を半年間ラップさせて引継ぎができれば、派遣先自治体にとっても、派遣される職員にとっても良かったのではないかと感じます。

最後になりますが、自らも被災者でありながら職責を遂行しなければいけない町職員の皆様のつらさは測り知ることもできません。反対意見等もあったでしょうし、難しい判断を迫られることもあったと思います。それでもやり抜いてこられたこと、同じ自治体職員として尊敬しております。

山田町の皆様には公私ともに大変お世話になり、感謝しかございません。私はこの派遣で知識、経験、人脈など、かけがえのないものを得ました。荒浜で神輿を担いだことも荒巻鮭を作ったことも、良い思い出です。また皆様に会いに行きたいと思います。本当にありがとうございました。

すがい だいすけ
菅井 大介

- 派遣元：北海道 ■ 派遣期間：H26.4.1～H28.3.31
- 派遣先所属：総務課危機管理室
- 派遣先の主な担当業務：防災関係、危機管理関係



私は平成26年度から27年度までの派遣でありましたことから、同時期における意見として記載しておりますことを冒頭申し上げます。県及び町職員の皆様には、応援職員に対しあらゆる心遣いと対応をしていただきました。具体的には情報誌の発行、フォローアップ面談やメンタルヘルスケア研修及び冬道安全運転講習会の実施です。

一方、課題ではありますが、一番感じたのは「被災者支援の視点」です。具体的には、町職員の業務過多や疲弊の実態がある中、応援職員は被災者支援のほか、被災直後から最前線で業務に当たっていた町職員の支援のために派遣されていることを明確にする中で、被災住民や派遣終了後の業務継続も踏まえた応援職員と派遣先自治体職員の業務分担等の構築やマネジメントが必要であると感じました。

※派遣時の印象に残った言葉（新聞掲載）「地元職員はマラソン、派遣職員は短距離走」

山田町では総務課内の危機管理室にて勤務をさせ

ていただき、担当業務は24時間危機管理・防災対応、各種計画策定、自主防災組織及び国民保護等を担当するほか、町職員として自治体、議会等の視察時に、震災時の状況等について説明させていただきました。

東日本大震災から10年が経過し、震災以降採用された職員は私が派遣された当時には全体の約30%を占めていましたが、その割合は年々増加することから、震災時に昼夜を問わず対応した職員の皆様、震災の風化と今後の職員の防災実務の習熟並びに実践能力の向上に向け、職員向けの防災教育の推進に努めていただければと思います。

現在北海道において、危機対策課に配属され防災関係の業務に従事しておりますので、震災についてしっかりと伝えるとともに、山田町での経験等をいかし「まさかはずりやってくる」との認識のもと職務を行っております。

山田町をはじめ、岩手県及び県内市町村職員皆様のご健康とご奮闘、また早期復興完了をご祈念申し上げます。

まちい かずゆき
町井 和幸

- 派遣元：神奈川県川崎市 ■ 派遣期間：H26.4.1～H27.3.31、H29.4.1～H30.3.31
- 派遣先所属：建設課
- 派遣先の主な担当業務：土地区画整理事業



山田町復興計画の「再生期」にあたる初動期と終盤の良いタイミングで、土地区画整理事業や防災集団移転促進事業を始めとした様々な事業に携わることができたと思っています。

初めて赴任した時は、解体された建物基礎等のがれきが所々山積みされ、倒壊を免れた建物や仮設店舗等で生活が再開されていました。その中で、まず始めに取り掛かったのは、本格的な復興事業に先立ち、こうした建物等の除却に関する取扱を、過去の経緯もある中で暗中模索の上整理し、移転解体に向けて権利者と交渉に当たりました。その後も工事展開等に併せて権利者との調整に奔走した1年でした。ようやく職場環境や日常生活にも慣れてきた頃には派遣任期も後半に差しかかり、今後の事業展開を見届けられないまま帰庁するのは心残りでした。

帰庁後は町職員等から山田町の様子を聞く度に、課題山積の復興事業の進捗が気になっていたところ、再び派遣の話が無い込んできたため、少しでも事業の加速化と再生期の締めくくりに貢献できればと思い、二つ返事で二度目の派遣を引き受けました。二度目の派

遣では、復興事業全般のマネジメントに携わり、この中で市街地整備事業と併せて山岳トンネルや防潮堤等といった都市部では体験することのない土木工事にも触れることができ、貴重な経験となりました。

その一方で、こうした事業調整をしていると調整漏れや手戻りが少なくなく、異なる自治体職員間の引継ぎが課題であると改めて認識しました。また、派遣元自治体の都合や家族の理解等、様々な事情はあると思いますが、土地区画整理事業のような権利者等との信頼関係構築に時間を要する事業では、腰を据えじっくり取り組む体制やその覚悟が必要と感じています。

復興事業により多くの道路、公園、下水道等が整備され、利便性、安全性が向上した一方で、今後増大する維持管理費の確保や将来にわたる経済活動の維持等、持続可能なまちに向け多くの課題もあるかと思いますが、豊富な観光資源や食材等をいかした賑わいと魅力を創出し、山田町にしかない価値向上に向けて、町職員の更なる活躍を期待しています。派遣期間を通し、町職員の方には、安心して働く職場環境等、あらゆる面でサポートしていただき、心より感謝いたします。

かとう はるひさ
加藤 晴久

- 派遣元：静岡県 ■ 派遣期間：H26.4.1～H27.3.31、H31.4.1～R3.3.31
- 派遣先所属：水産商工課
- 派遣先の主な担当業務：漁港施設の災害復旧事業



静岡県交通基盤部は、平成24年度から延べ25人の土木技術職員を山田町へ災害派遣しています。私は、平成26年度に初めて山田町へ派遣され、平成31年度から令和2年度にかけて2度目の派遣となり、通算3年間の派遣となっています。

担当業務は、町営の織笠漁港、小谷鳥漁港及び織笠漁港海岸の災害復旧・復興事業です。復旧事業は、令和元年11月に織笠漁港海岸の防潮堤が完成し、ほぼ完了しました。復旧した織笠漁港陸間は町内で最初の遠隔化システムを導入した陸間となり令和元年12月から運用を開始しています。

復興事業は、復興交付金事業等で漁港施設用地のかさ上げや旧防潮堤の撤去、照明灯の増設等を実施しており、漁港の利便性向上を図っています。町の復興計画では、令和2年度が最終年度となるため、引き続き町職員と一丸となって業務に励みます。

町職員には、慣れない環境での仕事・生活のため、

様々な面でご配慮いただいております。大変感謝しています。派遣された当初は、寒さに耐えきれず体調を崩したりしましたが、環境にも慣れ、町のおいしいカキ、ホタテを堪能し、東北のお米をお腹一杯食べ、日々“成長”しています。プライベートでは、ドライブしながら各地を巡り、四季折々の自然を肌で感じ、充実した「いわてライフ」を送っています。

静岡県交通基盤部では、災害派遣で得られた教訓・知見を活かし、本県が大規模な災害に見舞われた時、迅速な復旧・復興にいかせるよう、平成27年に35項目からなる『事前復興行動計画』を策定し、プロジェクトとして対策に取り組みました。

私は、この派遣で多くの貴重な経験をさせていただいています。静岡県に戻ってからも得た経験を活かし業務に励みたいと考えています。

最後に、町の早期復興、更なる発展を願いつつ、これからも微力ながら復興に貢献していきたいです。

いとう ひろし
伊藤 浩士

- 派遣元：静岡県沼津市 ■ 派遣期間：H28.4.1 ~ R2.3.31
- 派遣先所属：建築住宅課
- 派遣先の主な担当業務：防災集団移転促進事業、
漁業集落防災機能強化事業、応急仮設住宅の管理



私が山田町に赴任した平成28年度は、かさ上げや高台の宅地造成工事が最盛期を迎えるのと同時に、完成した災害公営住宅の入居手続きや、被災者への宅地の引渡しが本格的に始まる時期でした。

赴任当初は、防災集団移転促進事業等で町が整備した高台の宅地を、住民に引渡す際の契約事務を担当しました。住まいを再建するための土地を扱い、被災者と接する業務であるため、大きなやりがいを感じました。また、契約後の土地に新たな住宅が立ち並んでいく様を見ると、復興の進捗を実感しました。

派遣先の受入体制については、事前に住まい周辺の情報や、備付けの家電等の情報を伝えていただき、赴任の手続きもスムーズに進みました。応急仮設住宅といえども、必要最小限の準備で生活環境が整いましたので、とてもありがたかったです。冬の寒さには閉口しましたが、帰郷出張制度を利用して定期的に帰省することができたので、精神的に追い込ま

れることもありませんでした。

業務においては、公文書の体裁や書類の回議方法、会計事務等、派遣元自治体との違いに戸惑いもありましたが、職員向けの研修資料を参考に業務を続けられたところ、習うよりも慣れることで適応することができました。また、担当業務の性質上参考となる前例が無く、走りながら方針を決めていく状況でしたので、周囲と相談をしながら業務を進めました。日々の業務に追われながらも職場内の雰囲気は明るく、町職員、応援職員を問わず活発に議論ができる環境が整っていました。

最後になりますが、山田町の皆様には4年間にわたり、大変お世話になりました。いかにしてこの困難を乗り越え、復興に取り組んだのか、被災地で経験したことを語り伝えることも応援職員に課せられた使命であると思います。山田町のますますのご発展を祈念し、結びの言葉とさせていただきます。

やまだ つやお
山田 津八百

- 派遣元：鳥取県米子市 ■ 派遣期間：H30.4.1 ~ R3.3.31
- 派遣先所属：都市計画課
- 派遣先の主な担当業務：都市計画に関する業務



平成27年度からの3年間は宮古市に派遣されていましたが、沿岸部の温かい人柄や伝統的なお祭りなどに触れる中で、この地域に対する愛着が深くなりました。このことが契機となり、山田町の復興まちづくりに貢献できたらと思い、派遣を希望しました。

平成30年に赴任した当時は、町の中心部で施工中の土地区画整理事業が最盛期を迎え、土地の引渡しに伴い建物がどんどん建設されて町の復興が進んでいる状況でした。

現在、20年後を見据えた市町村の都市計画に関する基本的な方針である都市計画マスタープランの改定や、復興した町の図面作成、令和元年東日本台風災害に係る災害復旧業務等に従事しておりますが、職場は若い職員が多く、刺激を受けながら勤務しています。

私生活では、長年の趣味であるテニスをいかしてキッズテニスの指導をしており、地域の子供たちと楽しく交流しています。

受入体制等については、復興事業の多くが応援職員の力を借りて実施されていることから、今後派遣事業がなくなった時の対応が心配されます。

急激な人口減少が進んでいる中で、復興事業により整備された道路、公園、土地区画整理事業地等の基盤施設をどう活用して地域活性化につなげていくのが課題であると思います。

また、近年、日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震等の発生が懸念されていることから、災害が発生した場合を想定し、どのような被害が発生した場合でも対応できるよう、震災の教訓をいかして、平時から復興に必要なソフト等の対策を準備することが重要であると考えています。

はやし こういち
林 光一

- 派遣元：千葉県香取市 ■派遣期間：H31.4.1～R3.3.31
- 派遣先所属：都市計画課
- 派遣先の主な担当業務：土地区画整理事業



震災復興に参加したいとの思いはありましたが、遠方でもあり、これまで機会がありませんでした。今回、過去に土地区画整理事業に携わった経験があり、声をかけていただきました。

赴任してみても、十数年かけて実施される土地区画整理事業を、それも数か所同時に進め、数年で完了を迎えつつあることに驚きました。町職員やこれまでの応援職員などの大変なご苦労があったことと思います。

赴任先の住まいは町から2DKが用意され、テレビ、炊飯器、冷蔵庫、暖房器具といった生活に必要な基本的なものがそろっており、スムーズに一人暮らしの生活がスタートできたことは、大変助かりました。また、町の制度として帰省を考慮した休暇制度があり、私たち応援職員にとって帰省しやすい制度で、活用させていただきました。

赴任生活がスタートして間もなく県主催によるメンタルヘルスケア研修があり、ストレスなどへの対処方法などについて専門医を招いて実施され、大変参考になりました。また、市町村や県の方々の交

流の場もあり、岩手県の実況なども教えていただき有意義な時間を過ごしました。

恒常的には、岩手県で応援職員情報誌を発行し、応援職員の派遣状況が寄せられており参考になりました。私も寄稿を依頼され書いてはみたものの、慣れないのかまとめるのにこずりました。インタビュー形式で、文章は編集方でまとめてもらえたらと思いました。

職場は、私の職場経験に配慮していただき、土地区画整理事業などの事務支援を担当しました。職場の雰囲気は和やかで、若い方も多くいつも活気があります。

土地区画整理事業などの都市基盤整備が終盤を迎え、三陸沿岸道路の開通などもあり、それらを活用するまちづくりが重要です。また、それを担う人材育成が行政側にも町民側にも求められますが、人を育てるには時間がかかります。地域も変化しようとする中、地域の文化を磨きながら根気よく一步一步進んでいくことを祈念します。

静岡県静岡市 総務局人事課

東日本大震災は、言うまでもなく、我が国はじめて以来の未曾有の被害をもたらした大きな災害であります。このような大きな災害からの復興は、当該地方自治体だけでなし得るものではなく、全ての地方自治体が連携して早期に成し遂げることが強く求められます。

そこで、本市では、全庁を挙げて協力・支援をするべく、早急に応援職員を募り、平成23年7月から令和元年度末まで途切れることなく派遣を行いました。

職員派遣をする上で苦労したことは、厳しい定員管理計画のもと限られた人員の中で、継続的に応援職員を確保することです。これに関しては、災害対応は持ちつ持たれつということで、被災自治体の要望にできる限り協力できるよう、毎年各部局と調整をしてきました。

また、非常に大変な状況の中で業務をしていることもあり、応援職員の健康管理に関しては、特段の注意を払いました。普段のメールや帰庁報告時など様々な機会に、要望や困りごとがないか確認し、些細なことでもできる限り対応してきました。

職員派遣を通して得たことは、被災地の復興支援という極めて大変な業務で、苦労する場面も多々



左から葵区、駿河区、清水区のキャラクター
葵区の「あおいくん」、駿河区の「トロペー」、清水区の「シズラ」

ありますが、それぞれの職員が達成感を持ち、たくましくなって帰ってきたことです。また、静岡市では、大規模な被害が想定される「南海トラフ大地震」に備えた防災対策に取り組んでおり、現地での経験は、本市の防災対策に大いに活用できるものとなっています。

さらに、被災自治体や全国の応援職員との親交は現在もつながっており、今後もこのネットワークを活用し情報交換を行っていきたいと考えています。

静岡市としては、今後もできる限りの協力・支援を継続するとともに、被災地の復興が1日も早く進むことを心からお祈り申し上げます。

神奈川県川崎市 まちづくり局総務部庶務課

川崎市では、平成24年度から平成30年度までの7年間、延べ20名の職員を山田町へ派遣しました。

派遣のきっかけは、国土交通省の派遣意向調査から始まり、その後の調整を経て山田町への派遣が決まりました。派遣が決まった当時、多くの職員が山田町のことをよく知らない中でしたが、この7年間の派遣を通して、山田町がより身近になったと感じています。

最初の派遣時は、山田町までの交通もままならず、現地の状況も不明確で、住宅をはじめ生活環境も厳しい状況が想定される中で、派遣する職員の健康や不安への対応についても検討しながら応援職員を送り出しました。応援職員には、定期的に帰庁し報告すること、帰庁の際は必ず健康相談を受けることとし、また、派遣が数年にわたることが想定されたため、派遣先での業務や生活の状況を定期的に報告書で報告してもらい、それを庁内で共有することで、応援職員の苦労や活躍を知ってもらい、次の応援職員が前向きに臨めるよう工夫しました。応援職員も、困難な状況の中でも前向きに取り組み、被災地の復興状況や山田町・東北地方の魅力を届けてくれたことで、職員が前向きに派



山田町から贈られた横断幕をバックに、庶務課のみなさん

遣を希望する状況が継続できました。

派遣から戻った職員も、派遣で培った経験を存分に発揮し、川崎市においても土地区画整理事業や交通政策関係などの幅広い分野で活躍しています。また、山田町職員や派遣で一緒だった他自治体の職員との交流、職場の仲間などと山田町を訪れたり、現在も関わりを継続している職員もおり、業務以外にも貴重な経験になったと感じています。

今後も、山田町、岩手県をはじめ東北各県の復興と発展を応援していきます。

市町村長メッセージ

宮古市長 山本 正徳



東日本大震災津波後、全国の自治体から多くの職員を派遣していただきながら、「必ずや復興を成し遂げる」この強い思いを胸に、復興への歩みを進めております。この場をお借りし、これまでご支援くださいました全国の自治体及び応援いただきました職員の皆様に、心より感謝を申し上げます。

また、宮古市は、職員を派遣していただいた全国各地の自治体との絆により災害時応援協定を締結したことから、平成28年台風第10号及び令和元年東日本台風においては、迅速かつ広域的な災害対策を講じることができました。

平成23年度から9年間にわたり、宮古市東日本大震災復興計画に掲げた3つの復興の柱である「すまいと暮らしの再建」、「産業・経済復興」、「安全な地域づくり」に全力で取り組んでまいりました。

今後は、被災者の生活支援、こころのケア、防災・減災対策、震災の記憶の伝承などに継続して取り組みながら、震災以降築き上げてきたまちづくりの土台を礎に、さらなる発展を目指してまいります。

「すまいと暮らしの再建」につきましては、市内全域で災害公営住宅及び宅地の整備が完了しており

ます。今後も全ての被災者の暮らしの安定に向け、一人一人に寄り添った支援をしております。

「産業・経済復興」につきましては、平成30年4月に「道の駅たろう」がグランドオープンし、平成31年3月には、三陸鉄道南北リアス線とJR山田線宮古・釜石間がつながり、「三陸鉄道リアス線」として一貫運行を開始しました。令和2年度には、三陸沿岸道路や宮古盛岡横断道路が全線開通いたします。新しい人と物の流れをいかし、観光振興などによる産業・経済の発展、産業振興に取り組んでまいります。

「安全な地域づくり」につきましては、市民の安全・安心な暮らしを支える地域防災拠点「イーストピアみやこ」が平成30年10月にオープンいたしました。また、防潮堤などの海岸保全施設の早期整備完了に向けて、引き続き関係機関と連携して取り組んでまいります。

今後も、地域防災の基盤整備とともに震災の記憶の風化を防ぎ後世へ伝承するため、宮古市所有の津波に関する文献等の資料保管の取組を進めてまいります。

活気と笑顔があふれる「『森・川・海』とひとが調和し共生する安らぎのまち」の実現のため、これからも市民の皆様と共にまい進してまいります。

復興の状況



イーストピアみやこ(市役所、保健センター、市民交流センターの複合施設)



三陸沿岸道路山田宮古道路



田老地区三王団地



鎌ヶ崎地区市街地

ささなが しゅうじ
笹永 修司



- 派遣元：山口県下関市 ■ 派遣期間：H24.4.1～H24.9.28、H26.4.1～H28.6.30
- 派遣先所属：産業振興部水産課
- 派遣先の主な担当業務：漁港施設災害復旧の査定、設計、監督

平成23年5月の宮古市への避難所支援業務を通じて、被災された方々から「遠くから来てくれてありがとう」と声をかけていただき、宮古市民の強さと温かさに触れ、技師として復興業務に携わりたいと思い派遣を希望しました。

水産課では、管理する15漁港において111か所が被災し、この災害復旧事業に係る査定、設計及び監督業務に携わりました。冬季波浪や台風による増破など問題が発生することが多々ありましたが、日々の情報共有や振り向けば親身になって相談にのってもらえる職員がいることで早期対応と解決が図れ、事業を前進させることができました。

下関市は、本州最西端に位置し、最東端の宮古市と防災支援協定を締結しています。日本海と瀬戸内海に接する下関市は、宮古市と同じ港町であることから、派遣要請の際に、漁港施設の災害復旧という業務内容と配属先が明確に定まっていたため、事前に準備をす

ることができました。宿舎は、市が借上げているホテルや賃貸住宅で、徒歩15分程度と不自由なく通勤することができました。また、業務に必要なOA機器も十分に準備されており、生活環境と執務環境の両方で不便を感じることはありませんでした。

宮古市への派遣で強く感じたことは、職員が常に前を向き力強く業務を進めていたことです。多くの職員の方に支えていただいた2年9か月でしたが、どれだけ力になれたのか、もっとできたのではという悔いが残り、復旧・復興の道半ばで宮古市を離れることがとてもつらく、悲しい思いでした。今回の派遣で得られた貴重な知識と経験、そして職員や他自治体からの応援職員との間に人脈を築き「絆」を結べたことは、私の人生における大きな財産です。第二の故郷である宮古市の一日も早い復興と発展を願い、これからも見守り続けていきたいと思っています。

いしかわ きょうた
石川 喬太



- 派遣元：秋田県大仙市 ■ 派遣期間：H25.4.1～H27.3.31
- 派遣先所属：総務部契約検査課
- 派遣先の主な担当業務：業務委託の契約事務

平成23年の東日本大震災直後に災害ボランティアで被災地の惨状を目の当たりにし、自分も何かできることはないかと考え派遣を志望し、平成25年4月から平成27年3月まで宮古市に赴任しました。

当時の宮古市は、家屋が解体されて基礎だけが残る風景が印象的で、沿岸の心地よい海風が吹く、青い空とは対照的ながれきの灰色が何とも言えない空虚感を醸し出していました。

しかし、一步職場に足を踏み入れると復興へ向けて職員が一丸となって働く姿があり、外の景色とは正反対のエネルギーを感じました。私は契約検査課に配属され入札・契約業務に従事しましたが、初めての業務内容と経験不足のため、周りに助けをもらう事ばかりで、本当に役に立っているのかが不安でした。そんな時、当時の班長が「圧倒的にマンパワーが足りないこの時に、いてくれるだけでも大助かり。派遣職員の皆様には感謝しかない」と励ましの言葉を受け、早く役に立たなければと奮い立たされました。宮古市の職員の方々からは生活面や健康面でも

気を使っていただき、体の調子を崩した時も食事を毎日届けてくださり本当に助かりました。

宮古市での2年間は、日々の業務に追われているうちにいつの間にか派遣期間が終わってしまった、という印象です。それだけ集中して取り組む事ができたという事でもありますが、経験不足のため協力が十分にできなかったとの思いが強くあります。派遣から6年がたち少しばかり経験を積んだ今なら、もう少し貢献できたのと感じています。

派遣中に最も印象に残っているのは、市職員の働きぶりです。自身も被災者であるにもかかわらず、休み無く働き、復興という目標に向かってまい進している姿に感銘を受けました。公務員とは何かを考えさせられる機会となりました。

宮古市で働いた経験は今でも自分にとっての財産となっています。これからも何らかの形で、自分にできる事があれば協力したいと考えております。最後に、宮古市職員の皆様の健康とご無事をお祈りするとともに、派遣中に関わった全ての人に感謝いたします。

かさほら こうじ
笠原 浩司



- 派遣元：東京都品川区 ■ 派遣期間：H25.4.1～H28.3.31
- 派遣先所属：産業振興部水産課
- 派遣先の主な担当業務：水産業復興事業、水産物消費拡大事業

あの大震災の直後、平成23年3月24日に品川区の救援物資第二陣に同行して初めて宮古市に入りました。その時に見た光景は今でも忘れることはありません。「このまちの復興の力になりたい」そんな想いで派遣の募集に手を挙げました。

水産課では、被災した漁協施設や水産加工会社の復旧・復興のための補助金事務や水産物消費拡大事業を担当しました。応援職員としての3年間は自分にとってかけがえのない時間です。宮古市や岩手県、漁協の職員の皆さん、漁業者や事業者の皆さん、仕事で携わった方々は、せっかく遠いところから来たのだから少しでも良い思い出をと、とても親切にしてくださいました。また、宿舎としてお世話になったホテルや市内の飲食店、縁あって友人となった同年代の仲間たち、おこがましくも助けに来たつもの自分が気付けば助けてもらう側になっていました。派遣期間で最も感心したことは、職員の皆さんが

勤務中でも飲み会の席でも批判や文句、悪口などのネガティブな発言をほとんどしないことでした。職員の大多数が地元出身ということで「助け合い」や「お互いさま」の風土が根付いているからなのかもしれませんが、自らを省みるとても良い契機となりました。

おかげさまで、派遣期間を終えて地元に戻った自分は、周りから「落ち着いた」「穏やかになった」と言われるようになっていました。自分自身でも宮古市の皆さんと接していくうちに内面が変わっていったような気がします。人として大きく成長させていただいた宮古市の皆さんには感謝しかありません。

派遣終了から早いもので5年の月日が経過しました。あの頃の気持ちを忘れずにこれからも一日一日を大事に過ごすとともに、宮古市のますますのご発展と皆さんのご活躍を心よりお祈りしています。

こんどう ともひろ
近藤 智広



- 派遣元：茨城県笠間市 ■ 派遣期間：H26.4.1～H28.3.31
- 派遣先所属：危機管理監危機管理課
- 派遣先の主な担当業務：防災・危機管理業務

全く縁もゆかりもなかった宮古市。派遣されるまでは岩手県といえば、冬場に八幡平市安比高原スキー場へスノーボードをしに行ったくらいの記憶しかありませんでした。そんな自分のような者でも大変温かく受け入れていただいたことを改めて思い出します。その節は大変ありがとうございました。

東日本大震災直後から、個人的に時間が取れる限り東北沿岸部へ足を運び、ボランティア活動に参加しながら、現地に入って継続的に何かお手伝いできることはないものかといつも考えておりました。そのような中、縁あって平成26年度に宮古市への派遣となりました。

実際に宮古市に派遣されてみると、沿岸部は様々な復旧工事が行われており、震災から約3年が経過していましたが、復興までの道のりはまだまだ先であり、膨大な力が必要であろうことを痛烈に実感したことを思い出します。

そのような道半ばの中で、復興庁との避難路整備に係る協議や自主防災組織の支援、各種防災訓練の支援等、防災に係る様々な業務をお手伝いさせていただきました。市民の皆様とお会いする機会も多く、貴重な出会いがたくさんあり、今でも続けております。甚大な被害があったにもかかわらず、皆さん力強く前だけを見て進んでおられた姿は、今でも強く心に残っております。当時は、元気の源を逆に自分がいただいていた事を思い出します。

2年間の派遣期間の中で、様々な出来事や貴重な出会いを経験させていただいた関係者の方々には感謝しかありません。まさしく自分の中では「水が合った」宮古市。第二の故郷と思い、今後も足を運びたいと思います。これからも遠く茨城、笠間の地からではございますが、宮古市の更なる復興、発展をお祈り申し上げます。

あきひろ たいき
秋廣 大樹

平成 28 年の係の送別会にて
(後列右端が秋廣さん)



- 派遣元：東京都品川区 ■ 派遣期間：H27.4.1～H30.3.31
- 派遣先所属：都市整備部都市計画課
- 派遣先の主な担当業務：土地区画整理事業の事務

私は東京都品川区より宮古市へ派遣され、3年間、市職員や全国各地からやってきた応援職員の方々と共に働きました。

震災当時品川区に入区したばかりの私は、恥ずかしながらボランティア活動などにあまり興味を持ったことがなく、震災をどこか遠くで起きた出来事と思っていた部分がありました。そんな中、区から宮古市に派遣されていた職員の報告や体験談を読み、区役所でもこういう仕事をするチャンスがあることを知り、派遣業務に興味を湧いたのが派遣を希望したきっかけです。

赴任したのは平成 27 年 4 月で、震災から約 4 年が経過した頃でした。市内中心部はいろいろなお店が営業しており、少し見ただけでは被災地である実感はそれほど湧きませんでした。沿岸部に足を運ぶと基礎部分のみになった建物や舗装の剥がれたアスファルト等がたくさんあり、ここで復興の仕事をするのだという意識を改めて持ったことを覚えています。

配属された都市計画課では土地区画整理事業を担当しましたが、配属当初は業務知識がない上に言葉も聞き慣れず、いろいろな面で戸惑うことが多くありました。仕事に慣れてからも、うまくいかないことや悩むことがたくさんありましたが、そんな中でもなんとか 3 年間やってくることができたのは、丁寧にご指導いただいたり、一緒に悩んでくれたりした周囲の方々の助けがあつてのことだと思います。

また、業務に関することはもちろんですが、宮古市の皆さんにはお祭りやイベント等へ積極的に誘っていただいたり、おいしいお店に連れて行ってもらったり、東北ならではの生活の仕方や楽しみを教えていただいたり、プライベートも含めてとても手厚くケアしていただきました。

新型コロナウイルスの影響がいつ収束するかも分からない状況で、宮古市の皆さんも苦しい状況にあると思いますが、また必ず元気に会えると信じて共に頑張っていきたいと思います！

たに としあき
谷 敏明

- 派遣元：群馬県桐生市 ■ 派遣期間：H27.4.1～R2.3.31
- 派遣先所属：都市整備部都市計画課
- 派遣先の主な担当業務：復興まちづくり計画業務



派遣先の宮古市において 5 年間、震災復興業務に携わり、主に用地補償事務を担当しました。その間、山本宮古市長をはじめ職員の方々には大変お世話になり、ありがとうございました。用地買収は復興には欠かせない重要で大切な業務であり、事業が進捗できたことは何よりも関係地権者皆様のご協力によるものです。改めまして、お礼申し上げます。

赴任した当時の宮古市は高台団地の造成工事や区画整理事業が順調に進み、想像していたがれきの山はなく、復興工事が進んでいる状況に驚きました。桐生市において震災がれきを焼却処分したことがご縁で、宮古市と桐生市は災害時の支援協定を結び、桐生市職員として派遣されました。震災後、宮古市は大型台風の影響に遭いながらも、各部署の職員がワンチームとなって復旧・復興に取り組む姿勢を目の当たりにし、その努力と頑張りに敬服しました。国の第 1 期復興・創生期間より 1 年早く復興関連事業が完了したことは、活力ある魅力に満ちた都市として発展されることが早まったということです。頑張れ宮古！！これからは桐生市との文化交流を深め、近い将来、姉妹都市の

締結ができることを願っています。

生活面においては、指定されたアパートへ入居し、初めての一人暮らしを経験しました。できる事なら、本人の希望を取り入れたアパートやホテルへ入居できるようになれば、単身赴任の応援職員は心身ともに癒やされ、通勤等の利便性も向上したと思います。休日にはできる限りアパートに引きこもることなく、毎週のように開催されたイベントやお祭りに参加し、宮古市民の郷土愛と観光客へのおもてなしを学びました。年々、宮古市への思い入れが深まる中、おもてなし検定試験にも挑戦し合格できました。エメラルドグリーンの宮古の海はたくさんの幸に恵まれ、浄土ヶ浜をはじめとする数々のジオサイトもあり、故郷として忘れられない思い出の地になりました。

これからは、宮古 P R 隊として桐生市から宮古市を発信するとともに、震災派遣という貴重な体験をいかし、現在の勤務先である桐生市観光情報センター「シルクル桐生」において、観光案内と情報発信に奮闘したいと考えています。全国、いや全世界の皆様、桐生市でお待ちしています。 感謝

たなか ひさし
田中 久嗣

- 派遣元：大阪府東大阪市 ■ 派遣期間：H28.4.1～H30.3.31
- 派遣先所属：保健福祉部福祉課
- 派遣先の主な担当業務：被災者生活再建支援事業、被災者住宅(すまいの)再建支援事業、災害援護資金業務



平成28年度から2年間、宮古市へ応援職員として赴任しておりました。震災から5年が経過し、赴任前にイメージしていたがれきの山もなく、高台の造成や防潮堤の工事、新築住宅の建設などが至るところで行われており、復興が急ピッチで進んでいる状況でした。全国の自治体や企業から多くの応援職員が派遣されており、市職員との業務の役割分担も既に確立されている状況でした。

平成28年には台風第10号による河川の氾濫により再び大きな被害を受けてしまいました。被災された方の中には津波被害の再建後の住宅が全壊した方もおられ、復興の途上に新たな災害に遭ってしまう状況でしたが、復旧業務に携わった職員だけでなく被災された方も皆さんが津波の時に比べれば大丈夫だと話しておられたことに、宮古市の人々の我慢強さや底力を感じました。

慣れない土地ということで、岩手県や宮古市からメンタルヘルスケアの研修や面談のほか、冬道の安全運転講習の実施等のサポートもあり、冬には道路の凍結や積雪もあったためとても有意義でした。また、同じ職場の方だけでなく他部署の方からも健康や体調面の心配等頻りに声をかけていただき、心強く感じました。業務終了後や飲み会の席では震災当時の話を聞いたり、風土の違いや旬の食べ物の話など宮古市の良さをたくさん知ることができました。

派遣終了後も宮古市を訪れていますが、防潮堤や新庁舎の完成など訪れるたびに景色が変わり、着実に復興していることを実感しています。目に見えていない課題や新たな行政課題等、これからの宮古市の発展のため引き続き粘り強く取り組んでいかれることと思います。次に訪れる時にどのような変化を感じられるか楽しみにしております。

しが ことみ
志賀 紀美

- 派遣元：東京都品川区 ■ 派遣期間：H28.4.1～H31.3.31
- 派遣先所属：産業振興部水産課
- 派遣先の主な担当業務：水産物消費拡大事業

宮古市職員と
漁協の皆さんと一緒に
(前列右から2人目が志賀さん)



震災直後、ボランティアやイベントなどへ参加したことをきっかけに、現地で復興のお手伝いをしたいとの思いから宮古市派遣を希望しました。

宮古市では水産課に配属になり、震災により被災した水産物の産地信頼回復や宮古市のPRを図り販売促進につなげる水産物消費拡大事業などを担当しました。品川区にはない水産物の職場になり当初は不安でしたが、3年間が過ぎるのはあつという間で、方言も覚えることが楽しくなり、品川区ではできない皆さんの経験をさせてもらい充実した日々でした。

水産課の業務を通して、極寒の海で作業する漁業者や水産物が減少しないために調査する研究員など、多くの関係者が水産物を全国へ届けるべく日々取り組んでいることを知り、消費者として当たり前で食べることができているのは生産者側の努力があるからこそだということを知りました。

被災した方たちの話の中で印象的な言葉があります。

- ・「災害は忘れた頃にやってくるのではなく、人が忘れるから大きな災害につながる」
- ・「いつまでも被災者ではられない」

この言葉から、震災被害がまた起きないように常に防災意識を持ち後世に伝えていかなければならないとの思いや、多くの支援を受けてここまで復興してきた被災者も、支援を「受ける側」だけでなく、復興・発展を通して今度は感謝の気持ちを「伝えていく側」にならなければという被災した方たちの思いが私にも伝わってきました。

宮古市の方たちには温かい優しさで受け入れ、たくさんの経験をさせていただき本当に感謝しています。ここで出会ったつながりは私にとって宝物で、宮古市は「第二のふるさと」だと思っています。

今、宮古市は、震災直後に見た景色とは大きく変わっています。これからも宮古市がさらに魅力あふれるまちになっていくのを楽しみにしています。

みやぎ けいすけ
宮城 恵介

退任式の日都市計画課の皆さんと
(前列右から3人目が宮城さん)



- 派遣元：東京都品川区 ■ 派遣期間：H30.4.1～R2.3.31
- 派遣先所属：都市整備部都市計画課 復興まちづくり推進室
- 派遣先の主な担当業務：防災集団移転促進事業、土地区画整理事業

「被災地のために何かできることはないか」という思いから機会を伺っていましたが、被災地派遣の経験がある先輩と同じ職場になり、「良い経験になるよ」と背中を押され希望しました。

赴任時の宮古市は住宅団地や復興道路等のハード面の整備は順次完了を迎えていたため、復興は着実に進んでいると感じました。

担当業務としては、防集事業や土地区画整理事業等に携わっていました。職場は、応援職員が少なくなる中でマンパワー不足を感じましたが、アットホームな雰囲気があったからこそ日々の課題に集中して取り組むことができたと思います。

森・川・海と広大な面積を誇る宮古市ですが、車さえあれば何不自由なく生活でき、快適な派遣期間を過ごすことができました。また、釣りやキャンプ等の環境が豊かであり、東京にはない魅力がたくさ

んありました。

2年間という短い派遣期間でしたが、宮古市の皆さんが温かく受け入れてくださったことで、かけがえのない経験となりました。品川区においても他自治体の職員を受け入れる際は、宮古市のような思いやりのある受入体制を実現したいです。

受入体制については、派遣元自治体から派遣先自治体への住居の引越しがとてもスムーズでストレスがなかったです。前任者と同じ部屋で必要な物が残っていたため、生活を始めるに当たって安心感がありました。また、帰任時も荷物搬出後に数日間ホテルを手配いただき、柔軟な対応がありがたかったです。

復興もステージが変わり新しい課題に日々苦慮されていることと思いますが、度重なる災害から復興を遂げた宮古市であれば必ずやり遂げると信じています。遠方より微力ですが応援しています。

かとう がい
加藤 凱

- 派遣元：青森県八戸市 ■ 派遣期間：H31.4.1～R2.3.31
- 派遣先所属：都市整備部建設課
- 派遣先の主な担当業務：道路整備工事の設計監督業務



平成31年4月1日から令和2年3月31日まで青森県八戸市から宮古市に応援職員として派遣され、1年間従事しました。

担当業務は、津波避難道路整備工事の設計及び監督業務でした。道路改良工事の経験がなく手探りの状態でしたが、市職員の方々はもちろん、任期付職員や応援職員の先輩方からのご指導を賜りながら、日々の業務に取り組みました。おかげさまで自分が担当予定だった工事を不足なく発注できました。担当工事の中には繰り越した工事があるので、完成後にはぜひ宮古市を訪れたいと思っています。

私が派遣されたのは震災から8年目ということもあり、非常にスムーズに受け入れていただきました。新しい環境での不慣れな生活はストレスを感じる要因の1つだと思いますが、宮古市の応援職員担当者の方から親切なアドバイスやガイダンスがあり、引越しや地域のルールなどの不安が解消され、応援職員としての業務に集中する環境を整えていただきま

した。派遣期間中はアパートで生活していましたが、宮古市から職場に近い物件を用意していただき非常に助かりました。

業務のほかには様々なイベントに参加し、他の応援職員や市職員の方々と親睦を深め、公私ともに充実した毎日を過ごすことができました。特に印象に残っていることは、盛岡さんさ踊りに宮古市役所の一員として参加したこと。踊りを覚えることは難しかったですが、盛岡市役所からの応援職員に教えていただきながら本番はなんとか踊り切ることができ、達成感を味わえました。

宮古市の皆さんには非常にお世話になりました。応援職員という立場ではあるものの、むしろ自分の方が勉強をさせていただいた部分が多かったと思いますが、少しでも宮古市の復興の一端を担うことができれば幸いです。派遣させていただいた宮古市はもちろん、被災された太平洋沿岸地域の少しでも早い復興を願っております。

東京都品川区 総務部人事課

品川区と宮古市は、例年、目黒駅前で開催される人気イベント「目黒のさんま祭り」が縁で、災害時相互援助協定を締結しています。区では、震災発生後速やかに義援金の受付や被災者への区民住宅の提供、雇用助成などの支援を行っており、平成24年度からは職員の派遣を実施しています。

応援職員は、被災状況についての把握をしながら、慣れない環境の中で被災地支援という使命感をもって、日々懸命に住民の気持ちに寄り添い業務を遂行してきました。宮古市で得た仕事の成果や行った努力は、応援職員にとって貴重な経験と成長につながっております。

また、区では、宮古市での仕事や生活、そして現地

の職員や住民との交流を通じて感じ、学んだ貴重な経験について職員より報告を受けています。宮古市で得た経験が、幅広い分野で区の防災力を高めることにかされ、「輝く笑顔 住み続けたいまち しながわ」の推進の一助となっていることと思います。

末筆ではありますが、快く当区の職員を受け入れてくださいました宮古市の職員や住民の方々に心から御礼申し上げます。



品川区のロゴマーク
「わ! しながわ」

秋田県大仙市 総務部総務課

大仙市と宮古市との交流は、平成11年に秋田・岩手両県の関係市町村による「秋田・岩手地域連携軸推進協議会」の加入に始まり、平成20年に「大規模災害時における秋田・岩手横軸連携相互援助に関する協定」が締結されたほか、大仙市秋の総りフェアでは宮古市産サンマの炭火焼き無料体験ブースを毎年開設していただきました。

このように宮古市との交流が活発になっている中、平成23年3月に東日本大震災が発災、宮古市から職員派遣の打診がありました。目の前に困っている人がいれば手を差し伸べるのは当然のことで、平成24年4月から1年間、土木技師1名と事務職1名を派遣することが決定しました。以降、毎年2名の職員を交代で派遣し、宮古市の業務支援を行いました。

被災自治体へ1年間の長期にわたる派遣は初めてのことでした。職員が不在となるため通常業務への影響の軽減、応援職員の心身の健康管理、派遣先での生活環境など考慮しなければならないことが多

く、人選には苦慮しましたが、人事担当としては、長期の職員派遣を経験したことでそのノウハウを次の被災地支援にいかすことができました。

一方、大仙市での大雨災害の際には宮古市から多大なる支援をいただき、その絆をさらに深めることになりました。現在は、宮古市民の方々の「大曲の花火」への招待、「全国500歳野球大会」への宮古市チームの参加、産業まつりや秋の総りフェアへ相互出店、宮古市の小中学校教諭等による大仙市内の小中学校視察など幅広い分野での交流を行い、さらに令和元年10月5日に友好交流都市協定を締結するなど、相互の絆は強く太くなっているところであります。

最後になりますが、震災直後から相当な業務量を抱えている中で、応援職員の受入れについて、宮古市職員の皆様にはきめ細やかなご配慮をいただき、誠にありがとうございました。

大仙市のキャラクター
「まるびちゃん」



山口県下関市 総務部職員課

下関市は本州の西端に位置し、平成16年1月に本州の四方位の最端の地の自治体である岩手県宮古市、和歌山県串本町、青森県大間町とともに本州四端協議会を設置し、地域特性をいかした交流を通して地域活性化を図っています。

その縁もあり、東日本大震災で被災された宮古市へ職員を派遣しました。震災直後に短期派遣で51名を派遣し、平成23年10月以降、長期派遣で被災施設の災害復旧業務に従事するため、延べ10名の土木技師を派遣しました。

宮古市は漁港の災害復旧工事を行っており、漁港等の海洋土木工事は専門性が要求されるため、当該工事経験者が必要でしたが、本市において漁港・港

湾工事経験のある土木技師は数が限られており、人選には非常に苦労しました。

派遣された職員にとっては、災害復旧業務に従事することで貴重な経験となるとともに、復興に向けて懸命に職務に励まれている宮古市の職員の方たちの姿を見て、大いに刺激を受け、公務員としても成長することができました。

宮古市と本市とは本州四端協議会を通じて現在も交流は続いており、本州四端踏破ラリーを共同実施し、本州四端を全て訪れた踏破者に証明書とオリジナル記念品を贈っています。

下関市のメインキャラクター
「せきまる」



市町村長メッセージ

岩泉町長 中居 健一



平成 23 年の東日本大震災津波から早いもので 10 年が経過いたしました。

当町でも 13 名の方がお亡くなりになられ、また、208 世帯の方が浸水被害に遭い、多くの方が避難所や応急仮設住宅等での生活を余儀なくされました。犠牲になられた皆様に心よりご冥福をお祈り申し上げますとともに、ご遺族や、被害に遭われた方々に改めてお見舞いを申し上げます。

また、復旧・復興に当たりましては、全国から本当にたくさんの温かいご支援やメッセージを頂戴し、被災者をはじめ復旧・復興に携わる私どもにも勇氣と希望を与えていただきました。この場をお借りいたしまして御礼申し上げます。

皆さまからのご支援のもと、当町の復旧・復興事業につきましては、被災者の集団移転地の整備や被災した役場支所、小学校・中学校の移転整備事業など、主なハード整備事業につきましては発災から 5 年後の平成 27 年度末までにはおおむね完了し、その後、平成 29 年 8 月には、被災地域の復興・発展の中核施設として、浜の駅おもと「愛土館」が完成したところです。

この東日本大震災からの復旧・復興事業を進めるに当たり、当時課題の一つとなっておりますのは、かつて経験したことのない膨大な規模の事業を進めていくための人材の確保でありました。何よりも、被災された方々が一日でも早く安心して生活できる環境を取り戻すため、できる限り早く事業を進める必要があったわけですが、そのためには即戦力となる人材の確保が欠かせない状況にありました。

そうした中、県内外の自治体から、当町に対する温かい励ましの言葉とともに職員の派遣に快くご協力いただきましたことは、復旧事業を成し遂げる上でとても大きな力となりました。

その後当町では、平成 28 年台風第 10 号豪雨災害によりまして震災時をも上回る規模の甚大な被害を受け、現在も応援職員の皆さまからのご協力をいただいているところですが、この大規模災害を通じて新たに築くことができました人と人のつながり、そして絆を大切にしながら、1 日でも早く以前のように自然豊かな町の姿を取り戻せるよう、引き続き今後の復旧・復興事業に取り組んでまいります。

復興の状況



小本地区（岩泉小本駅周辺）



小本小学校・中学校



小本津波防災センター（小本支所）



浜の駅おもと「愛土館」

ひさおか こういちろう
久岡 孝一郎

- 派遣元：高知県高知市 ■ 派遣期間：H23.11.1～H24.3.31
- 派遣先所属：地域整備課
- 派遣先の主な担当業務：災害査定、災害復旧工事

私は、いずれ高知市にも発生することが予測されている南海トラフ地震で被災した場合の復旧・復興に向けた取組において、岩泉町への復興支援派遣を通じた被災地での経験をいかしたいと思い、微力ではありますが復旧・復興の一助となればと参加いたしました。

私が赴任したのは発災から半年余り経った頃で、被災者用の応急仮設住宅が使用可能であるにもかかわらず、当時の町長公邸を宿舍として使用させていただけると伺い、岩泉町の受入体制に対するご配慮に驚いたのを覚えています。

また、赴任期間が冬の季節であり、南国育ちの私には東北の寒さは想像を絶するものでしたが、ご近所の皆様から心温まる励ましの言葉や温かい郷土料理をごちそうしていただき、感謝の気持ちで一杯でした。

さて、私が担当した業務としましては、東日本大震災で被災した公共施設の復興に向けた災害査定申請を行いつつ、甚大な津波被害があった小本地区の道路や漁港の応急復旧工事に従事しておりました。

この頃は、被災前の原状回復を目的とする復旧作業が主な業務でありましたが、災害査定を経て復興に向けた予算等に一定の目途がついたことから『今後は、復旧から復興へと加速して行く』という行政の強い決意と、町民の皆様も『被災の悲しみを乗り越えて一緒に頑張っていく』という活気に満ちあふれていたように感じました。

私の岩泉町への派遣期間は5か月でありましたが、職員の皆様はもとより、地元の皆様にも大変お世話になりました。

特に、地元の小学生で作られた野球チーム『龍泉洞』・スターズ』の子供たちや保護者の皆様との野球を通じた交流は、今でも大切な思い出となりますし、派遣期間を終えて帰任する際は、数えきれないほどの方々にバス停でお見送りいただいた光景は今でも忘れる事はありません。

岩泉町の皆様、復興おめでとうございます。心からお祝い申し上げますとともに、皆様のますますのご健勝とご多幸を遠く高知の地からお祈りしています。

おだ たいすけ
小田 泰輔

岩泉町に派遣されていた高知市職員の方々
(左端が小田さん)



- 派遣元：高知県高知市 ■ 派遣期間：H24.4.1～H24.9.30
- 派遣先所属：地域整備課
- 派遣先の主な担当業務：漁港災害復旧業務

私は、平成24年4月から同年9月までの半年間、岩泉町へ派遣させていただきました。

赴任前は、業務や生活面等の不安が多くありましたが、赴任してみると、配属先であった地域整備課の方々をはじめ、役場の皆さんから満面の笑顔で迎えていただき、一安心したことを覚えております。

また、日常生活については、スポーツを通じての地域の方々との交流や食事へのお誘いなど、大変配慮いただき、すぐに慣れることができました。

一方、「言葉（方言）」にはなかなか慣れず、赴任当初は皆さんの会話の内容が理解できず、ただただ愛想笑いをしておりました。地域整備課の若手職員の方に通訳してもらったり、わざわざ標準語で話をしていただくなど、ヒアリングの向上には少し苦労はしましたが、今思えば良い思い出の一つとなりました。

復興業務においては、私がそれまで未経験の工種

であった漁港の災害復旧工事に従事しましたが、地域整備課のアットホームな職場環境のおかげで、円滑な業務遂行を行うことができ、また、自分自身のスキルアップにもつながる貴重な経験をさせていただきました。現在は、高知市においても漁港の工事に携わり、この時の経験が大変役立っております。

この度、東日本大震災津波からの復興が一定程度完了されたことは、役場の皆様のご尽力があったからこそであり、お喜び申し上げます。

今後は、この貴重な経験を高知市でいかしていけるよう業務に努めてまいりたいと考えております。

最後に・・・

地域整備課のおまんら〜げにまっこと世話になったとき、今度高知にも遊びにきいや。

(※地域整備課の皆さんには大変お世話になりましたので、今度は高知にも遊びにきてください。)

とたに さだお
戸谷 貞夫

- 派遣元：復興庁岩手復興局 ■ 派遣期間：H25.10.1～H26.9.30
- 派遣先所属：教育委員会事務局
- 派遣先の主な担当業務：学校施設の大規模改修工事



60歳の定年退職後、復興庁に採用され、夫婦で岩泉町へ向かいました。行く道の景色はセピア色に見え、砂ぼこりをあげたダンプが行き交う様は大型開発地のようであり、基礎だけが取り残されているところを目にすると、改めて被害の甚大さに言葉を失いました。

配属先は教育委員会事務局学校教育室で、担当業務は教育施設の維持保全に関することでした。具体的には、中学校の大規模改修工事、中学校トイレ改修工事の設計、教職員住宅内部改修工事の設計監理を担当しました。その際、千葉県内の市役所に勤務した経験をいかせたと自負していますが、町職員の方たちの協力のおかげでスムーズに業務を進めることができました。改めて感謝いたします。

住まいは応急仮設住宅に入居しましたが、北海道から来た者からするとかなり貧弱な寒冷地仕様の住宅でした。床には断熱材が入っておらず、天井の断熱材も薄いことから、部屋の中で白い息が出て結露

がひどい状況でしたので、復興庁、岩手県、岩泉町に改善を求めました。それほど改修に工事費がかかるとは思いませんでしたが、最後まで改善はしていただけませんでした。待遇面でも、応援職員としての給料だけではかなりの持ち出しとなったことから、二冬は難しいと考え、平成26年9月までの1年間で区切りをつけました。

震災当時の町職員より、小本地区の住民の方たちを搬送したことや亡くなられた方のご身体の清浄など、数か月間に及ぶ不眠不休の業務の様子についての話をたくさん伺いました。業務の最前線にいる中で苦情など窓口でつらい思いをしたことも多々あったかと思いますが、職員の皆さんがそれを立派に乗り越えたことに対し敬意を表します。私は1年間だけのお手伝いで、皆様の足元には到底及びませんが、皆様と知り合えたことは大きな宝だと思っています。敬愛する職員の皆様、遠い地より大きな声で岩泉町を応援しています。

こばやし
小林 ひとみ

- 派遣元：復興庁岩手復興局 ■ 派遣期間：H28.11.21～H31.3.31
- 派遣先所属：町民課
- 派遣先の主な担当業務：被災者支援、高齢者支援、相談業務、要介護認定調査



平成28年11月より約2年半、復興庁復興支援専門員として岩泉町に派遣され、主に被災者支援を中心とした業務を行ってきました。岩泉町は約5年半の間に2つの甚大な災害、東日本大震災と平成28年台風第10号災害を経験しています。復旧・復興の混乱の中、役場や町議会は応援職員に親しみを込めて歓迎してくださり、私は安心して町職員と一緒に任務に当たることができました。また、県は応援職員に対し定期的にメンタルヘルスケアや面談を主催しており、私たちへの丁寧な配慮に感謝しています。

応援職員にとって、土地勘のない自治体での業務はハードルが高いことは容易に想像がつかます。しかし、宮城県を含む通算5年半の自治体派遣での経

験から、私たちの使命・任務の基本は即戦力と柔軟性であることを痛感します。また、東日本大震災から10年、平成28年台風第10号災害からは4年半余りが経過しますが、派遣の時期にかかわらず、被災者が感じる時間の経過と応援職員を含む外部者が認識する時間の経過との間には埋められない差があることを尊重することを忘れてはならないと思っています。

復興業務では、被災したその土地を愛してやまない人たちの目当たりになってきました。安全と安心の考え方、つまり、町が第一に考える住民の「安全」と、住民の意思であるところの「安心」とは表裏一体の関係に見えます。住民の気持ちに寄り添い、意思を尊重しながら復興プロセスに関わることを忘れ

てはならないということ、業務を通して肌で感じています。

災害がきっかけではありますが、私は岩泉町が大好きです。私は平成23年夏にボランティアで遠野市仮設住宅希望の郷「絆」の支援に携わった経験がありますが、岩手県と更なる『縁』ができて心からうれしく思っています。岩手県の冬は過酷な環境ですが、一方で自然や食の豊かさは外部者にとっては言葉にならないほどぜいたくに思えます。同時に、岩手に暮らした年月を通して、岩手県民の控え目で

遠慮がちで老若男女に関係なく拍子抜けするほどの優しさや純粋さにいつも驚いています。こちらが応援するという立場でしたが、同時に、岩泉町は人間としての豊かさを追求する貴重な時間を与えてくれたwin-winの関係にあったと思っています。岩泉町の仕事仲間・関係者や住民の皆さん、復興支援で出会ったあらゆる岩手県の人たちに感謝します。今も遠くからですがいつも岩手を想っており、岩手の良さをたくさん伝えることが応援職員として関わった者の次の役割ではないかと思っています。

■ 高知県高知市 総務部人事課

岩泉町は高知市から1,000km以上離れており、それまで交流もあまりない中ではありましたが、全国市長会を介した要請を受け、平成23～26年度の4年間に14名の土木職員を派遣しました。

未曾有の災害であり、当時、何らかの力になりたいという思いに国全体が包まれていたと記憶しています。本市でもそうした思いの中、全国自治体で同じ状況と思いますが、建設系の技術職員の退職と採用がアンバランスとなり、欠員が恒常的となる中で、気候風土の全く異なる東北地方へ派遣する事には紆余曲折ありましたが、職員を送り出してくれた職場の協力と本人や家族の理解あってのことでした。

本市では、来るべき南海トラフ地震対策が重点施策となっています。今後地震対策をより強化する上で、職員が現地で見聞きし体験する中で得た知識や

経験は、応援職員のみならず本市職員にとって貴重な財産になりました。

派遣中は、幹部の皆様が遠路何度もお越しくださり、帰任職員も町民の皆さんに大変よくしていただいたと口をそろえて言っており、本当に貴重なご縁をいただいたと感じています。

また、震災関連の派遣が終了した後に発生した平成28年台風第10号災害で甚大な被害があった際にも、派遣していた職員にいち早く情報が入り、平成29年4月から令和2年3月までの3年間の派遣が復活するなど、交流が続いておりまして、今後もお縁が続くことを願っております。



高知市桂浜公園内の坂本龍馬の銅像

市町村長メッセージ

田野畑村長 石原 弘



下からドンと突き上げるような衝撃、さらにこれまで経験したことのない異様な揺れ方に、恐怖を感じた10年前のあの日。今でもその感覚は鮮明に残り、海岸部で生活していた方々の感情を思うと悔しさが込み上げてきます。

この激震がもたらした大津波の甚大な被害が判るにつれ、人々の落胆の色は濃くなっていきました。そんな中、多くの皆様から寄せていただいた励ましと御支援により、村民が一丸となって前を向いて歩き始めることができたことに改めて心より感謝を申し上げます。

数年が経った頃、被災者から震災の話聞くことができました。

「大津波を恨んでもしょうがなく、何も戻らない。逆に津波から問いかけていただくと考えれば、物事の道理も変わる。応急仮設住宅生活で、本当の幸せとは何かを問う自省の念が生まれた。まな板を叩く音、隣の床がきしむ音、他愛のない笑い声…。同郷で同じ境遇の気心知れた仲間の日常での生活音が聞こえるだけで本当に心が落ち着き、共に生きるこの本質を感じることができた。これまでは、自分と家族だけが幸せであれば良いと思って生活していた。自己中心的で、自己完結の狭い考えだけに終始

とらわれてきたような気がする。何も無いのではなく、そがれたからこそ気付いたことがある。これからは、常に感謝の気持ちを忘れずに生きていきたい」と話してくれました。

復興を進める上で、技術者の確保が至上命題となる中、全国の自治体や民間企業から職員を派遣していただいたことで、10年間をもって復興事業を完遂できました。しかし、現在も復興に向けて歩んでいる市町村もあり、同じ気持ちで臨む姿勢を持ち続けたいと思います。

全国からは、物、人、そして心の御支援もいただきました。ある首長は「震災は、縁の無かった市町村同士が仲間として主体性を持ち、今後の地方自治を変えていく試金石になるのではないかと考えている」と話してくれました。一緒に頑張っていくことを誓って交わした固い握手が今でも忘れられません。

本村の復興支援に携わっていただいた応援職員や全ての関係者に、改めて深く感謝を申し上げます。本村は若者を中心として「住みやすい村のランドデザイン構想」を取りまとめました。その構想の実現と、国連が提唱するSDGs持続可能な村づくりを目指し、復興に御支援いただいた全ての方々の思いを力に「教育立村」としての未来を切り開いていきたいと思っています。

復興の状況



田野畑村魚市場



平井賀漁港



拓洋台災害公営住宅



道路の高上げ工事が完了した羅賀地区

おの じゅんや
小野 淳也

- 派遣元：青森県田舎館村 ■ 派遣期間：H24.4.1～H 25.3.31
- 派遣先所属：地域整備課
- 派遣先の主な担当業務：土木災害復旧・復興設計施工管理

私は、被災市町村に対する人的支援のための職員派遣依頼により、少しでも被災地・被災者の力になればという思いから、岩手県沿岸部の田野畑村へ平成24年4月1日から平成25年3月31日までの1年間、応援職員として赴任しました。

田野畑村の応援職員の受入体制は整備されていて、村職員の皆さんにはよく声をかけていただき、本当に心の支えになりました。

私は、主に災害復旧・復興工事の設計施工管理業務を行いました。震災から1年が過ぎた被災地の現状は、未だに復興が進んでいるという状態にはなく、復旧工事もどれくらい進んだのだろうと、はっきりと見えるものがないような感じでした。見知らぬ土地で不安を抱えながらの業務、土木災害の復旧工事を発注したのはいいが資材が入ってこない、復旧工事が思うように進まないなど、いろいろな葛藤があり今にもおし潰されてしまいそうな自分がいて、「きつい」「つらい」と何度もそう思ったことが思い浮かびます。しかし、被災された現状、被災された方々の心情を思い考えると、

それ以上につらいものがあると感じました。被災されているにもかかわらず支援に来てくれていることに感謝され、温かい言葉をかけていただき、逆に私の方が励まされることがありました。私は、被災された皆さんが震災前の普通の生活に一日も早く戻れるよう懸命に復興行政業務に取り組みました。

復興に向けて同じ目標の中で仕事をした地域整備課職員の方々には、業務指導等においても大変お世話になりました。また、田野畑村民の「人の温かさ」や「つながり・絆」も実感し、村職員の皆さんや住民の皆さんには感謝しかありませんでした。

この1年間の災害派遣は、私にとって貴重な時間であり経験であり、今後の人生の糧になるものだと思います。そして、田野畑村に少しでも貢献できたのかなと自分の中で思い、赴任してよかった、そう思う日々です。

**東日本大震災から復興した原動力を未来へ
「記憶を未来へ ともに創る、ともに生きる、たのはた。」 最高！！**

ひがしで なおや
東出 尚哉

- 派遣元：青森県佐井村 ■ 派遣期間：H25.4.1～H26.9.30
- 派遣先所属：建設第二課
- 派遣先の主な担当業務：漁港施設の災害復旧

平成25年3月31日の日曜日の朝、前日から田野畑村に来ていた私は、復興派遣先の田野畑村役場に向かいました。配属先は建設第二課で、主に漁港施設の災害復旧を担当する事は決まっておりましたが、通勤時間を計りながら、事前に役場の位置だけでも確認しておこうと思ったのです。役場は標高200m以上の所に位置し、外見からはかなり年季の入った建物のように思いましたが、その周辺は津波被害で殺伐とした羅賀・平井賀地区とは別世界のような穏やかな空気が流れていました。「同じ村なのに被害状況は違うな」そう感じました。休日の朝9時前でしたが、役場の中に人影が見えたのでご挨拶に伺ったところ、配属先へ案内していただきました。課長と数名の職員の方がおり、課長から歓迎のお言葉をいただきました。他の職員方は掃除をしていましたが、これは仕事前の朝の日課なのだそうです。職員同士の会話を聞いていると、その話し方や内容

などから規律に厳粛な職場であることが感じられ、背筋が伸びたのを今でも覚えております。

それから一年半、微力ながら復興のお手伝いをさせていただきましたが、その間、村職員の方はもちろんの事、宿泊先や食堂、お店の従業員の方など、多くの方々からたくさんのお心遣いをいただきました。私は、ボランティアとは違い職務として派遣されていたので、感謝の言葉をいただくと戸惑ったり返事に困る事も多々ありました。

田野畑村が現状まで回復できたのは、「復旧・復興」という目標に向かって、住民の皆さんや職員、ボランティアの方々全員が心をひとつに協力し合えたからだと思います。「みんなの力」が成し得ることの偉大さを痛感させていただきました。この教訓をこれからも忘れることなく日々の職務にいかしていきたいと思っております。一日も早い復興をお祈り申し上げます。

かろうじ しげと 唐牛 重任

- 派遣元：青森県藤崎町 ■ 派遣期間：H25.4.1～H25.9.30、H28.10.1～H29.3.31
- 派遣先所属：建設第二課
- 派遣先の主な担当業務：(H25) 漁業集落道（業務委託監督）
(H28) 防潮堤水門土木（工事施工管理）



私が田野畑村へ応援職員として派遣されたのは、平成25年4月のことでした。

震災前に当時の田野畑村と藤崎町の教育長が知り合ったのをきっかけとして、震災後に学校関係の交流を始めていました。

派遣前までは復興の助力という志を持っていたのですが、人生初の転勤（それも県外）と、藤崎町役場では稀な単身赴任で、不安に感じていました。

着任当日、田野畑村役場へ予定よりかなり早く到着しそうだったので、役場を通過して道の駅に寄りました。大きな橋からの景色を見て、不安から「帰りたくない」とも思いました。ここが「思惟大橋」「辞職坂」と、その数日前に役場へ挨拶に行った時に聞いたことを思い出し、1人でクスリと笑い気持ちが落ち着きました。

着任してからは、仕事でも日々の生活でも村職員に1つ1つ尋ねたり、応援職員同士で相談したりと、何は無くとも聞く、話すことを大切にしました。そ

ういった状況が職員同士の交流となり、絆となって仕事のできたのだと思います。

応援職員の宿舎になっていたのは、第三セクターにて運営されている観光宿泊施設「ホテル羅賀荘」の1室でした。被災した施設であり、着任する数か月前に再開した施設です。復興の関係者のほか、NHK連続テレビ小説「あまちゃん」効果で被災地を応援する観光客などが多く、連日大盛況でした。

その後、藤崎町と田野畑村はさらに交流を深め、平成27年4月には友好都市関係を結びました。私の災害派遣が友好の1つの礎になった事は、誇りと感じます。

派遣期間中は大変お世話になりました。震災の関係の事業は令和2年度で終わりますが、令和元年東日本台風災害による被害があったそうで、また忙しい日々かと思えます。落ち着いたら、何らかの形で職員同士の交流みたいなことができれば良いと個人的に思っています。長く深い付き合いになるよう、今後もよろしくお願ひします。

くどう しんや 工藤 真也

- 派遣元：青森県藤崎町 ■ 派遣期間：H25.10.1～H26.3.31
- 派遣先所属：建設第二課
- 派遣先の主な担当業務：漁港事業の設計、積算、監督業務



私は、平成25年10月から平成26年3月までの半年間、田野畑村に応援職員として派遣されました。

派遣された当時は、既に震災ごみやがれきは撤去されていましたが、震災直後の写真を見せてもらい、まさに地獄絵図のような光景に言葉が出なかったことを今でも覚えています。

担当業務は、津波で被災した漁港の防潮堤や道路設計、法面対策の設計業務を担当しました。しかし、派遣元自治体は海も山もない地域のため、ほとんど災害復旧という仕事をしたことがなく、これまでそれなりに仕事をしてきて分かってきたつもりでしたが、実際に仕事をするともあまり聞き慣れない用語が出てきたり、青森県とは違うやり方や考え方に戸惑いを感じたりして、最後まで職務を全うすることができるのか不安で一杯でした。

しかし、そんな戸惑いもいらぬ心配で、村職員の方や他自治体の職員の方が温かく迎えてくれたおかげで、仕事はもちろんのこと、プライベートも充実した

日々を送ることができました。当時一緒に仕事をしてきた人とは今も情報交換したり近況報告したりと、現在も良い人間関係を築くことができています。

近年、全国でゲリラ豪雨や地震等の自然災害が頻繁に発生しているため、いつ派遣元自治体で災害が発生してもおかしくない状況です。これまで田野畑村で経験した災害復旧に対する知識を派遣元自治体でも共有していかし、土木職員としてこれまで以上にレベルアップしていきたいです。

派遣先である田野畑村においては、今年度で東日本大震災津波の復興事業が終了しますが、その間には令和元年東日本台風災害でも甚大な被害が発生したこともあり、度重なる大規模災害に見舞われた職員におかれましては心身共に大変疲弊している状況かとお察し致します。今後も自然災害がなくなることはありませんが、そういった状況になればこれまで通りお互いに助け合いながら、この自然災害に打ち勝っていきましょう。

うちだ しょうご
内田 省吾

- 派遣元：埼玉県深谷市 ■派遣期間：H26.4.1～H28.3.31
- 派遣先所属：建設第一課
- 派遣先の主な担当業務：集落道整備、土地利用高度化再編整備



2 応援職員から

私が応援職員として田野畑村を訪れたのは、東日本大震災より3年がたった頃でした。赴任時のまちの様子は、津波が来たであろう場所のがれき等は片付けられていましたが、道路とその傍らに建物の基礎だけが残った更地の状態で、津波の残酷さを痛感しました。友好都市の復興に何か少しでも役に立ちたいと思い派遣を受け入れたのですが、その景色を目の当たりにし、赴任直後は、私で大丈夫だったのかと不安が大きくなったのを覚えています。

村の受入態勢は非常に手厚いもので、公私ともに充実して取り組むことができました。私の担当業務は、集落道整備及び土地利用高度化再編整備の設計、積算、工事の監督等でした。新しい職場環境の中、深谷市では経験できない海や山と向き合うには時間を要しました。それでも、村の建設課では従来の上の倍以上に膨らんだ復興職員を抱え、業務量も増加した中での熱意や親切な対応は、私以上に神経をすり減

らすものであったと思われませんが、日々丸となって業務が進められたことは非常に助かり、心強かったことを思い出します。また、月に1度派遣元自治体へ事務連絡で帰ることができたのはリフレッシュになりました。生活面でも、観光ホテルの一室をご用意いただいた上、休日は海釣りやバーベキュー、近隣市町村へ遊びにお誘いいただき、住民の温かさに触れ、何不自由なく充実した毎日を送ることができました。

2年間にわたり、田野畑村の皆様には大変お世話になりました。復興も最終段階に入り、再訪するのがとても楽しみです。令和元年東日本台風災害からの復旧や新型コロナの対応など大変な時期でもありますが、無事に復興を終えられるようお祈りしております。田野畑村で過ごした2年間は、生涯忘れることのないとても充実した貴重な時間で、自分自身もたくさん成長させていただきました。本当にありがとうございました。

■ 埼玉県深谷市 総務部人事課

平成 23 年 3 月の震災発生直後、友好都市である田野畑村を支援するため、社団法人埼玉県トラック協会深谷支部と協力し、救援物資の搬送を行いました。その後、全国市長会からの被災地域への人的支援に関する照会を受け、同年 4 月には保健師 4 名及び看護師 1 名を避難所生活者のメンタルケアのために短期派遣しました。

発災直後で混乱が続く中、被災地が必要とする支援と深谷市が対応可能な支援内容の調整や、限られた人材からの応援職員の選出、現地での業務内容や勤務形態、指揮命令系統の確認等、多数の困難がありました。おおよそ 2 週間にわたり職員を派遣することができました。

平成 24 年度からは中長期的な職員派遣として、一般事務職 2 名、土木技師 1 名を派遣し、平成 28 年度まで、延べ 17 名の職員を派遣し、復興を後押ししてきました。これらの職員派遣を通して得た被災地支援に関するノウハウや経験は、風化させ

ることなく、後世に引き継いでいかなければなりません。

これまで、田野畑村と深谷市は友好都市として、小学生交流事業や各種イベントでの交流を通して信頼関係を築いてきました。今後もより一層交流を深め、これまで以上の友好関係を築いていきたいと考えております。

結びに、田野畑村の更なる発展と田野畑村に住む全ての人々のご多幸をお祈り申し上げます。



深谷市のイメージキャラクター
「ふっかちゃん」

■ 青森県藤崎町 総務課

平成 22 年当時の藤崎町教育長と田野畑村教育長が研修で知り合い、田野畑村教育長が藤崎町と隣接する青森市（旧浪岡町）出身であることをきっかけに、お互いに連絡を取り合うようになりました。こうした中、平成 23 年 3 月 11 日に東日本大震災が発生した際、田野畑村の子供たちが震災でショックを受け、精神的に不安に感じていることだろうと思われ、同年 8 月に田野畑村の小学生を藤崎町へ招待したことを機に、両町村の交流が始まりました。そして、年々親交を深めてきた中、平成 25 年度に被災

地復興支援の一環として藤崎町から職員を田野畑村に派遣しました。

職員派遣を行う上で、土木職は当町でも非常に少なく、派遣対応が厳しい状況ではありましたが、人事異動における配置人員を整理する等、派遣に対応できる人員を工面してきました。また、応援職員の派遣期間を半年にすることで、応援職員の負担を軽減すると同時に派遣元自治体の業務遂行に支障が生じることのないように心掛けました。

非常時においては、行政単位の枠を超えてお互いを思いやる心を忘れてはいけないということを感じました。



藤崎町のマスコットキャラクター
「ふじ丸くん」



藤崎町のマスコットキャラクター
「ジャン坊くん」

市町村長メッセージ

野田村長 小田 祐士



平成23年3月11日に発生した東日本大震災津波から10年を迎えました。あの日、眼前に広がる村の姿が、実際に災害を目の当たりにしてもなお信じがたい様であったことを思えば、令和という新たな時代に目に映る現在の村の景色が、10年足らずで為された復旧・復興事業によるものであることもまた夢のようであります。この歳月を、野田村と共に歩んでくださった全ての皆様に、心より感謝を申し上げます。

本村では、震災からの復旧・復興に当たり「野田村東日本大震災津波復興計画」、「野田村復興むらづくり計画」を策定し、将来にわたって災害に強い多重防災型のむらづくりや、野田村らしい魅力ある暮らしの実現を目指し、様々な事業に取り組んでまいりました。土地区画整理事業、防災集団移転の促進、都市公園事業による防災緑地や災害公営住宅の整備、産業の復興、コミュニティの再生など、同時且つ多面的に事業を進める必要に迫られました。その際に、言葉では形容しがたいほどの大きな力となったのが、全国の自治体から派遣いただいた応援職員の存在でありました。

野田村だけでは到底太刀打ちのできないその状況に、全国からの知見が集結し、その専門性やバイタリティと村職員や村民の力が融合し、復旧・復興が進んでいった

その過程は、今では私たちにとってかけがえのない経験であったと、深い感慨とともに回想いたしております。

震災後に整備され、防災緑地でもある十府ヶ浦公園では、村の新たな景観をつくるべく、シバザクラの植樹が行われました。今では、公園の散歩が日課となった村民の姿も数多く見られます。土地区画整理事業を実施した地区や高台団地などでは、新たなイベントや地域行事も少しずつ生まれています。復興むらづくりは、ハードからソフトへ、今まさに第2のスタートを迎えています。

応援職員の皆様との出会いのきっかけは、その名のお通り「応援」をいただいたことですが、共に汗を流したその時間は、いつしか私たちを「仲間」に変えてくれました。「ここは野田村か？」と一瞬戸惑うほど、各地のお国言葉が飛び交った日々。新しい野田村を共に創った仲間たちが、今では全国各地に存在し活躍していることは大変心強く、そしてまた誇らしくもあります。今後とも末永いお付き合いとお力添えをいただければ幸いです。

語り尽くせぬ心からの感謝を表し、また復興完遂の暁には、今度は私たちが皆様へ恩返しさせていただくことをお誓い申し上げ、記録誌発刊に寄せるメッセージといたします。

復興の状況



津波復興土地区画整理事業により整備した街並み



十府ヶ浦公園



防災集団移転事業（城内地区）



漁業集落防災機能強化事業（下安家地区）

第9節 野田村

2 応援職員から

やまぎし くにお
山岸 邦夫

- 派遣元：富山県立山町 ■ 派遣期間：H24.4.1～H25.3.31
- 派遣先所属：産業振興課
- 派遣先の主な担当業務：林道事業



私は、東日本大震災津波の映像をテレビで見、被災地への派遣を決意しました。

野田村へ赴任した当時は、市街地に大量のがれきが積み上げられ、破壊された道路や防潮堤の姿から、津波被害の大きさと深刻さを知ることができました。

野田村では、孤立集落を解消するための道路新設や災害復旧業務に従事しました。道路新設の用地交渉では、慣れない東北弁に苦労しましたが、職場の方々に助けられ、派遣期間内に用地取得を完了することができました。立山町へ帰任後、野田村を訪問した際に開通した道路を見て、少しでも被災地の一助になれたかなと思っています。

応援職員の受入体制では、住まいは国民宿舎えぼし荘や応急仮設住宅をご用意いただき、食料品や日用品の買い物にも不自由はなく、想像していたよりも生活環境は整っていました。また、村職員の皆様には仕事以外でも地元の行事へ誘っていただくなど、とても充実した日々を送ることができました。

帰任後も派遣を通して得られた野田村とのご縁は継続させていただいており、何度か訪れていますが、その度にまち並みやインフラが整備されていく早さに驚かされます。今後、復興した野田村に人々が集い、賑わいと活力のあるまちづくりが進むことを願っています。

せき けんたろう
関 剣太郎

- 派遣元：青森県弘前市 ■ 派遣期間：H24.4.1～H24.7.7 H25.4.1～H27.3.31
- 派遣先所属：復興むらづくり推進課
- 派遣先の主な担当業務：漁業集落防災機能強化事業に関する用地取得、工事監督



東日本大震災から10年、野田村の皆様へ平穏な生活が戻りつつあることは復興に携わった応援職員として大変うれしく思います。

当時を振り返ると、復旧から復興へシフトした平成24年4月1日、小田祐士村長のリーダーシップにより、次の3つの軸が明確になっていたことで、全国各地から集まった応援職員が迷うことなく一丸となって各事業に取り組むことができ、無事目標にたどり着いた要因だと考えております。

- ①被災者の皆さんが1日でも早く元通りの生活ができるような復興計画が組まれていた。
- ②既に被災者の意見を聞いた上で地区ごとに目指すべき方向性が示されていた。
- ③役場は最少人員で運営されていたことから、通常業務と復興関連の調整役は村職員、復興事業は専門分野の応援職員が担うという体制が構築されていた。

私が担当した事業は、約1kmにわたり津波の被害を受けた宅地と県道のかさ上げを並行して行うもので、村と県の事業が混在していたため、隣り合っ

性もありましたが、県北広域振興局の方々が分け隔てなく親切に対応してくださったおかげで地区の皆様からも協力が得られ、その後の円滑な事業遂行につながりました。

派遣期間中の住環境などについては村の担当者のご尽力により国民宿舎を用意していただき、後半は自主再建等に伴い空室となった応急仮設住宅も選択できるように不自由なく過ごすことができました。

復興部署が解散した現在でも、村職員と応援職員同士は強い絆で結ばれていますが、自治体間の関係は時間の経過とともに、途切れつつあると感じています。今思えば、派遣が続いているうちに「○○友好都市」など何らかの名称で交流が続くような体制を整え、祭りや物産の交流などで関係性を継続できていれば、いずれ隣県地域間の活性化につながったかもしれません。

最後に、弘前市に戻ってからは、大規模な造成を伴う埋立処分場(長辺400m×短辺100m)の整備、令和2年度からは弘前城石垣修理事業を担当しておりますが、いずれも野田村での復興工事並みに規模が大きく当時の経験が役立っています。

さいとう ゆうき
齋藤 祐規

- 派遣元：青森県青森市 ■派遣期間：H27.4.1～H28.3.31
- 派遣先所属：復興むらづくり推進課
- 派遣先の主な担当業務：都市公園担当



応援職員として派遣されることが決定し、まず気がかりになったことは、居住場所がどこになるかでした。私の場合、応急仮設住宅か国民宿舎えぼし荘かを選択でき、国民宿舎えぼし荘を選びましたが、冷蔵庫、洗濯機、テレビ等の最低限の家電設備がそろっていたため、ほぼ身一つで乗り込むことができました。また、食堂と温泉が併設されていた上、週一回部屋の掃除も行ってもらえていたため、だいぶ快適に生活できました。

青森市人事課の計らいにより任期の5日前から入村できたため、前任者からの引継ぎに十分な時間が得られました。慣れない土地に馴染めるのか、村職員及び先に派遣されて来ている方々とうまく打ち解けられるのか、仕事内容をこなせるか等々多くの不安を抱えて乗り込むため、引継ぎの時間を含め慣らしの期間が数日もらえたのは有益なことでした。

私の任期は1年でした。担当する業務の内容、こ

れまでの経緯、これからの方針等を飲み込むのに2、3か月を要しました。このことから、実働として仕事を進めていくには、最低でも1年、できれば2年の任期が適当ではないかと感じました。3年以上になるとその土地に愛着が湧きすぎてしまい、派遣元自治体に戻りたくなくなるのではと思います。

私の派遣先だった野田村は、村職員をはじめ、まちの人たちも快く歓迎してくれているのが伝わってきて非常に居心地がよく素晴らしいところでした。

青森市に戻ってきた今でも年数回村を訪れ、復興事業完了後の状況や使われ方を確認しつつ、まちの人との交流を継続しています。決して誇張した表現ではなく、毎回まるで故郷に帰ってきたかと錯覚するほど皆さん大変温かく迎え入れてくれるため、心がフル充電されて帰ることができます。いつもありがとう。そして、心はいつも「のだ村民」なのだ。

きむら まなぶ
木村 学

- 派遣元：岩手県盛岡市 ■派遣期間：H28.4.1～H29.3.31
- 派遣先所属：総務課
- 派遣先の主な担当業務：被災者支援総合交付金、統計調査、防災行政無線



私は、震災から5年が経過した平成28年度に派遣されました。各地で産業や生活の復旧・再建が進んだ一方、市街地復興事業や避難生活は長期化し、災害公営住宅や統合される応急仮設住宅への転居で被災者のコミュニティづくりが再燃するなど、被災地の課題はより複雑に変化していたように感じました。

被災地には、国内外から本当にたくさんの支援と善意が寄せられました。支援は被災者の生活を支える希望の光でしたが、助成金が途絶えたときの事業継続に不安を抱えるNPO、ボランティアの学生や団体が来なくなり活動を継続できなくて困っている被災地域、村職員の意識やスキルとのギャップに悩む応援職員など、さまざまな話を耳にしていました。

被災地派遣の1年間、一体何をどうすべきか自分に問い掛けました。「一緒に汗をかく、押し付けない、郷に従う」ことを、最初に訪れた港で真っ青な海と空に私は誓いました。

総務課企画調整班に配属され、被災者支援総合交付金の交付事務を主に統計調査、三陸鉄道、防災行

政無線、復興記録誌の制作などを担当しました。

地図に残る復興事業も、住民に寄り添う被災者支援も担当していない私に、自分が復興の役に立った実感はありません。人にはそれぞれに役割があると思います。お互いの違いを理解し合い、尊重し合い、それぞれが役割を全うしなければ物事は成し遂げられないと信じて貫いてきました。

野田まつり、LIGHT UP NIPPON、なもみなどの行事では、地域を想う人たちに心を奪われました。

平成28年台風第10号で再び被災した養殖孵化場では「言葉なんてかけなくていい。大丈夫、またやり直すさ」と空を見上げる村長に頭が上がりませんでした。

ここで暮らす皆さんは、ずっとあの津波の記憶と向き合い懸命に生きてきたことを痛感しました。たくさんのことを教わり、お付き合いくださった皆さんには本当に感謝しかありません。

大きな恩返しはできませんが、これからも野田村とのつながりを大切にしていきたいと思っています。

えびな さとる
蝦名 聡

- 派遣元：青森県 ■ 派遣期間：H28.4.1～H30.3.31
- 派遣先所属：復興むらづくり推進課
- 派遣先の主な担当業務：用地取得・補償



青森県から野田村への応援職員は、平成24年度から平成29年度までの6年間、初代が土木職で、二代目から五代目は事務職が派遣されていました。

五代目となった私の派遣期間は被災から5年が経過した平成28年春からの2年間だったので、村施工の復興事業はだいぶ形が見えてきている時期でしたが、8月末には台風10号の被害があり、自然災害の恐ろしさを改めて感じました。

復興事業の進捗に応じて必要な業務の内容も変わっていくため、同じ青森県からの応援職員でも派遣時期によってやるべきことが異なりましたが、私に関しては取得済用地の用途ごとの分筆や整備が完了した部分にある土地の地目変更といった登記手続や会計検査対応の準備など、歴代の中では後処理的なものが多かったです。

野田村には青森県だけでなく様々なところからの応援職員や任期付職員の方もおられました。全ての皆さんに温かく迎えていただき感謝しています。

派遣時期が最後のほうだったこともあってか、業

務上大きく戸惑うことはそれほど多くなかったと思います（皆無だったとは言いませんが）。

野田村で手配していただいた「国民宿舎えぼし荘」に宿泊（居住？）していたので食事や風呂が充実しており、炊事や掃除の手間もなく快適に生活できました。

飲み会も頻繁にあって、楽しい語らいや三陸の海の幸や山の幸などを堪能しましたが、あまりに堪能しすぎて地獄のような翌日を過ごしたこともありました。

もともと趣味で楽器をやっているのですが、派遣期間中は地元の「のだ吹奏楽団」にも参加させていただき、村職員以外の方とも交流することができました。

野田村での2年間は、公私ともに忘れることのできない貴重な経験となりました。

コロナ禍が落ち着いたなら、また野田村に「帰省」したいと思っています。

青森県弘前市 総務部人事課

東日本大震災の発災後、当時、地元弘前大学の人文学部准教授であった先生が、あまり報道されていなかった野田村が大変な状況になっていることを聞きつけ、その先生をはじめとした市民の有志が野田村を支援することにしました。その活動を知った弘前市が先生たちから現場の状況を聞き、対口支援であれば確実に支援の輪が広がると考え全力投球で野田村を支援していくことにし、また、「野田村は小さい村のため、ボランティア以上に自治体の応援を必要としている」との情報を得たことから、職員を派遣することに決めました。

職員を派遣するに当たっては、現場の状況に迅速に対応できる中堅職員の人選と、その応援職員が行っていた業務の引継ぎを速やかに行える環境整備が大事であると感じています。

今回、野田村に職員を派遣したことで、被災地の

状況を肌で感じ、現場の声を直接聞くことで真に必要な支援を行うことができ、また、本市としても被災地における様々な課題に対するノウハウを得ることができています。

現在でも、応援職員と野田村や他自治体から派遣されていた職員との交流が続くなど、職員派遣によって人脈が広がったことも本市にとって貴重な財産になっています。



弘前市のマスコットキャラクター「たか丸くん」

市町村長メッセージ

久慈市長 遠藤 謙一



東日本大震災津波から10年が経過いたしました。震災で犠牲になられた方々、またご遺族の皆様への深い悲しみに哀悼の意を表すとともに、被災された全ての方々に心からお見舞いを申し上げます。

東日本大震災津波により、本市においても、これまで経験したことのない未曾有の規模の被害を受けましたが、市民をはじめ、国内外の皆様から多くのご支援、ご指導を賜りましたことに対し、改めて深く感謝申し上げます。

被災直後からがれき処理、インフラ復旧や被災者の生活再建など、復旧・復興に向けて対応しなければならない中、青森市から中長期の派遣として平成26年度まで延べ19名の職員の方々に応援をいただき、混乱の状況下においても早急な復旧対応ができたことはもちろん、本市職員や市民が誰一人折れることなく、復旧・復興に向けて進むことができたと考えており、応援職員の皆様のご支援に対し深く感謝申し上げます。また、日常業務多忙の中、いち早く職員派遣要請をお受けいただいた青森市役所の皆様に対しましても、深く敬意と感謝を申し上げます。

本市の復旧・復興事業は、「地下水族科学館もぐらん

びあ」や「小袖海女センター」の再建、防災公園や避難タワーの整備など順調に復旧・復興が進められたものの、平成28年台風第10号災害や令和元年東日本台風災害などの度重なる災害に見舞われ、県内外の皆様から温かいご支援、また多くの応援職員の派遣をいただきながら復旧・復興の取組を進めてきたところであり、「絆」の強さ、大切さを痛感したところでもあります。

岩手県内においては、復旧・復興が道半ばの自治体もあり、全ての被災者の方々に一日も早く平穏な日々が訪れることを願うとともに、久慈市としても被災自治体の着実な復旧・復興に向けて様々な面で支援を行ってまいります。

本市では「子どもたちに誇れる 笑顔日本一のまち久慈」という基本理念を掲げ、子どもたちを安心して育てられるまち、笑顔あふれる新しい久慈市の実現を目指しております。今後、人口減少、少子高齢化が進む中、災害発生時のみならず、地方創生や地域活性化に向けて他自治体との連携がますます重要になると考えており、復旧・復興を通して築かれた「絆」を大切にし、課題解決に向けて取組を進めてまいりますので、皆様のご指導、ご協力をよろしくお願いいたします。

復興の状況



小袖海女センター



総合防災公園



みなとオアシス 久慈地下水族科学館「もぐらんびあ」



三陸沿岸道路久慈北道路

たけうち ゆきもと
竹内 通源



- 派遣元：青森県青森市 ■ 派遣期間：H23.11.18～ H24.1.26、H26.2.1～ H26.3.31
- 派遣先所属：建設部建築住宅課
- 派遣先の主な担当業務：災害復興住宅等の工事監理

私が派遣された久慈市では、被災直後の混乱が収束に向かい、これから本格的に復旧へと向かう大変な時であったと記憶しております。岩手県沿岸地域における深刻な被災状況をニュースで知っておりましたので、派遣先自治体での職務や日常生活、何より傷付いた方々との接し方などかなりの不安がありました。配属先の建築住宅課（当時）をはじめ、久慈市職員の方々に温かい笑顔で迎えられ、逆に勇気づけられたことが心に残っています。

温厚に接してくださった当時の上司の途中退職を派遣の終了後に知り、被災地職員の方々の復興に向けたプレッシャーやストレスに加え、地域の事情を知らない応援職員への対応は大変なご苦労があったことと察します。

青森市は、複数の職員を原則2か月交代で派遣していたため、受入先の久慈市では次々と職員が交代し、

その都度に職務引継ぎや現場状況、住生活などに関する説明などの対応に大変であったと思いますが、それら全てにおいて丁寧なご対応をいただき、おかげさまでスムーズに仕事に着手することができました。

久慈市では東日本大震災の傷跡が癒えない中、大雨や洪水などの度重なる被害に見舞われましたが、大きな悲劇を経験し、力強く粘り強いまちへと進化を遂げておられることと思います。

私事ですが、祖父と祖母が同じ沿岸部の田野畑村出身です。私の派遣期間終了後に亡くなった祖母は骨太で優しい人で、当時、よく「一緒に久慈市に派遣されたい！」と話していました。久慈市の優しい方々との思い出が重なります。

これからも久慈市の災害に負けない強いまちづくりが推進されることをご祈念申し上げるとともに、また何度でも久慈市を訪れたいと思っています。

しおこし ともゆき
塩越 智之

右側が塩越さん



- 派遣元：青森県青森市
- 派遣期間：H24.4.1～ H24.6.30、H25.4.1～ H25.6.30
- 派遣先所属：建設部建築住宅課
- 派遣先の主な担当業務：市営建築物の営繕工事の設計・工事監理

青森市では、平成23年度から久慈市への派遣を行っており、私は平成24年4月から3か月、平成25年4月から3か月の2回派遣されました。久慈市を訪れるのは初めてでしたが、前任者からの引継ぎやアドバイスもあり、それほど不安になることもありませんでした。

久慈市には、建築系技術職員として派遣されました。市営住宅や小・中学校などの市営建築物の改修工事の設計業務などが中心だったので、被災者の方と直接接することはありませんでしたが、市職員の方に助けてもらいながら、なんとか業務を遂行することができました。

派遣された当初は、市役所周辺しか見る機会がなく、地震や津波の被害は少なかったのかなと思って

いました。津波の被害に遭った地域に足を踏み入れたのは地震発生から1年以上経ってからでした。それまで報道等で見ていたものの、実際にその光景を目にしたときは、壊滅的な状況にがく然とし、復興は始まったばかりだと実感しました。

久慈市職員の方々には、派遣中ご迷惑をおかけした部分もあったかと思いますが、大変お世話になりました。ありがとうございます。

壊滅的な被害を受けた『もぐらんぴあ』やテレビドラマのロケ地となって賑わっている『小袖海女センター』が完成したことは聞いていましたが、まだ現地見学ができていないので、状況が落ちついたら訪れたいと思います。その時はまたご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いします。

青森県青森市 総務部人事課

平成 23 年 3 月、東日本大震災により東北各地に未曾有の被害がもたらされました。そのような中、全国市長会から本市に対して久慈市への人的支援の要請があり、東北にとって厳しい試練の中、東北が一丸となって被災地への支援を行っていくことが重要であり、青森市としてできる限りの支援をさせていただきたいとの思いから、技術職の職員を中心に平成 23 年度から平成 26 年度までの間に延べ 38 名の職員を派遣いたしました。

職員の派遣にあたっては、職員が不在となることでの通常業務への影響の軽減、慣れない環境の中での派遣職員の心身の健康管理など、考慮しなければならないことが多く、人選や派遣元所属との調整などの点で苦労いたしました。

しかしながら、久慈市での生活や災害復旧業務従事を通じて得た経験は、本市職員にとりましても非

常に貴重な経験となり、公務員としての成長につながるとともに、派遣終了後も幅広い分野で本市での職務従事に活かされているものと考えております。

今後とも、今回の職員派遣を通じて得た絆と経験を大切にしながら、相互の発展と交流を深めてまいりたいと考えております。

末筆ではありますが、本市の職員の受け入れについて、震災直後の混乱の中にも関わらず、きめ細やかなご配慮をいただき、誠にありがとうございました。



青森市観光キャラクター セイラ
©NATUIDAIKU/TAITOSHA

市町村長メッセージ

普代村長 柎屋 伸夫



東日本大震災津波の発災から10年が経過いたしました。改めまして亡くなられた方々に哀悼の意を表しますとともに、いまなお不自由な生活を余儀なくされている方々に心よりお見舞い申し上げます。

また、東日本大震災津波においては、全国の皆様をはじめ各地方公共団体や関係諸団体の皆様より心温まる多くのご支援を賜りましたことに心より感謝申し上げます。

さて、本村におきましては、村民1人が行方不明となったほか、隣村の野田村で村民7人が津波によって命を落としました。普代水門と太田名部防潮堤が機能し、住家には被害がなかったものの、村内の7つの漁港や主要産業となる水産業は壊滅的な被害を受けました。

幸いにも、被災直後から現在に至るまで、友好交流協定を締結する矢巾町様をはじめとする県内の内陸自治体様や在京のふるさと普代会様など本村に縁ある個人、諸団体の皆様のほか、被災地を応援くださる多くの皆様からの温かい励ましの言葉や救援物資、義援金などさまざまな形でご支援をいただきました。震災直後の混乱の中にあつた村にとって、また、何をどうしたらいいのか分からずに立ちつくす

村民にとって、皆様からの温かい想いが勇気を奮い立たせ希望を与えていただいたことが、村民一丸となった初動対応や復旧作業の早期完遂につながったところでもあります。これまで支え応援してくださった全ての皆様に改めまして感謝申し上げます。

平成28年度末に復旧・復興事業を完遂し、現在は、復興を果たした「普代水門」や「普代浜園地」などの施設を活用した観光交流施策の推進を図り、ご支援いただいた多くの皆様に感謝を伝える機会ともしております。

今後とも「自らを災害から守る自助の意識」の普及などに、先人の思いを引き継ぎ一層に取り組むことは、東日本大震災を経験するに至った私どもに課せられた重大な責務であります。また、異常気象による大規模災害が頻繁に発生する昨今、東日本大震災津波により国内や世界中の皆様方から受け継いだ「絆」という大切な共助・公助の意識もしっかりとつながっております。

最後に、本誌がこれからの子供たちの防災教育や共助・公助の意識の広がりなどにかかれ、いつかまた来る地震や津波に備える一助となることも願いつつ、これからも皆が手を携えて夢を描く地域づくりの推進に資することを切望いたします。

復興の状況



普代水門



普代浜園地



三陸沿岸道路普代道路



太田名部漁港

市町村長メッセージ

洋野町長 水上 信宏



あの震災から10年が経過しましたが、本町の復旧・復興事業につきましては、大震災からの「確かな復興」を目指して、町民皆様と手を携え着実に歩みを進めてきたところであります。

おかげをもちまして関係皆様の一丸となった取組と心温まるご支援等により、平成28年度末には本町の震災復興計画登載事業のほとんどが完了できたところであり、御支援を賜りました関係皆様に、衷心より厚く御礼を申し上げます。

我が国の観測史上最大級のマグニチュード9.0を記録したこの地震に伴う大津波の襲来により、本町では、船舶については登録漁船381隻のうち258隻が流出、水産加工場や漁協・漁港施設及びウニの栽培漁業センター並びに種市海浜公園や「ふるさと物産館」などが大規模損壊、さらに定置網及びサケふ化場の損壊に加えて、養殖アワビや天然ウニの流出、JR八戸線大浜川鉄橋の流出と線路損壊など各所に甚大な被害を受けたところであります。

発災当時、水門閉鎖は消防団の一門一部担当制による迅速な対応をはじめ、水産加工場に働く従業員の素早い避難行動や、身体の不自由な方を援助しながら避難された自主防災組織の皆様の行動、沖合の避難漁船の中で持病が悪化した方を、四方八方手を

尽くしながら海上自衛隊の艦船による救出支援等、これら総合的な取り組みにより一人の犠牲者も出さなかったことは、町民皆様の「結の心」と「絆」の強さを感じたところであり、この勇気ある行動に深く感謝しているところであります。

このように、本町の大震災の復興事業は関係皆様からの温かい御支援により早期完了をみたところでありますが、今なおその取り組みを進める自治体の確かな復興までの間、被災地として本町も寄り添い、ともに歩みを進めてまいり所存であります。

こうした中、令和2年度内に予定されている三陸沿岸復興道路の町内全線開通を契機と捉えまして、県境を越えた地域間の一層の交流や、救急搬送時間の短縮による医療体制強化、産業振興、企業誘致などを見込み、定住化団地等整備の取組も進めているところであります。

結びに、これまで本町の復旧・復興への御支援を賜りました関係皆様に、改めて心より感謝を申し上げますとともに、子供達の輝く希望ある未来のため「海と高原の牧場（まきば）絆をつなぎ 輝く未来を拓くまち」を目指し取組を進めてまいりますので、皆様からの引き続きのご指導よろしくお申し上げます。

復興の状況



ひろの水産会館ウニーク



種市海浜公園



ウニ栽培漁業センター



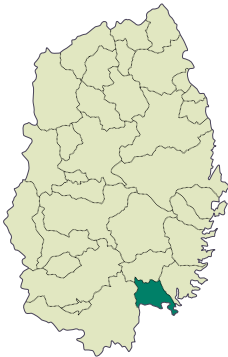
ウニ増殖溝と種市魚港

資料



陸前高田市

- ・所在地：陸前高田市高田町字鳴石 42 番地 5
- ・電話：0192 (54) 2111
- ・HP：http://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/



【沿革】

- S 30. 1 3 町 5 村が合併し陸前高田市誕生
- S 35. 5 チリ地震津波襲来
- H 23. 3 東日本大震災津波襲来
- H 23.12 陸前高田市震災復興計画策定
- H 26. 3 三陸沿岸道路高田道路開通
- H 26.10 名古屋市と兄弟協定締結
- H 26.11 市消防防災センター落成
- H 29. 7 市立図書館オープン
- H 30. 2 県立高田病院落成
- H 30. 4 夢アリーナたかた落成
- H 31. 1 保健福祉総合センター落成
- R 2. 4 奇跡の一本松ホール落成
- R 2. 8 高田松原運動公園完成

【わがまちの特色・自慢】

岩手県南東部の太平洋沿岸に位置し、気候は県内で最も温暖です。三陸海岸特有の奇勝が織りなす広田半島など海・山・川の豊かな自然と資源に恵まれていましたが、東日本大震災津波以後、新しいまちづくりとして「ノーマライゼーションという言葉のいらぬまちづくり」を目指しています。

【概要】

(1) 人口

区分	人口	世帯数	人口密度 (人/㎢)	高齢者比率 (65歳以上)
22年国調	23,300人	7,785	100.3	34.90%
27年国調	19,758人	7,487	85.2	36.79%
住基台帳 (R2.1.1 現在)	18,931人	7,618	81.6	39.08%

(2) 地目別面積 (H31.1.1 現在) 単位:m²

地目	面積	割合	地目	面積	割合
田	7,008,735	3.3%	山林原野	162,764,702	77.0%
畑	9,302,740	4.4%	その他	25,105,719	11.9%
宅地	7,296,422	3.5%	計	211,478,318	100%

【施策】

(1) 市町村勢計画概要

陸前高田市まちづくり総合計画
(2019年3月策定 期間：2019年度～2028年度)
前期基本計画：2019年度～2023年度
後期基本計画：2024年度～2028年度
将来像：「夢と希望と愛に満ち 次世代につなげる
共生と交流のまち 陸前高田」

基本方向：

- 1 「復興の確実な推進と
誰もが安心して暮らすまちづくり」
- 2 「快適に気持ちよく暮らすまちづくり」
- 3 「安全・安心で環境にやさしいまちづくり」
- 4 「子供たちを健やかに育むまちづくり」
- 5 「ともに支え、健康に暮らすまちづくり」
- 6 「市民と築く交流と連携の住みよいまちづくり」
- 7 「活気に満ちあふれ豊かに暮らすまちづくり」
- 8 「市民にわかりやすく健全な行財政運営」

【行政】職員

部門	H31.4.1 現在	R2.4.1 現在
一般行政	177人	168人
消防	35人	34人
教育	29人	28人
企業等会計	26人	27人
職員計	267人	257人

【友好都市】愛知県名古屋市

【祭り・行事】うごく七夕まつり・気仙町けんか七夕まつり (8月)、ツール・ド・三陸 (9月)、広田湾大漁まつり (10月)、陸前高田市産業まつり (11月)、陸前高田応援マラソン (11月)、横田町あゆの里まつり (11月)、剣豪千葉周作少年剣道錬成大会 (12月)

【名産・特産品】【海産物】ワカメ、カキ、ホタテ、エゾシカゲガイ 【林産物】シイタケ、きくらげ

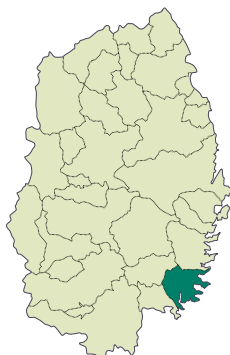
【農産物】リンゴ、たかたのゆめ (米)、ゆず、アピオス、ヤーコン、気仙茶

【主な郷土出身者】千昌夫 (歌手)、村上弘明 (俳優)、畠山直哉 (写真家)、佐藤元子 (オペラ歌手)、千葉周作 (幕末の剣豪)



大船渡市

・所在地：大船渡市盛町字宇津野沢 15
 ・電話：0192 (27) 3111
 ・HP：https://www.city.ofunato.iwate.jp/



【沿革】

- S 27. 4 大船渡市制施行（2町5村合併）
- S 34. 6 大船渡港が重要港湾に指定
- S 35. 5 チリ地震津波襲来
- H 13.11 気仙郡三陸町と合併
- H 23. 3 東日本大震災津波襲来
- H 23.10 大船渡市復興計画策定
- H 25. 9 国際フィーダーコンテナ定期航路開設
- H 26. 4 大船渡市魚市場供用開始
- H 28. 9 災害公営住宅全戸完成
- H 29. 3 大船渡港湾口防波堤復旧
- H 31. 4 大船渡駅周辺地区土地区画整理事業竣工式

【わがまちの特色・自慢】

本市は、雄大なリアス海岸の代表的な景勝地である「基石海岸」や三陸沿岸最高峰「五葉山」、天然の良港「大船渡港」など、自然豊かで風光明媚なまちです。
 東日本大震災からの復興は着実に歩みを重ね、新しい大船渡市魚市場の完成による水産業の復興をはじめ、重要港湾である大船渡港の新たな国際フィーダーコンテナ定期航路開設による物流拠点の形成のほか、大船渡駅周辺地区では、土地区画整理事業における基盤整備工事の完了、防災観光交流センターや夢海公園などの整備により中心市街地の賑わいが増すなど、復興の進捗を広く実感できる状況となっています。

【概要】

(1) 人口

区分	人口	世帯数	人口密度 (人/㎢)	高齢者比率 (65歳以上)
22年国調	40,737人	14,819	126.0	30.88%
27年国調	38,058人	14,807	118.0	34.11%
住基台帳 (R2.1.1現在)	35,849人	14,949	116.8	37.10%

(2) 地目別面積 (H31.1.1 現在) 単位:㎡

地目	面積	割合	地目	面積	割合
田	3,274,800	1.1%	山林 原野	223,810,480	72.9%
畑	6,699,249	2.2%	その他	61,676,453	20.1%
宅地	11,553,018	3.8%	計	307,014,000	100%

【施策】

(1) 市町村勢計画概要

大船渡市総合計画

(平成23年3月策定 期間：平成23年度～令和2年度)

将来像：

ともに創る 三陸の地に輝き躍動するまち 大船渡

施策の大綱：

- 1 豊かな市民生活を実現する産業の振興
- 2 安心が確保されたまちづくりの推進
- 3 豊かな心を育むまちづくりの推進
- 4 潤いに満ちた快適な都市環境の創造
- 5 やすらぎある安全なまちづくりの推進
- 6 自然豊かな環境の保全と創造
- 7 自立した行政経営の確立

(2) 令和2年度普通会計当初予算

【予算規模】

22,265百万円（増減率△5.4%）

【重点事業】

重点事業	百万円
1 中赤崎地区道路新設・改良事業	(611)
2 学校施設整備事業	(188)
3 消防施設整備事業	(110)
4 スポーツ施設整備事業	(104)
5 夏イチゴ産地化事業	(76)
6 三陸マリアージュ創出・展開事業	(42)

(3) ユニークな施策

銀河連邦交流

宇宙航空研究開発機構（JAXA）にゆかりのある5市2町（北海道大樹町、秋田県能代市、宮城県角田市、神奈川県相模原市、長野県佐久市、鹿児島県肝付町、岩手県大船渡市）が連邦を形成し銀河連邦フォーラムの開催、子供交流・経済交流の実施、各連邦で開催するイベントへの参加など、広範な交流を実施している。

【行政】職員

部門	H31.4.1 現在	R2.4.1 現在
一般行政	269人	264人
消防	0人	0人
教育	77人	75人
企業等会計	59人	62人
職員計	405人	401人

【姉妹都市】 パロス・デ・ラ・フロンテラ市（スペイン）

【祭り・行事】 大船渡基石海岸観光まつり（5月4～5日）、式年大祭（五年祭、春・秋）、三陸・大船渡夏まつり（8月第1金・土曜日）、盛町灯ろう七夕まつり（8月6～7日）、大船渡市初さま・うに・アワビ・ホタテ・カキ・ホヤ・ワカメ祭（8月）、三陸・大船渡 東京タワーさんままつり（9月）、大船渡市産業まつり（10月）、スネカ（1月15日）、三陸・大船渡つばきまつり（2～3月）

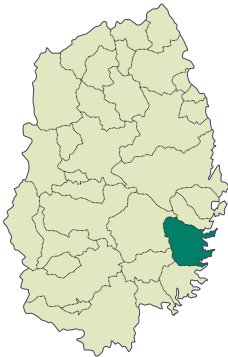
【名産・特産品】 サンマ、海産物（カキ・ウニ・ホタテ・ワカメ・アワビ等）、水産加工品（塩ウニ等）、木工品、ころ柿、花き（花壇苗）、銘菓（かもめの玉子・しゅーろーる・甘はたて・柿羊羹・あんころ柿・いかせんべい・エイサク飴等）

【主な郷土出身者】 新沼謙治・大船わたる・大沢桃子（歌手）、栗生澤淳一（元バレーボール全日本男子代表）、志田宗大（元プロ野球選手）



釜石市

・所在地：釜石市只越町三丁目 9 番 13 号
 ・電話：0193 (22) 2111
 ・HP：https://www.city.kamaishi.iwate.jp/



【沿革】

- S 12. 5 市制施行
- S 20.7.8 艦砲射撃を受ける
- S 30. 4 釜石市、甲子村、鶴住居村、唐丹村、栗橋村の 1 市 4 村が合併
- S 35. 5 チリ地震津波襲来
- S 59. 4 三陸鉄道開業
- H 19. 3 仙人峠道路開通
- H 21. 3 釜石港湾口防波堤完成
- H 23. 3 東日本大震災津波襲来
- H 23.12 釜石市復興まちづくり基本計画策定
- H 31. 3 釜石市防災市民憲章制定
- H 31. 3 三陸鉄道リアス線運行開始

【わがまちの特色・自慢】

三陸復興国立公園の中心に位置する当市は、三陸漁場を控え、近代製鉄発祥の地としての歴史を持ち、「鉄と魚のまち」として発展してきました。平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災津波は、当市に甚大な被害をもたらしましたが、次世代に誇りうるまちづくりを使命に、市民一丸となり、決して撓むことなく、屈することなく、復旧・復興に取り組んでいます。

【概要】

(1) 人口

区分	人口	世帯数	人口密度 (人/㎢)	高齢者比率 (65歳以上)
22 年国調	39,574 人	16,094	89.7	34.81%
27 年国調	36,802 人	16,860	83.6	35.55%
住基台帳 (R2.1.1 現在)	32,977 人	16,319	74.9	39.47%

(2) 地目別面積 (H31.1.1 現在) 単位:㎡

地目	面積	割合	地目	面積	割合
田	1,738,116	0.4%	山林原野	284,843,482	64.7%
畑	3,758,916	0.9%	その他	141,641,645	32.2%
宅地	8,357,841	1.9%	計	440,340,000	100%

【施策】

(1) 市町村勢計画概要

釜石市復興まちづくり基本計画
 「スクラムかまいし復興プラン」
 (平成 23 年 12 月策定 期間：平成 23 年度～令和 2 年度)
 将来像：
 「三陸の大地に光輝き希望と笑顔があふれるまち釜石」
 基本姿勢：「撓まず屈せず」

基本方針：

- 1 災害に強い都市構造への抜本的転換
- 2 この地で生き続けるための生活基盤の再建
- 3 逆境をバネにした地域経済の再建
- 4 子どもたちの未来や希望の創造

(2) 令和 2 年度普通会計当初予算

【予算規模】
 27,987 百万円 (増減率△ 37.5%)

【重点事業】	百万円
1 公共土木施設災害復旧事業 (元年豪雨災)	(1,500)
2 避難道路整備事業	(304)
3 新庁舎周辺道路整備事業	(258)
4 大天場公園移転整備事業	(220)
5 ローカルベンチャー推進事業	(58)
6 支線化バス運行事業	(57)

(3) ユニークな施策

- ◎ 橋野鉄鉱山事業：幕末から明治期にかけて日本の産業化の先駆けとなった重工業分野における産業遺産群「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼・造船・石炭産業」の構成資産として橋野鉄鉱山がユネスコ世界遺産に登録されている。
- ◎ 子ども・子育て支援給付事業：令和元年度からスタートした幼児教育・保育無償化に関連して、副食費の無償化等、給付費を充実させる。
- ◎ 復興活動支援事業：市が委嘱する復興支援員（釜石リージョナルコーディネーター）が、被災各地区の復興支援など総合コンサルティングを行う。

【行政】職員

部門	H31.4.1 現在	R2.4.1 現在
一般行政	344 人	324 人
消防	0 人	0 人
教育	43 人	44 人
企業等会計	52 人	55 人
職員計	439 人	423 人

【姉妹都市】 ディーニュ・レ・パン市 (フランス)、愛知県東海市

【友好都市】 富山県朝日町

【祭り・行事】 釜石さくら祭り (3 年に 1 度・4 月)、薬師公園桜まつり (4 月)、釜石大観音炎の祭典 (6 月)、うみやま郷土芸能大競演祭 (7 月)、釜石よいさ (8 月)、釜石納涼花火 (8 月)、釜石はまゆりトライアスロン国際大会 (9 月)、釜石まるごと味覚フェスティバル (10 月)、釜石まつり (10 月)、かまいし仙人峠マラソン大会 (10 月)、釜石健康マラソン大会 (10 月予定)、かまいし冬の味覚まつり (1 月)、全国虎舞フェスティバル (開催時期未定)

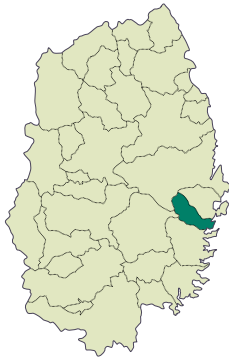
【名産・特産品】 三陸わかめ、サケ、ホタテ、カキ、アワビ、シイタケ、釜石ラーメン、仙人秘水、地酒「浜千鳥」

【主な郷土出身者】 大滝詠一 (作曲家)、瀬川爾朗 (東京大学名誉教授)、三浦命助 (三閉伊百姓一揆指導者)、あんべ光俊 (歌手)、三鬼彰 (新日本製鐵株相談役)



大槌町

・所在地：上閉伊郡大槌町上町1番3号
 ・電話：0193(42)2111
 ・HP：https://www.town.otsuchi.iwate.jp/



【沿革】

- S 30. 4 金沢村と合併、現在の大槌町となる
- S 35. 5 チリ地震津波襲来
- S 47.10 国道45号線全線開通
- H 2.10 町制施行100周年記念式典
- H 9.10 第17回全国豊かな海づくり大会開催
- H 12. 5 おおちゃん情報ネットワーク稼働
- H 17.10 米国フォートブラッグ市と姉妹都市締結
- H 23. 3 東日本大震災津波襲来
- H 23.12 大槌町東日本大震災津波復興計画策定
- H 31. 3 第9次大槌町総合計画策定
- R 2. 2 町制施行130周年記念式典

【わがまちの特色・自慢】

陸中海岸国立公園のほぼ中央に位置し、世界三大漁場の一つと言われる三陸漁場を背景に「つくり育てる漁業」を実践しています。
 平成9年10月には、天皇皇后両陛下ご臨席のもと「第17回全国豊かな海づくり大会」が開催されました。

【概要】

(1) 人口

区分	人口	世帯数	人口密度 (人/㎢)	高齢者比率 (65歳以上)
22年国調	15,276人	5,689	76.2	32.39%
27年国調	11,759人	4,927	58.7	34.09%
住基台帳 (R2.1.1現在)	11,663人	5,323	58.2	37.26%

(2) 地目別面積 (H31.1.1現在) 単位:m²

地目	面積	割合	地目	面積	割合
田	1,591,821	0.8%	山林 原野	180,267,981	89.9%
畑	4,150,965	2.1%	その他	11,119,539	5.5%
宅地	3,289,694	1.6%	計	200,420,000	100%

【施策】

(1) 市町村勢計画概要

- 第9次大槌町総合計画
 (2019年3月策定 期間：2019年度～2028年度)
 前期基本計画：2019年度～2023年度
 後期基本計画：2024年度～2028年度
 基本理念：
 「魅力ある人を育て新しい価値を創造し続けるまち大槌」
 基本方針：
 1 産業を振興し町民所得を向上させるまちづくり
 2 健康でぬくもりのあるまちづくり
 3 学びがふるさとを育て
 ふるさとが学びを育てるまちづくり
 4 安全性と快適性を高めるまちづくり
 5 将来を見据えた持続可能なまちづくり
 6 未来につなげる着実な復興まちづくり

(2) 令和2年度普通会計当初予算

【予算規模】
 11,406百万円(増減率△43.3%)

【主要事業】	千円
1 大槌町保健センター整備事業	(186,800)
2 大槌町ジビエソーシャルプロジェクト	(30,336)
3 大槌高校教育魅力化推進事業	(11,192)
4 鎮魂の森整備事業	(10,956)
5 斎場整備事業	(514,307)
6 コミュニティ形成事業	(44,230)

(3) ユニークな施策

- 1 大槌町地域産業イノベーション事業
- 2 三陸♥おおつちPR大使制度事業
- 3 健康まつり開催事業
- 4 大槌高校魅力化推進事業
- 5 震災伝承啓発活動
- 6 自主防災組織の活性化による地域防災力向上事業
- 7 協働のまちにぎわい創出事業

【行政】職員

部門	H31.4.1現在	R2.4.1現在
一般行政	116人	118人
消防	0人	0人
教育	16人	13人
企業等会計	13人	13人
職員計	145人	144人

【姉妹都市】フォートブラッグ市(アメリカ)

【祭り・行事】大槌稻荷神社祭典・小鎚神社祭典(9月下旬開催)、鮭まつり、大槌新山高原ヒルクライム大会

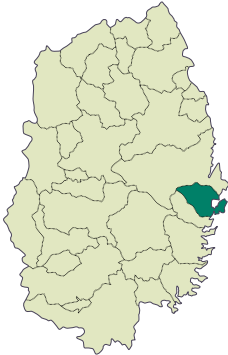
【名産・特産品】新巻鮭、ワカメ、ホタテ、アワビ、ウニ、乾シイタケ、ワサビ、漬物(ばーらー漬)

【主な郷土出身者】岩間正男(画家)



山田町

- ・所在地：下閉伊郡山田町八幡町 3-20
- ・電話：0193 (82) 3111
- ・HP：https://www.town.yamada.iwate.jp/



【沿革】

- S 30. 3 山田町、豊間根村、大沢村、織笠村、船越村の1町4村が合併
- H 35. 5 チリ地震津波襲来
- H 4. 7 三陸海の博覧会開催、鯨と海の科学館が開館
- H 11. 5 ふれあいパーク山田（道の駅）オープン
- H 12. 5 オランダ王国ザイスト市との友好都市を締結
- H 14. 8 三陸縦貫自動車道「山田道路」が供用開始
- H 17.10 山田町合併 50 周年記念式典開催
- H 23. 3 東日本大震災津波襲来
- H 23.12 H23.12 山田町復興計画策定

【わがまちの特色・自慢】

三陸復興国立公園の中央部に位置し、北上高地の山並みとリアス式海岸の自然美に恵まれた地で、冬の積雪は少なく春、夏、秋は行楽に最適な気候です。天然の良港をいかした養殖漁業が盛んであり、特に殻つきカキとマツタケの生産では全国的にも有名です。

【概要】

(1) 人口

区分	人口	世帯数	人口密度 (人/km ²)	高齢者比率 (65歳以上)
22年国調	18,617人	6,605	70.7	31.84%
27年国調	15,826人	6,218	60.2	35.40%
住基台帳 (R2.1.1 現在)	15,330人	6,582	63.2	38.70%

(2) 地目別面積 (H31.1.1 現在) 単位:m²

地目	面積	割合	地目	面積	割合
田	4,133,838	1.7%	山林原野	221,840,630	91.4%
畑	4,435,164	1.8%	その他	8,711,502	3.6%
宅地	3,522,631	1.5%	計	242,643,765	100%

【施策】

(1) 市町村勢計画概要

山田町総合計画（第9次長期計画）
 （平成28年3月策定 期間：平成28年度～令和7年度）
 前期基本計画：平成28年度～令和2年度
 後期基本計画：令和3年度～令和7年度
 <まちづくりの目標>
 - 個性豊かにひとが輝き まちが潤う 山田町 -
 本町が自立し、将来にわたって発展・飛躍していくため、本町に関わる全ての「ひと」が、この「まち」に誇りと愛着を、また、安心と安全を実感できるまちづくりを目指す。

(2) 令和2年度普通会計当初予算

【予算規模】
10,109百万円（増減率△22.6%）

【重点事業】	百万円
1 柳沢北浜地区土地区画整理事業	(153)
2 新たな観光拠点整備事業	(152)
3 織笠漁港海岸施設機能保全事業	(120)
4 台風19号被災者住宅再建支援事業	(132)
5 大浦地区漁業集落防災機能強化事業	(93)

【行政】職員

部門	H31.4.1 現在	R2.4.1 現在
一般行政	157人	160人
消防	0人	0人
教育	26人	27人
企業等会計	24人	24人
職員計	207人	211人

(3) ユニークな施策

- 住民協働推進支援事業
 - 自治会など非営利団体が実施する事業に4/5以内の額を補助
- まちづくり出前講座
 - 住民の要望に応じ担当職員が赴き制度や政策等を説明
 - 要5人以上の参加
 - 個人宅では開催不可
- 山田町人づくり事業（国内外研修等事業）

【友好都市】ザイスト市（オランダ）

【祭り・行事】船越家族旅行村さくらまつり・三陸山田カキまつり（4月下旬）、関口不動尊祭礼（7月上旬）、八幡宮・大杉神社祭礼（9月中旬）、やまだの鮭まつり（11月下旬～12月上旬）

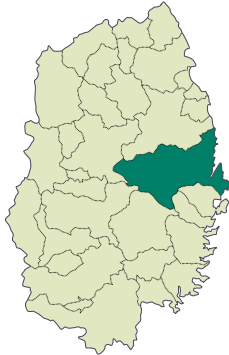
【名産・特産品】殻つきカキ、新巻きサケ、ホタテ、マツタケ、乾シイタケ、山田せんべい、いかとっくり

【主な郷土出身者】鈴木善幸（元内閣総理大臣）



宮古市

・所在地：宮古市宮町 1-1-30
 ・電話：0193 (62) 2111
 ・HP：https://www.city.miyako.iwate.jp/



【沿革】

- H 17. 6 宮古市・田老町・新里村が合併
- H 18. 9 非核平和都市宣言
- H 19. 1 いきいき健康都市宣言
サーモンランド宣言
- H 19. 3 津波防災都市宣言
- H 22. 1 川井村と合併
- H 23. 3 東日本大震災津波襲来
- H 23.10 宮古市東日本大震災復興計画策定
- H 27. 4 宮古港開港 400 周年
- R 元. 8 宮古港海戦 150 周年

【わがまちの特色・自慢】

本州最東端に位置する本市は、1,259.15km²もの広大な面積を有し、三陸復興国立公園と早池峰国立公園を閉伊川が結ぶ、自然環境に恵まれたまちです。昨今では大型外国客船の入港や、ラグビーワールドカップ2019のフィジーやナミビアの公認キャンプ地となり、国内外の交流も広がっています。訪れた人が再び足を運びたいような、魅力の発信に取り組んでいます。また、『「森・川・海」とひとが調和し共生する安らぎのまち』の実現に向け、攻めの姿勢で取り組んでまいります。

【概要】

(1) 人口

区分	人口	世帯数	人口密度 (人/㎢)	高齢者比率 (65歳以上)
22年国調	59,430人	22,509	47.2	30.92%
27年国調	56,676人	23,387	45.0	33.96%
住基台帳 (R2.1.1現在)	51,744人	23,654	41.1	37.13%

(2) 地目別面積 (H31.1.1現在) 単位:m²

地目	面積	割合	地目	面積	割合
田	6,149,207	0.5%	山林 原野	888,682,895	70.6%
畑	19,763,172	1.6%	その他	332,301,160	26.4%
宅地	12,253,566	1.0%	計	1,259,150,000	100%

【施策】

(1) 市町村勢計画概要

宮古市総合計画

(令和2年3月策定 期間：令和2年度～令和11年度)

前期基本計画：令和2年度～令和6年度

後期基本計画：令和7年度～令和11年度

基本的な方向：

- 自然と共に生きるまちづくり
- 健やかで心豊かな人を育むまちづくり
- 多様な産業が結びつき力強く活動するまちづくり

(2) 令和2年度普通会計当初予算

【予算規模】

34,883百万円 (増減率△3.9%)

【重点事業】

- | | |
|----------------------|--------|
| | 百万円 |
| 1 再生可能エネルギープロジェクトの推進 | (27) |
| 2 市道末広町線無電柱化 | (37) |
| 3 持続可能な公共交通の構築 | (132) |
| 4 外国クルーズ船などの誘致の受入れ | (31) |
| 5 海面養殖・陸上養殖に係る調査 | (19) |
| 6 奨学金の貸付け | (68) |
| 7 宮古市庁舎跡地の整備 | (790) |

【行政】職員

部門	H31.4.1現在	R2.4.1現在
一般行政	452人	454人
消防	0人	0人
教育	70人	68人
企業等会計	90人	85人
職員計	612人	607人

(3) ユニークな施策

【再生可能エネルギーの推進】

地域の自然資源を活用した「再生可能エネルギー」の地産地消都市を目指し、エネルギー事業で得た収益を、地域の課題解決等に活用する仕組みづくりに取り組みます。

【持続可能な公共交通】

公共交通は、地域の共有財産です。市民と連携し、宮古市地域公共交通網形成計画に基づき、施設の利用環境の改善を図り、快適で持続可能な公共交通の構築を進めます。

【姉妹都市】 青森県黒石市、沖縄県多良間村、岩手県八幡平市、秋田県大仙市、烟台市 (中国)、ラ・トリニダッド市 (フィリピン)

【友好都市】 徳島県神山町

【祭り・行事】 宮古真鱈まつり (1月)、宮古毛ガニまつり (2月)、浄土ヶ浜まつり (4、5月)、宮古夏まつり (7、8月)、閉伊川川下り大会、やまびこフェスタ、みやこ秋まつり (9月)、宮古市産業まつり (10月)、宮古サーモン・ハーフマラソン大会、鮭・あわびまつり (11月)、宮古鮭まつり (12月)

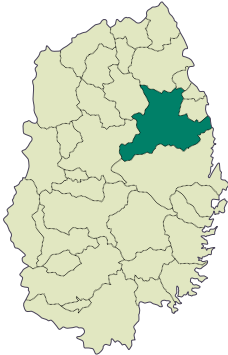
【名産・特産品】 サケ、マグロ、サンマ、ワカメなどの海産物及び加工品、乾シイタケ、原木マイタケ、キムチ、紫蘇加工品、いかせんべい、瓶ドン、宮古トラウトサーモン

【主な郷土出身者】 鳥取春陽 (作曲家、歌手)、日蔭暢年 (柔道家)、茂市久美子 (童話作家)



岩泉町

- ・所在地：下閉伊郡岩泉町岩泉字惣畑 59-5
- ・電話：0194 (22) 2111
- ・HP：https://www.town.iwazumi.lg.jp/



【沿革】

- S 31. 9 岩泉町、大川村、小本村、安家村、有芸村の1町4村が合併
- S 32. 4 小川村編入
- S 36. 5 三陸フェーン火災発生
- S 41. 1 J R岩泉線が岩泉まで開通
- S 59. 4 三陸鉄道開業
- H 16. 3 小本港一部供用開始
- H 19.10 早坂トンネル開通
- H 23. 3 東日本大震災津波襲来
- H 23. 9 岩泉町震災復興計画策定
- H 26. 4 J R岩泉線廃止
- H 28. 8 台風第10号災害

【わがまちの特色・自慢】

豊かな森から育まれる山、川、海の産物、そして酸素一番宣言の町です。日本三大鍾乳洞の一つ「龍泉洞」や安家洞、三陸海岸、早坂高原など町全体が自然豊かな観光地となっています。

【概要】

(1) 人口

区分	人口	世帯数	人口密度 (人/㎢)	高齢者比率 (65歳以上)
22年国調	10,804人	4,357	10.9	37.80%
27年国調	9,841人	4,174	9.9	40.69%
住基台帳 (R2.1.1現在)	9,158人	4,416	9.2	43.47%

(2) 地目別面積 (H31.1.1現在) 単位:m²

地目	面積	割合	地目	面積	割合
田	4,484,772	0.5%	山林原野	814,897,005	82.1%
畑	16,247,191	1.6%	その他	153,686,944	15.5%
宅地	3,044,088	0.3%	計	992,360,000	100%

【施策】

(1) 市町村勢計画概要

岩泉町未来づくりプラン

(令和2年3月策定 期間：令和2年度～令和8年度)

基本目標：

- 誰もが健康で学び幸せな生涯が咲き誇る
「生きがいの花」
- 安全安心で豊かな生活が咲き誇る「暮らしの花」
- 地域資源を活用し新しい価値が咲き誇る
「なりわいの花」

(2) 令和2年度普通会計当初予算

【予算規模】

10,137百万円 (増減率△7.3%)

【重点事業】

重点事業	百万円
1 平成28年台風第10号豪雨災害復旧・復興事業	(1,177)
2 東日本大震災復旧・復興事業	(108)
3 飲雑用水施設配水管更新補助事業	(218)
4 総合交通対策事業	(72)
5 ふるさと納税特産品振興事業	(38)
6 農作物被害防止対策事業	(6)
7 防災土養成事業	(3)

【行政】職員

部門	H31.4.1現在	R2.4.1現在
一般行政	148人	149人
消防	0人	0人
教育	17人	17人
企業等会計	28人	26人
職員計	193人	192人

(3) ユニークな施策

南部牛追唄全国大会、岩泉ヨーグルト・龍泉洞の水・龍泉洞の化粧水等の販売(三セク)、森林認証、森林セラピー、森の町内会(間伐促進)、結婚記念品支給、ブルトレイン宿泊施設、ぴーちゃんねっと(地域内双方向情報伝達)、地域づくり支援、子育て支援住宅等の整備、岩泉型インターンシップ事業、夏・冬休み応援団(児童生徒の学習支援)

【姉妹都市】 ウィスコンシン・デルズ市 (アメリカ)

【友好都市】 東京都昭島市

【祭り・行事】 龍泉洞まつり (5月4～5日)、大川七滝夏まつり (8月30日)、南部牛追唄全国大会 (9月26日～27日)、あっか感謝祭 (10月4日)、こがわ炭鉱ホルモンまつり (10月11日)、龍泉洞秋まつり (10月18日)、七頭舞の里おもと鮭まつり (10月25日)、収穫感謝まつり&健康食まつり (11月3日)

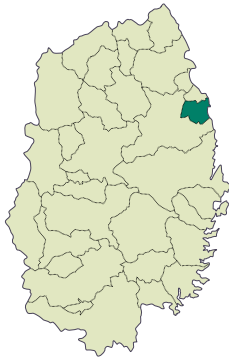
【名産・特産品】 岩泉ヨーグルトほか乳製品、龍泉洞珈琲・じっ茶ばっ茶・炭酸水などの龍泉洞の水シリーズ、深山栗しぼりほか銘菓、地酒「龍泉八重桜」、まつたけ酒、龍泉洞地ビール、山ぶどうワイン「いわいずみ」、いわいずみ短角牛、マツタケ、菌床シイタケ、原木乾燥シイタケ、畑ワサビ、海産物、木製品、リース、草木染め、山葡萄染め、龍泉洞の化粧水、いわいずみ炭鉱ホルモン鍋

【主な郷土出身者】 なし



田野畑村

・所在地：下閉伊郡田野畑村田野畑 143-1
 ・電話：0194 (34) 2111
 ・HP：https://www.vill.tanohata.iwate.jp/



【沿革】

- M 22. 4 浜岩泉村、田野畑村、沼袋村の3村が合併
- S 8. 3 三陸大津波襲来
- S 30. 5 陸中海岸国立公園指定
- S 59. 4 三陸鉄道開業、思惟大橋開通
- S 元. 4 村制施行 100 周年
- S 18. 2 思案坂大橋開通
- H 18. 3 埼玉県深谷市と友好都市締結
- H 19. 7 田野畑むらづくり基金創設
- H 23. 3 東日本大震災津波襲来
- H 23. 9 田野畑村災害復興計画
- H 27. 4 青森県藤崎町と友好都市締結

【わがまちの特色・自慢】

沿岸部は三陸復興国立公園に指定されており、我が国を代表し世界にも誇示できる観光自然資源として、国内の海岸線で唯一特A級の評価を受けた景勝地「北山崎」や「鶉の巣断崖」があります。

【概要】

(1) 人口

区分	人口	世帯数	人口密度 (人/km ²)	高齢者比率 (65歳以上)
22年国調	3,843人	1,309	24.6	33.85%
27年国調	3,466人	1,292	22.2	37.28%
住基台帳 (R2.1.1現在)	3,313人	1,414	21.2	40.11%

(2) 地目別面積 (H31.1.1現在) 単位:m²

地目	面積	割合	地目	面積	割合
田	643,861	0.4%	山林 原野	116,688,581	74.7%
畑	8,816,611	5.6%	その他	28,502,605	18.2%
宅地	1,538,342	1.0%	計	156,190,000	100%

【施策】

(1) 市町村勢計画概要

田野畑村総合計画

(平成23年策定 期間：平成23年度～令和2年度)

前期基本計画：平成23年度～平成27年度

後期基本計画：平成28年度～令和2年度

将来像：

- 1 豊かな自然と共生し暮らしに安らぎのある村
- 2 安全で生き生きとした生活が営まれ笑顔あふれる村
- 3 ふるさとに愛着を抱き人間性豊かな人材を育てる村
- 4 地域資源を活用した産業間連携が盛んで働きがいのある村
- 5 多様な交流を大切にし心ふれあう村
- 6 誰もがどこにも容易に移動でき連携が深まる村

(2) 令和2年度普通会計当初予算

【予算規模】

5,684百万円 (増減率 15.2%)

【重点事業】

	百万円
1 公共土木施設等災害復旧事業	(1,200)
2 村道改良舗装等事業	(241)
3 防災行政無線デジタル化整備事業	(213)
4 思惟エリア (道の駅たのはた) 一体整備事業	(210)
5 島越漁港地区漁業集落防災機能強化事業	(165)
6 漁港施設災害復旧事業	(110)

(3) ユニークな施策

地域協働隊職員制度 (行政職員の地域担当制)

協働による地域づくり (住民自治の推進)

体験型観光推進事業

懐かし村民募集事業 (会費：1.5、3、5万円)

田野畑むらづくり基金 (寄付金制度)

【行政】職員

部門	H31.4.1現在	R2.4.1現在
一般行政	44人	49人
消防	0人	0人
教育	6人	6人
企業等会計	12人	12人
職員計	62人	67人

【姉妹都市】 埼玉県深谷市、青森県藤崎町

【祭り・行事】 たのはた村産業まつり (10月上旬の日曜日)

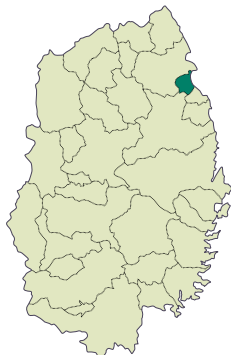
【名産・特産品】 乳製品 (たのはた牛乳・アイスクリーム・飲むヨーグルト)、マツタケ、アワビ、ウニ、ワカメ、サケ、岩手ガモ (合鴨)

【主な郷土出身者】 なし



野田村

・所在地：九戸郡野田村大字野田 20-14
 ・電話：0194 (78) 2111
 ・HP：http://www.vill.noda.iwate.jp/



【沿革】

- M 22. 4 野田村と玉川村が合併
- S 48. 7 国民宿舎えぼし荘開業
- S 60. 7 第1回のだ砂祭り開催
- S 60. 9 新庁舎落成
- H 元. 4 村制施行 100 周年
- H 23. 3 東日本大震災津波襲来
- H 23.11 野田村東日本大震災津波復興計画策定
- H 27. 1 村内全ての高台団地造成工事完了
- H 28. 3 村内全ての災害公営住宅整備完了
- H 29. 3 東日本大震災津波で被災した保健センターが防災拠点機能を兼ねて完成
- H 29. 7 都市公園事業完了
- H 29. 9 土地区画整理事業完了

【わがまちの特色・自慢】

昔ながらの直煮製塩による自然塩が特産。
 南部曲り家を保存し、観光施設として利用。
 主要海産物である荒海ホタテのブランド化（国の地理的表示保護制度（GI）に登録）、漁師等による荒海団の結成。
 第三セクターによるワイナリー運営、地元産山ぶどうによるワインの製造。

【概要】

(1) 人口

区分	人口	世帯数	人口密度 (人/km ²)	高齢者比率 (65歳以上)
22年国調	4,632人	1,578	57.3	30.07%
27年国調	4,149人	1,516	51.3	35.01%
住基台帳 (R2.1.1 現在)	4,220人	1,660	52.2	36.99%

(2) 地目別面積 (H31.1.1 現在) 単位:m²

地目	面積	割合	地目	面積	割合
田	1,374,513	1.7%	山林原野	39,766,449	49.2%
畑	3,020,129	3.7%	その他	35,135,735	43.5%
宅地	1,503,174	1.9%	計	80,800,000	100%

【施策】

(1) 市町村勢計画概要

- 野田村総合計画
 (平成 28 年 6 月策定 期間：平成 28 年度～令和 7 年度)
 前期基本計画：平成 28 年度～令和 2 年度
 後期基本計画：令和 3 年度～令和 7 年度
- 1 健康で生きがいをもって暮らせる福祉社会
 - 2 魅力ある生活基盤の創造
 - 3 快適な環境と安全で住みよいむら
 - 4 豊かな心と文化を育む生涯学習の推進
 - 5 地域活力を創造する産業の展開
 - 6 住民と行政の連携による計画の推進

(2) 令和 2 年度普通会計当初予算

【予算規模】
 3,953 百万円 (増減率△ 1.9%)

【重点事業】	百万円
1 復興道路事業	(134)
2 公営住宅整備事業	(108)
3 野田村体育館屋根修繕事業	(91)
4 生活再建住宅支援事業	(83)
5 村道舗装補修事業	(60)
6 村道大葛日形井線現道拡幅事業	(50)

【行政】職員

部門	H31.4.1 現在	R2.4.1 現在
一般行政	51人	51人
消防	0人	0人
教育	9人	9人
企業等会計	5人	6人
職員計	65人	66人

(3) ユニークな施策

- 1 村営バスの無料運行
- 2 むらづくり (はまなす) 運動
- 3 地域情報化事業 (のんちゃんネット事業) の運用
- 4 保育料の完全無料化
- 5 観光大使の設置
- 6 「心はいつものだ村民」(準村民) 登録制度

【友好都市】北海道様似町

【祭り・行事】野田まつり (8 月)、塩の道を歩こう会 (5・9 月)、NODA まんぶくマルシェ (11 月)、野田ホタテまつり (12 月)、
 プチよ市 (冬期間を除く毎月最終土曜日)、LIGHT UP NIPPON (8 月)

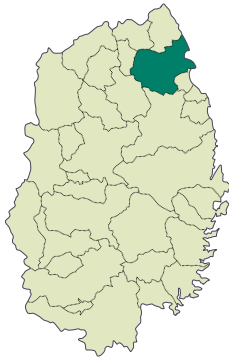
【名産・特産品】荒海ホタテ、野田塩、山ぶどうワイン「紫雫」、のだ焼き、マリンローズ

【主な郷土出身者】佐藤國夫 (画家)



久慈市

・所在地：久慈市川崎町1番1号
 ・電話：0194(52)2111
 ・HP：http://www.city.kuji.iwate.jp/



【沿革】

- S 29.11 2町5村の合併により市制施行
- H 5.12 八戸久慈自動車道久慈道路供用開始
- H 6.5 久慈国家石油地下備蓄基地完成
- H 10.3 久慈港湾口防波堤第1号ケーソン着座
- H 11.9 久慈市文化会館（アンバーホール）開館
- H 12.10 保健福祉トライアングルゾーン完成
- H 16.8 久慈市民体育館完成
- H 18.3 山形村と合併
- H 20.4 やませ土風館、道の駅久慈開館
- H 23.3 東日本大震災津波襲来
- H 23.7 久慈市復興計画策定

【わがまちの特色・自慢】

岩手県北東部の沿岸に位置し、東側は太平洋に面した海岸段丘が連なり、西側は、日本一を誇る美しい白樺林と久慈渓流が四季を通じて色とりどりの姿を織り成す、久慈平庭県立自然公園を有しています。海洋をいかした産業都市として港湾の整備、企業誘致及び環境施策の充実に取り組んでおり、観光面では国内有数の琥珀の産地として、また、「あまちゃん」の舞台となった小袖海岸から北限の海女が活躍する地として、全国に強く情報発信しています。近年は琥珀を産出する地層から恐竜などの脊椎動物化石が発見され、新たな地域資源としてまちづくりを進めています。

【概要】

(1) 人口

区分	人口	世帯数	人口密度 (人/km ²)	高齢者比率 (65歳以上)
22年国調	36,872人	14,012	59.2	26.36%
27年国調	35,642人	14,256	57.2	29.59%
住基台帳 (R2.1.1現在)	34,696人	15,723	55.6	32.51%

(2) 地目別面積 (H31.1.1現在) 単位:m²

地目	面積	割合	地目	面積	割合
田	9,597,897	1.5%	山林 原野	421,119,274	67.5%
畑	23,417,096	3.8%	その他	158,874,696	25.5%
宅地	10,491,037	1.7%	計	623,500,000	100%

【施策】

(1) 市町村勢計画概要

久慈市総合計画
 (平成28年3月策定 期間：平成28年度～令和7年度)
 前期基本計画：平成28年度～令和2年度
 後期基本計画：令和3年度～令和7年度
 基本理念：子どもたちに誇れる 笑顔日本一のまち 久慈
 基本方針：
 重点戦略 いつまでも住み続けたいと思うまちづくり
 基礎戦略 1 共に支え、
 元気と安らぎあふれるまちづくり
 基礎戦略 2 総合力豊かな人材を育てるまちづくり
 基礎戦略 3 資源を生かす魅力と
 やりがいのある産業のまちづくり

(2) 令和2年度普通会計当初予算

【予算規模】
 21,163百万円 (増減率5.1%)

【重点事業】	百万円
1 子どものための教育・保育給付事業	(1,380)
2 公共施設再生可能エネルギー等導入事業	(59)
3 広域道の駅整備事業	(45)
4 若者の雇用定着推進事業	(5)
5 お産育児支援事業	(3)
6 恐竜によるまちづくり推進事業	(2)

(3) ユニークな施策

- ・故三船久蔵十段を顕彰した柔道のまちづくりの推進
- ・農林漁家民泊等を取り入れた教育旅行等の受入れ
- ・NHK連続テレビ小説「あまちゃん」を活用した観光振興
- ・夏場の冷涼な気候「やませ」を利用した雨よけほうれんそうや冬場の温暖な気候を利用した寒締めほうれんそうの栽培推奨
- ・特色ある地質、恐竜化石をいかしたまちづくりの推進

【行政】職員

部門	H31.4.1現在	R2.4.1現在
一般行政	268人	270人
消防	0人	0人
教育	46人	42人
企業等会計	41人	42人
職員計	355人	354人

【姉妹都市】 フランクリン市 (アメリカ)、クライペダ市 (リトアニア)

【祭り・行事】 車市 (4～12月の毎月第1日曜日)、平庭高原つつじまつり (6月上旬)、久慈みなと夏まつり (7月下旬)、北限の海女フェスティバル (8月上旬)、久慈秋まつり (9月第3金・土・日曜日)、平庭高原スキー場まつり (2月上旬)、平庭闘牛大会 (6月・8月・10月 (各月の月上旬～中旬))、市日 (六斎市：3と8のつく日)

【名産・特産品】 琥珀・恐竜化石、小久慈焼、木炭、短角牛、ほうれんそう、まめぶ汁、南部せんべい、山のきぶどう、海女の磯汁、ぶすのこぶ、黒豆ゼリー、白樺樹液

【主な郷土出身者】 三船久蔵 (柔道家)、タマシシ・アレン (教育者)、小田為綱 (思想家)、二十山親方 (元小結「柝の花」)



普代村

- ・所在地：下閉伊郡普代村第9地割字銅屋13-2
- ・電話：0194(35)2111
- ・HP：<https://www.vill.fudai.iwate.jp/>



【沿革】

- M 9.5 堀内村、普代村、黒崎村の3村が合併
- M 29.6 三陸大津波が襲来
- S 8.3 三陸大津波が襲来
- S 30.5 陸中海岸国立公園に指定
- S 47.10 国道45号が開通
- S 59.4 三陸鉄道が開業
- H 2.4 村制施行100周年
- H 4.3 総合運動公園が完成
- H 7.3 JRバスが廃止、村営バスが運行開始
- H 10.10 役場新庁舎が完成
- H 11.4 保健センターが完成
- H 23.3 東日本大震災津波襲来
- H 23.9 普代村災害復興計画策定
- H 28.6 給食センターが完成

【わがまちの特色・自慢】

岩手県沿岸北部に位置し、北緯40度線上東端の村です。太平洋を望む沿岸地区は、陸中海岸国立公園に指定され、黒崎展望台からの眺めは我が国を代表する景観を有しています。また、資源豊富な漁場としても知られています。

【概要】

(1) 人口

区分	人口	世帯数	人口密度 (人/km ²)	高齢者比率 (65歳以上)
22年国調	3,088人	1,042	44.3	31.51%
27年国調	2,795人	1,103	40.1	37.28%
住基台帳 (R2.1.1現在)	2,628人	1,130	37.7	41.36%

(2) 地目別面積 (H31.1.1現在) 単位:m²

地目	面積	割合	地目	面積	割合
田	194,472	0.3%	山林原野	58,329,830	83.7%
畑	3,770,354	5.4%	その他	6,445,764	9.3%
宅地	919,580	1.3%	計	69,660,000	100%

【施策】

(1) 市町村勢計画概要

- 第4次普代村総合発展計画
(平成23年3月策定 期間：平成23年度～令和2年度)
前期基本計画：平成23年度～平成27年度
後期基本計画：平成28年度～令和2年度
- 基本理念：
1 村民の個性や能力を伸ばす村づくり
2 みんなの心と力を合わせた協働の村づくり
3 普代村の魅力、個性を生かす村づくり
- 基本目標：
1 学ぶ喜びを村づくりにつなげよう
(教育、スポーツ、文化、交流活動)
2 未来を拓く活力ある産業を育てよう (産業)
3 健やかに、そして安心して暮らせる環境をつくろう
(保健、医療、福祉)
4 自然と共生する安全で快適な環境をつくろう
(環境保全、生活環境)
5 明日を拓く仕組みをみんなで作ろう (行財政)

(2) 令和2年度普通会計当初予算

【予算規模】	
2,981百万円 (増減率0.4%)	
【重点事業】	
1 地方公共団体カーボン・マネジメント強化事業	百万円 (100)
2 橋梁補修・強化事業	(100)
3 地域活動拠点集会所整備事業	(51)
4 定住住宅建設事業	(16)
5 行政情報配信システム事業	(11)

(3) ユニークな施策

- ・松の内成人式
- ・ふるさと元気！応援事業
- ・ふるさと定住促進事業
- ・「青の国ふだい」ファン会員登録制度事業
- ・学官連携で推進する「おためしU愛」ターン」支援事業
- ・ふだいFAN管理運営委託事業
- ・ふるさと納税を活用した地域産業促進事業
- ・医療費助成 (高校生まで所得制限なしで無料化)

【行政】職員

部門	H31.4.1現在	R2.4.1現在
一般行政	43人	51人
消防	0人	0人
教育	5人	5人
企業等会計	8人	6人
職員計	56人	62人

【友好都市】岩手県矢巾町

【祭り・行事】キラウミこどもまつり (7月)、ふだいまつり (9月)、海フェスタ in ふだい (10月)

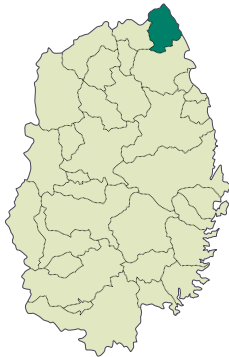
【名産・特産品】サケ、いくら、ウニ、アワビ、ワカメ、昆布、すき昆布、こんぶかりんとう、こんぶ鯉鈍 (うどん)、ほうれんそう、シイタケ、鉄山染

【主な郷土出身者】東北楽天ゴールデンイーグルス 銀次選手 (プロ野球選手)



洋野町

・所在地：九戸郡洋野町種市 23-27
 ・電話：0194 (65) 2111
 ・HP：http://www.town.hirono.iwate.jp/



【沿革】

- H 18. 1 種市町、大野村の1町1村が合併
- H 22. 2 洋野町シンボルキャラクター「マキちゃん&ダイちゃん」制定
- H 23. 2 町村合併5周年記念行事
- H 23. 3 東日本大震災津波襲来
- H 23. 7 洋野町震災復興計画策定
- H 28. 1 洋野町誕生10周年記念行事

【わがまちの特色・自慢】

岩手県の北東部に位置し、「南部もぐりとウニの里」、「一人一芸の里」として幅広い産業の振興に努め、特にも「たねいちウニ」、「大野木工」は町を代表する特産品です。

【概要】

(1) 人口

区分	人口	世帯数	人口密度 (人/km ²)	高齢者比率 (65歳以上)
22年国調	17,913人	6,120	59.1	30.52%
27年国調	16,693人	5,959	55.1	35.70%
住基台帳 (R2.1.1現在)	16,436人	6,843	54.3	39.04%

(2) 地目別面積 (H31.1.1現在) 単位:m²

地目	面積	割合	地目	面積	割合
田	11,027,203	3.6%	山林原野	233,787,683	77.2%
畑	22,772,133	7.5%	その他	28,712,146	9.5%
宅地	6,620,835	2.2%	計	302,920,000	100%

【施策】

(1) 市町村勢計画概要

洋野町総合計画

(平成29年3月策定 期間：平成29年度～令和8年度)

前期基本計画：平成29年度～令和3年度

後期基本計画：令和4年度～令和8年度

将来像：

「海と高原の牧場 絆をつなぎ 輝く未来を拓くまち」

基本目標：

- 1 人とモノがつながる産業のまちづくり
- 2 住み慣れた地域で安心して暮らせるまちづくり
- 3 豊かな心と体を育む生涯学習のまちづくり
- 4 恵まれた自然を活かし守るまちづくり
- 5 安全でだれもが快適に暮らすまちづくり
- 6 人と人との“絆”を紡ぐまちづくり
- 7 次世代へつなぐ自立したまちづくり

(2) 令和2年度普通会計当初予算

【予算規模】

11,143百万円 (増減率4.1%)

【重点事業】

百万円

- 1 大野保育所整備事業 (298)
- 2 中野中学校屋内運動場改修事業 (77)
- 3 大野小学校トイレ改修事業 (61)
- 4 草地畜産基盤整備事業 (32)
- 5 地方創生事業 (畜養ウニ・ローカルブランディング事業) (18)
- 6 定住促進団地整備事業 (14)

(3) ユニークな施策

- ・やませによる夏季冷涼な気候を活用した雨よけほうれんそうの栽培
- ・遠浅岩盤に増殖溝を掘削したウニ、アワビの栽培漁業の推進
- ・家畜排泄物を完熟堆肥化し、ユーキ(有機・勇氣)の里づくりを展開

【行政】職員

部門	H31.4.1現在	R2.4.1現在
一般行政	168人	172人
消防	0人	0人
教育	31人	30人
企業等会計	84人	85人
職員計	283人	287人

【姉妹都市】なし

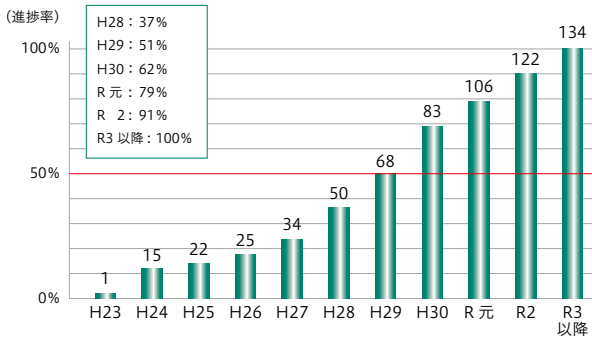
【祭り・行事】 おおのキャンパス一人一芸交流祭(5月上旬)、たねいちウニまつり(7月中旬)、シーサイド花火大会(8月上旬)、種市夏まつり(8月上旬)、北奥羽ナニヤドヤラ大会(8月中旬)、久慈平岳秋まつり(9月中旬)、洋野町農業祭(10月中旬)、洋野町文化祭(11月上旬)

【名産・特産品】 ウニ、アワビ、ワカメ等海産物、シイタケ、雨よけほうれんそう等農作物、ゆめ牛乳、ヨーグルト等乳製品

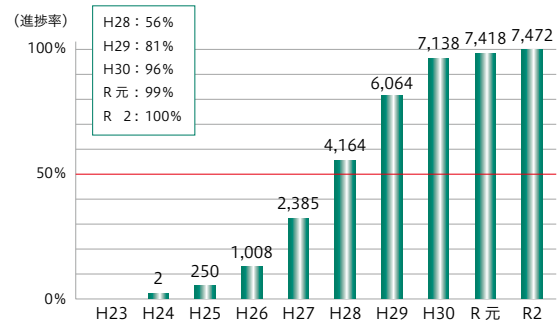
【主な郷土出身者】 伊勢ノ海裕丈(大相撲)、長内清一(レスリング)、大井利江(パラリンピック男子陸上円盤投げ)

【社会資本主要8分野】これまでの実績と今後の見通し

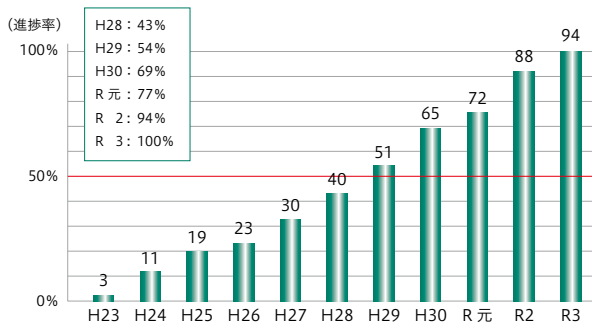
①海岸保全施設（箇所数）



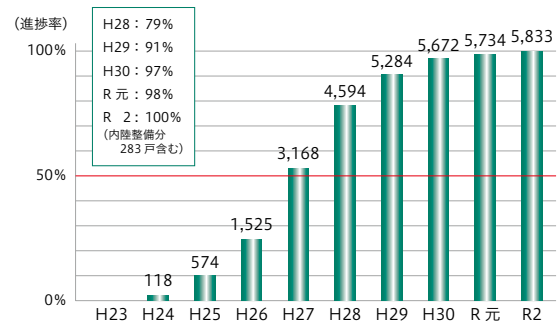
②復興まちづくり（区画数）



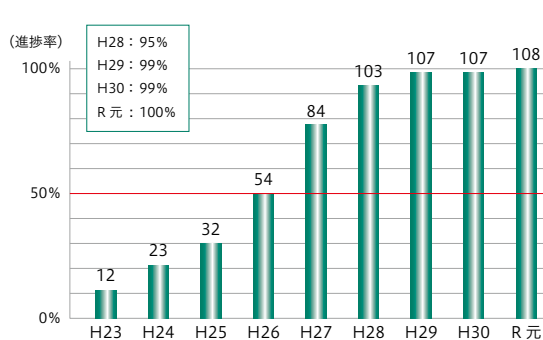
③復興道路等（区間数）



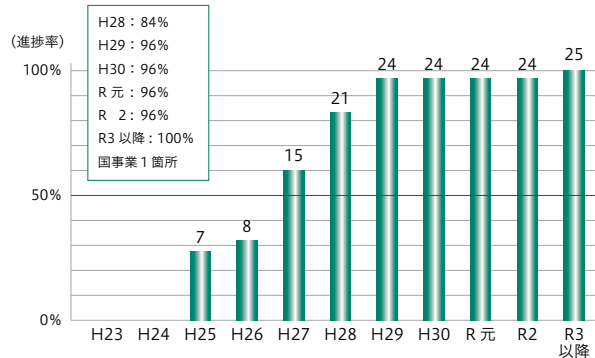
④災害公営住宅（戸数）



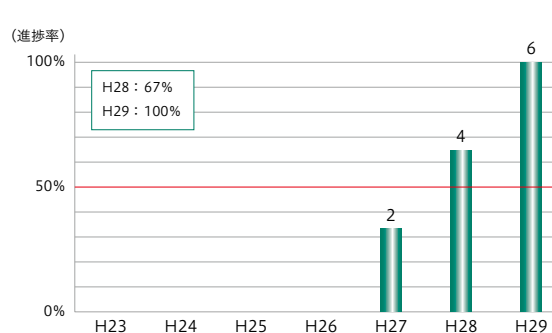
⑤漁港施設（漁港数）



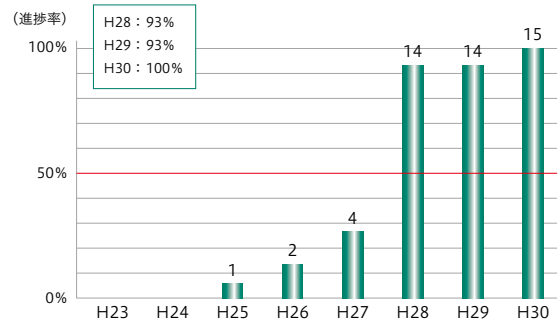
⑥港湾施設（地区数）



⑦医療施設（施設数）



⑧教育施設（学校数）



※令和元年度までは実績値を、それ以降は計画値を計上している。
なお、進捗率は通期における計画値に対する割合を表す。

【分野別】 整備スケジュール (全 775 箇所)

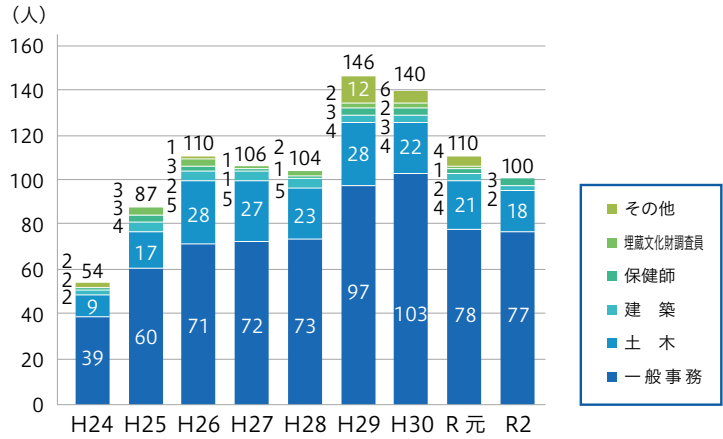
分野	概要	年度別整備スケジュール									
		第1期 (基盤復興期間)			第2期 (本格復興期間)			第3期 (更なる展開への連結期間)		国復興期間	
		H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元	R2
港湾 一般海岸・ 農地海岸・ 林野海岸	○ 45 海岸で堤防・水門等の復旧・整備を実施 ○ 20 河川で堤防・水門等の復旧・整備を実施	応急対策、施工準備(堤防設計等)			防潮堤、水門等の復旧・整備工事						
		応急対策、施工準備(堤防設計等)			防潮堤・防災林等の復旧・整備工事						
漁港 海岸	○ 53 海岸 (県 24 海岸、市町村 29 海岸) で防潮堤等の復旧・整備を実施	応急対策、施工準備(堤防設計等)			防潮堤等の復旧・整備工事						
		事業準備・住民合意(復興計画策定等)、事業計画手続き(都市計画決定等)、調査、設計等			工事						
復興 まちづくり	○ 19 地区で土地区画整理事業を実施 ○ 88 団地で防災集団移転事業を実施 ○ 41 地区で漁業集落防災機能強化事業を実施 ○ 10 地区で津波復興拠点整備事業を実施	測量、設計、用地買収等を行い、順次工事に着手 (逐次供用開始)									
		(発災後新規) 測量、設計、用地買収等を行い、順次工事に着手 (逐次供用開始)			(継続事業) 用地・工事の推進 (逐次供用開始)						
復興 道路	○ 3 路線の 35 区間 (箇所) で復興道路を整備	(発災後新規) 測量、設計、用地買収等を行い、順次工事に着手 (逐次供用開始)			(継続事業) 用地・工事の推進 (逐次供用開始)						
		(発災後新規) 測量、設計、用地買収等を行い、順次工事に着手 (逐次供用開始)			(継続事業) 用地・工事の推進 (逐次供用開始)						
支援 復興 道路	○ 17 路線の 38 区間 (箇所) で復興支援道路を整備	(発災後新規) 測量、設計、用地買収等を行い、順次工事に着手 (逐次供用開始)			(継続事業) 用地・工事の推進 (逐次供用開始)						
		(発災後新規) 測量、設計、用地買収等を行い、順次工事に着手 (逐次供用開始)			(継続事業) 用地・工事の推進 (逐次供用開始)						
復興 道路	○ 18 路線の 21 区間 (箇所) で復興関連道路を整備	(発災後新規) 測量、設計、用地買収等を行い、順次工事に着手 (逐次供用開始)			(継続事業) 用地・工事の推進 (逐次供用開始)						
		(発災後新規) 測量、設計、用地買収等を行い、順次工事に着手 (逐次供用開始)			(継続事業) 用地・工事の推進 (逐次供用開始)						
災害 公営住宅	○ 県及び市町村の全体で 5,833 戸の災害公営住宅を整備	用地、設計等			工事(2,827戸の整備を予定)						
		用地、設計等			工事(3,006戸の整備を予定)						
漁 港	○ 108 漁港 (県 31 漁港、市町村 77 漁港) で防波堤、岸壁の復旧・整備を実施	応急対策、施工準備(防波堤設計等)			防波堤、岸壁等の復旧・整備工事						
		施工準備			湾口防波堤の復旧・整備工事(大船渡港) (宮古・釜石) (久慈港) R10完成目標						
港 湾	○ 6 港湾 (重要港湾 4 港湾、地方港湾 2 港湾) で湾口防波堤、岸壁、物揚場などの復旧・整備を実施	暫定供用			防波堤、岸壁等の復旧・整備工事 一部の物揚場等						
		建設場所選定、用地、設計等			工事						
医 療	○ 県立病院 3 箇所、市町村立医科診療所 3 箇所の整備を実施	用地、設計等			工事						
		用地、設計等			工事						
教 育	○ 県立高等学校 1 箇所、市町村立小中学校 14 箇所の整備を実施 (協議、調整中のものを含む)	事業準備、住民合意、用地、設計等・工事									

【市町村別】職種別応援職員

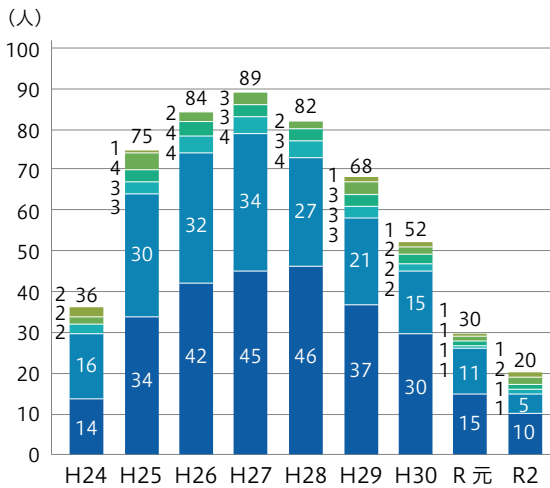
応援職員を市町村毎に職種別で表わしています。

被災状況や復旧・復興の進捗は各市町村で異なるため応援職員数の推移も異なります。

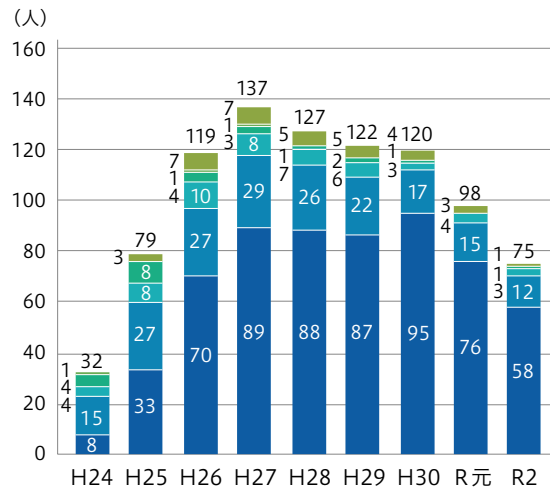
<陸前高田市>



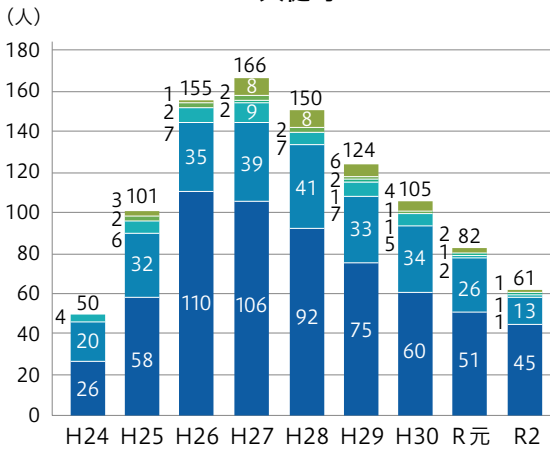
<大船渡市>



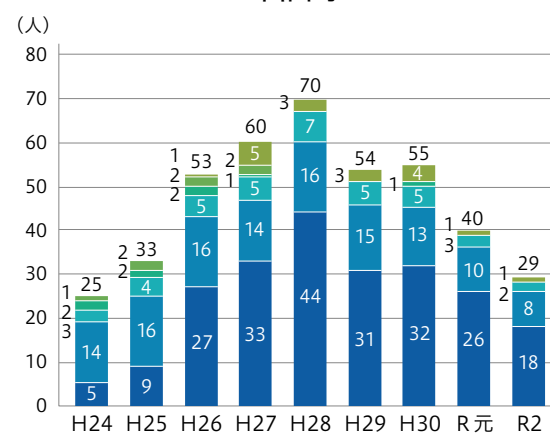
<釜石市>



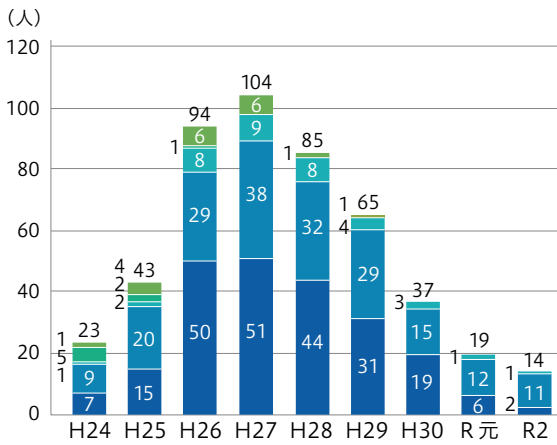
<大槌町>



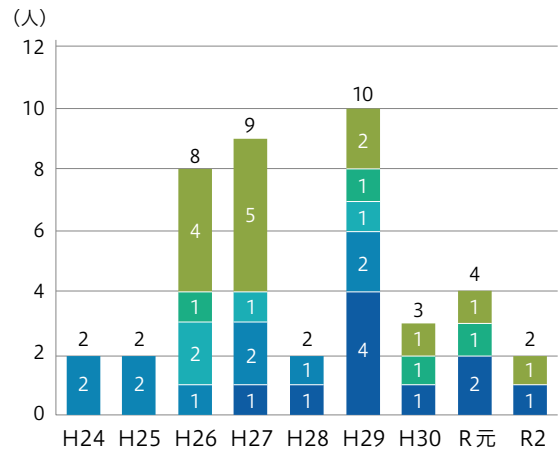
<山田町>



<宮古市>

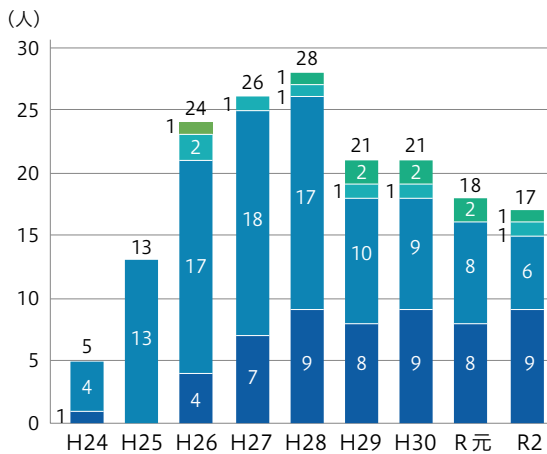


<岩泉町>

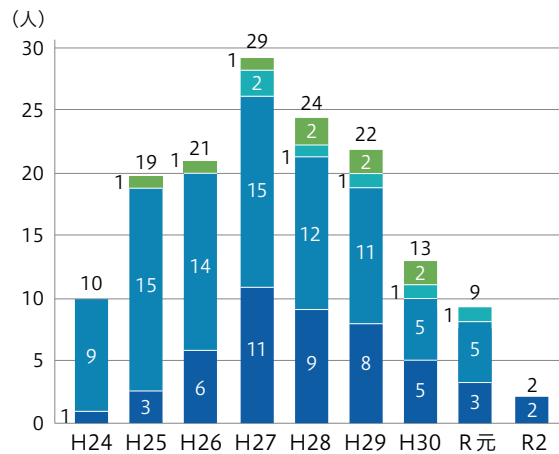


※岩泉町は平成 28 年台風 10 号により大きな被害を受けています。

<田野畑村>



<野田村>



<久慈市>

建築技術職 1 名の応援職員を平成 24～26 年の 3 年間にわたり派遣いただきました。

<一関市>

土木技術職 2 名の応援職員を平成 24 年度に派遣いただきました。

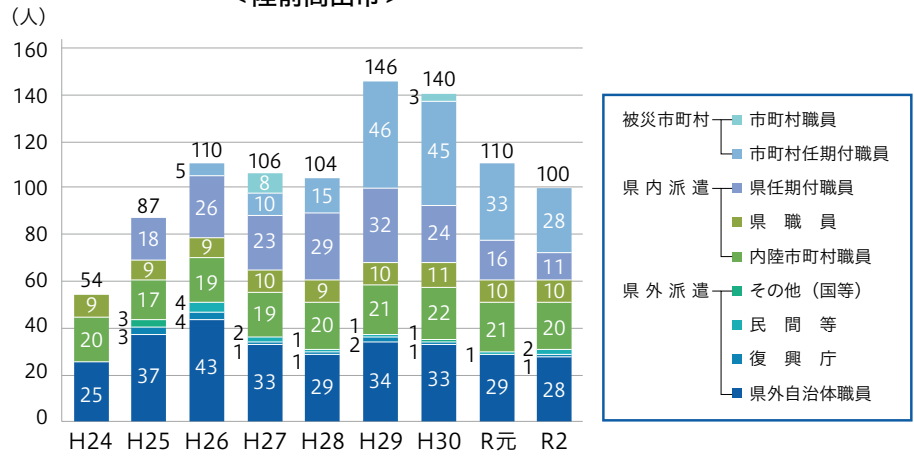
<普代村・洋野町>

応援職員の派遣要請は行いませんでした。

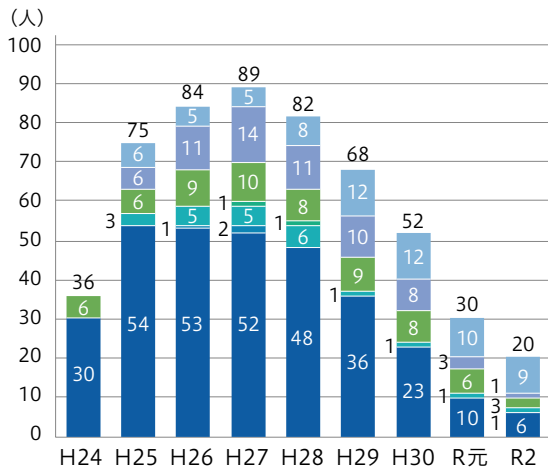
【市町村別】派遣元別応援職員

応援職員を市町村毎に派遣元別で表わしています。

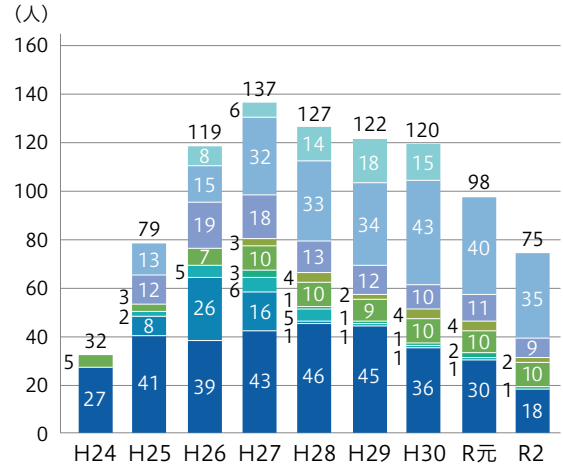
<陸前高田市>



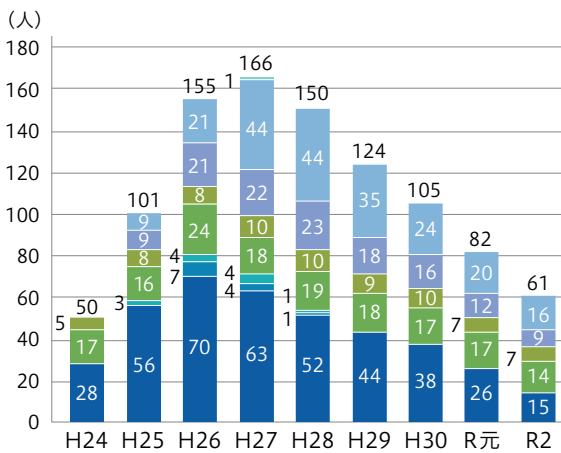
<大船渡市>



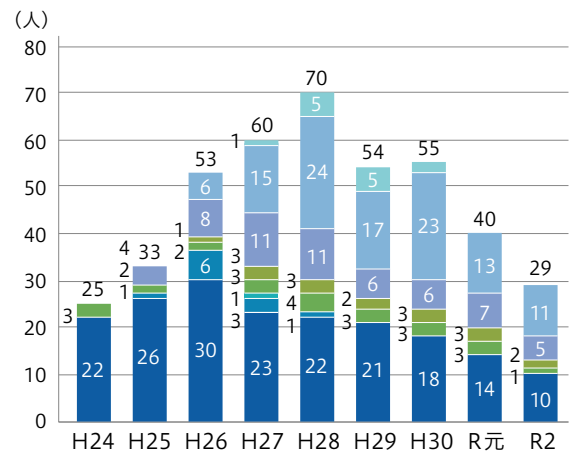
<釜石市>



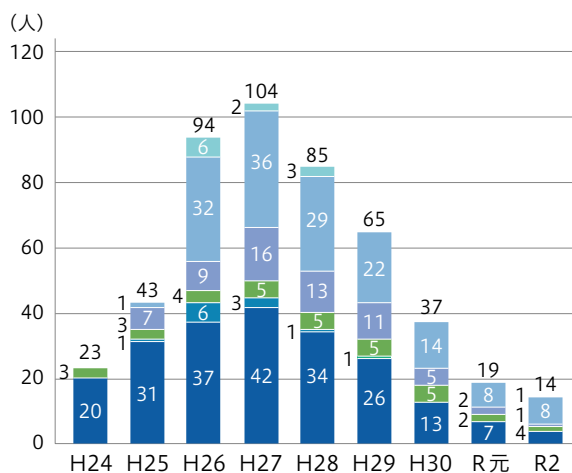
<大槌町>



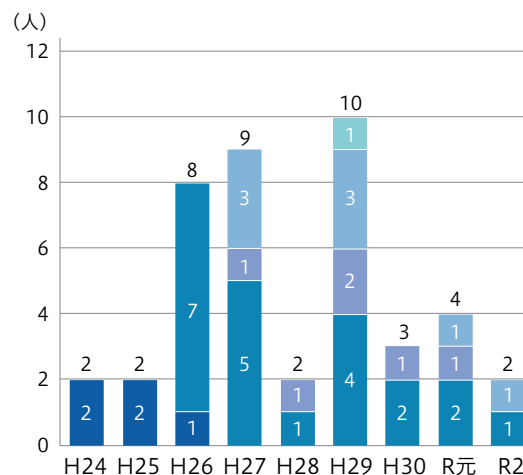
<山田町>



<宮古市>

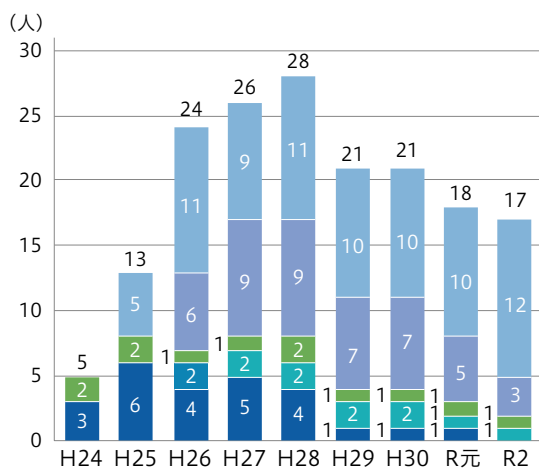


<岩泉町>

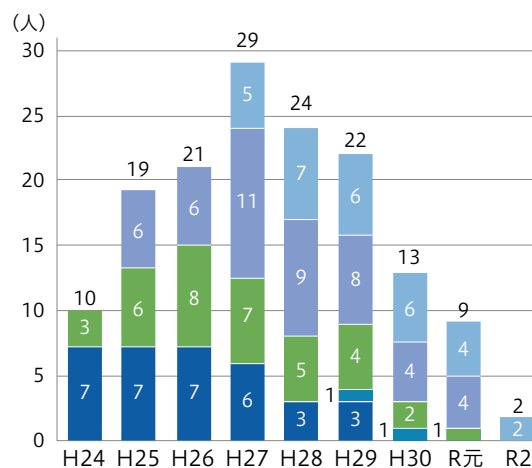


※岩泉町は平成 28 年台風 10 号により大きな被害を受けています。

<田野畑村>



<野田村>



<久慈市>

県外自治体から、1名の応援職員を平成 24～26 年の 3 年間にわたり派遣いただきました。

<一関市>

県外自治体から、2名の応援職員を平成 24 年度に派遣いただきました。

<普代村・洋野町>

応援職員の派遣要請は行いませんでした。

【派遣自治体別】応援職員

※派遣状況のうち H24～H25 は 3/1 現在、H26～R 元は年度途中の派遣者及び帰任者を含む累計数、R2 は 4/1 現在。

◆岩手県内の自治体からの派遣状況

派遣先 派遣元	陸前高田市	大船渡市	釜石市	大槌町	山田町	宮古市	岩泉町	田野畑村	野田村	久慈市	計	年度別派遣状況								
												H24 (2012)	H25 (2013)	H26 (2014)	H27 (2015)	H28 (2016)	H29 (2017)	H30 (2018)	R元 (2019)	R2 (2020)
盛岡市	27	16	22	37	9	23		13	6		153	21	16	20	18	18	18	17	15	10
花巻市	4		17	36							57	6	5	8	6	6	7	7	6	6
北上市		18	13	16							47	3	3	6	6	6	6	6	6	5
遠野市			11	18							29	4	3	3	4	3	3	3	3	3
一関市	91										91	12	11	11	11	10	10	10	8	8
二戸市	2		4	4	3	5		1	7		26	6	4	3	3	3	2	2	2	1
八幡平市	10			9							19	3	2	2	2	2	2	2	2	2
奥州市	22	24	4	4							54	2	2	5	7	8	9	8	6	7
滝沢市	2		1	1	2	2			3		11	1	1	1	2	2		1	2	1
雫石町				8							8	1	1			2	1	1	1	1
葛巻町									12		12	2	2	2	2	1	1	1	1	
岩手町				3	3						6			1	2	2	1			
紫波町				9		4					13	1	1	1	1	1	2	2	2	2
矢巾町			1	10							11	1	1	2	2	1	1	1	1	1
西和賀町			4	3							7	1		1	1	1	1	1	1	
金ケ崎町		8									8	1	1	1	1	1	1	1	1	
平泉町	7										7			1	1	1	1	1	1	1
住田町	14										14	2	2	2	2	2	1	1	1	1
軽米町					10				3		13			2	2	2	1	3	3	
九戸村									5		5			1	1	1	1	1		
洋野町									1		1			1						
一戸町				9	1						10	2	1	1	1	1	1	1	1	1
計	179	66	77	167	28	34	0	14	37	0	602	69	56	75	75	74	70	70	63	50

※上記の他、一関市から宮城県気仙沼市へ職員を平成 24～令和 2 年度に述べ 28 名派遣しています。



派遣元	派遣先	隣 高田市	大船 渡市	釜石 市	大槌 町	山田 町	宮古 市	岩泉 町	田野 畑村	野田 村	久慈 市	一関 市	計	年度別派遣状況								
														H24 (2012)	H25 (2013)	H26 (2014)	H27 (2015)	H28 (2016)	H29 (2017)	H30 (2018)	R元 (2019)	R2 (2020)
東京都	千代田区				19								19	2	2	2	2	2	2	3	2	
	文京区			8									8	1	1	1	1	1	1	1		
	台東区	2		2									4	1	1	1	1					
	墨田区						6						6	1	1	1	1	1				
	江東区				16								16	1	1	2	2	2	2	2	2	
	品川区			1			38						39	7	7	7	7	5	3	2	1	
	北区			18									18	2	2	2	2	2	2	2	2	
	荒川区			18									18	3	2	2	2	2	2	2	1	
	板橋区		32										32	4	4	4	4	4	4	4	2	2
	足立区										1		1	1								
	西東京市				7								7			1	1	1	1	1	1	1
	立川市				16								16	1	1	2	2	2	2	2	2	2
	武蔵野市	9			16								25	3	3	3	3	3	4	3	2	1
	昭島市							1					1	1								
	町田市				3		1						4	1	1	2						
	日野市						1						1	1								
	国立市			8									8	1	1	1	1	1	1	1	1	1
東久留米市				8								8	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
狛江市			1									1		1								
計		11	40	48	85		47			1		232	32	29	32	30	27	26	23	20	13	
神奈川県	横浜市				11								11		1	2	2	2	1	1	1	1
	川崎市					20							20	3	3	3	3	3	3	2		
	相模原市		43										43	6	6	6	6	6	5	4	2	2
	横須賀市		1										1	1								
	大和市	16											16		2	2	2	2	2	2	2	2
	茅ヶ崎市	15											15			2	2	2	2	3	2	2
	小田原市						3						3		1	1	1					
	鎌倉市		1										1		1							
	海老名市				3								3			1	1	1				
藤沢市		10	6									16	3	3	2	2	2	2	1	1		
計		31	55	6	14	20	3					129	13	17	19	19	18	15	13	8	7	
富山県	富山市				1								1		1							
	南砺市				1								1					1				
	立山町	2								1			3	1		1	1					
	朝日町			3									3	1	1		1					
計	2		3		2					1		8	2	2	1	1	1	1				
石川県	輪島市				8								8		3	3	2					
	能登町			2									2		1	1						
計			2		8							10		4	4	2						
福井県	福井市			6									6		1	1	1	1	1	1		
	小浜市			9									9	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	勝山市	4											4		1		1	1		1		
	鯖江市	3											3	1	1	1						
計	7		15									22	2	4	3	3	3	2	3	1	1	
山梨県	甲斐市	4										4		1	1	1	1					
計	4											4		1	1	1	1					
長野県	長野市			1									1		1							
	飯田市					1							1		1							
	佐久市		16										16	2	2	2	2	2	2	2	2	
	千曲市					6							6	1	1	2	1	1				
	軽井沢町		1		12								13	1		2	2	2	2	2	1	1
	川上村					1							1		1							
計		17	1	12	8							38	4	5	7	5	5	4	4	3	1	
岐阜県	市長会			10									10	5	5							
	関市			8									8		1	1	1	1	1	1	1	1
	岐阜市			9									9			2	2	1	1	1	1	1
	羽島市			5									5			1	1	1	1		1	
	可児市			4									4			1	1	1		1		
	海津市			3									3					1	1	1		
	瑞浪市			2									2			1	1					
	土岐市			1									1				1					
	中津川市			2									2						1		1	
	美濃市			2									2						1		1	
	多治見市			5									5			2		1	1	1		
	飛騨市			1									1						1			
	大垣市			4									4			1	1	1	1		1	
	各務原市			6									6			1	1	1	1	1	1	1

派遣元	派遣先	陸前高田市	大船渡市	釜石市	大槌町	山田町	宮古市	岩泉町	田野畑村	野田村	久慈市	一関市	計	年度別派遣状況								
														H24 (2012)	H25 (2013)	H26 (2014)	H27 (2015)	H28 (2016)	H29 (2017)	H30 (2018)	R元 (2019)	R2 (2020)
	高山市			4					2				6	1	1	1		1	1			
	美濃加茂市			2									2					1			1	
	本巢市			2									2								1	
	恵那市			5									5		1	1				1	1	
	郡上市			3									3			1				1		
	山県市			2									2			1						
	下呂市			2									2			1				1		
	瑞穂市			1									1						1			
	揖斐川町					6							6	2	2	1	1					
計				83	6				2			91	8	9	15	9	14	14	9	10	3	
静岡県	静岡市					26							26	4	4	4	3	3	3	3	2	
	浜松市		47										47	7	8	8	8	7	6	3		
	沼津市					5							5	1				1	1	1	1	
	熱海市		1										1		1							
	三島市					5							5	1	1	1	1					
	御殿場市		5										5		1	1	1	1				
	磐田市				3	1							4		1	1	2					
	藤枝市					7							7	1	1	1	1	1	1	1		
	伊東市		4										4		1	1	1	1				
	島田市					1							1		1							
	富士宮市				5	5							10		2	2	2	2	2			
	伊豆市					1							1	1								
	伊豆の国市		1										1		1							
	下田市					2							2			1	1					
森町				1								1		1								
計			58		9	53						120	15	23	20	20	17	14	8	3		
愛知県	名古屋市	102					4						106	13	14	11	9	12	13	12	12	10
	西尾市			5							1		6	1	1	1	1	1	1			
	犬山市		6										6	1	1	1	1	1	1			
	東海市			23									23	2	5	3	3	2	2	2	2	2
	長久手市		5										5		1	1	1	1	1			
	知立市		2										2	2								
	小牧市		3										3			1	1	1				
	みよし市			1									1				1					
	東浦町		4										4		1	1	1	1				
計	107	15	29			4					1	156	19	23	19	17	20	18	14	14	12	
三重県	松阪市	8											8		1	1	1	1	1	1	1	1
計	8											8		1	1	1	1	1	1	1	1	
滋賀県	湖南地域4市				1								1	1								
	守山市				10								10		2	2	2	2				
	愛荘町				3								3	1	1	1						
計				14								14	2	3	3	2	2	2				
京都府	京都市	23											23	2	3	3	3	3	3	2	2	2
	京丹後市	3											3			1	1					
計	26											26	2	3	4	4	3	2	2	2	2	
大阪府	大阪市			27		4							31	3	3	3	3	3	4	4	4	4
	東大阪市						5						5		1	1	1	1				
	池田市	1			2								3			1	1	1				
	堺市				25		30						55	5	12	9	9	8	7	5		
	守口市				8								8	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	枚方市				10								10			2	2	2	2	2		
	岸和田市				5								5	1	1	1	1	1				
	豊中市				6								6	1	2	1	1	1				
	泉佐野市		13										13	1	1	3	2	2	2	2		
	箕面市				22								22	3	3	3	3	3	2	3	1	1
	富田林市				2								2		1	1						
	河内長野市				3								3		1	1	1					
	狭山市				2								2		1	1						
	摂津市			8									8		1	1	1	1	1	1	1	1
	泉南市						3						3	1	1	1						
計	1	13	35	85	4	38						176	16	29	30	26	24	20	18	7	6	



派遣元	派遣先	陸前高田市	大船渡市	釜石市	大槌町	山田町	宮古市	岩泉町	田野畑村	野田村	久慈市	一関市	計	年度別派遣状況												
														H24 (2012)	H25 (2013)	H26 (2014)	H27 (2015)	H28 (2016)	H29 (2017)	H30 (2018)	R元 (2019)	R2 (2020)				
兵庫県	神戸市	2	2										4		2	2										
	赤穂市				1								1			1										
	養父市				1								1			1										
	宝塚市				1								1	1												
	姫路市				1									1			1									
計		2	2		4								8	1	2	4	1									
奈良県	奈良市	1											1		1											
	葛城市	3											3			1	1	1								
	斑鳩町				1								1	1												
計		4			1								5	1	1	1	1	1								
和歌山県	和歌山市	8				10	5						23	3	3	5	3	5	3	1						
計		8				10	5						23	3	3	5	3	5	3	1						
島根県	松江市	8											8	2	2	1	1	1	1							
計		8											8	2	2	1	1	1	1							
岡山県	岡山市						30						30	3	8	6	6	5	2							
	倉敷市			5	6								11			1	2	2	4	2						
計				5	6		30						41	3	8	7	8	7	6	2						
広島県	東広島市				7								7	1	1	1	1	1	1	1						
計					7								7	1	1	1	1	1	1	1						
鳥取県	米子市					3	3						6				1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
計						3	3						6				1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
山口県	下関市						7						7	1	1	1	1	2	1							
	宇部市		5										5	1	1	1	1	1								
	周南市		5										5	1	1	1	1	1	1							
計		10					7						17	2	3	3	3	4	2							
香川県	高松市						2						2		1		1									
	丸亀市					2							2												1	1
計						2	2						4		1		1							1	1	
愛媛県	八幡浜市						1						1				1									
計							1						1				1									
高知県	高知市							5					5	2	2	1										
計								5					5	2	2	1										
福岡県	福岡市	24											24	3	5	5	5	3	2	1						
	北九州市			70									70	9	9	8	9	10	10	8	4	3				
	太宰府市			3									3		1	1	1									
	久留米市	1											1	1												
計		25		73									98	13	15	14	15	13	12	9	4	3				
佐賀県	武雄市	5											5	2	2	1										
	嬉野市			2									2					1	1							
計		5		2									7	2	2	1			1	1						
長崎県	新上五島町					6							6	1	1	1	1	1	1							
計						6							6	1	1	1	1	1	1							
熊本県	熊本市					1							1				1									
計						1							1				1									
大分県	大分市			11									11	2	2	2	2	2	1							
計				11									11	2	2	2	2	2	1							
宮崎県	日南市				1								1		1											
	延岡市				1								1		1											
	高原町				2								2		1				1							
	都農町				2								2	1					1							
	国富町				2								2			1										1
	諸塚村				1								1		1											
	川南町				1								1						1							
	高鍋町				1								1						1							
	新富町				1								1				1									
	三股町				1								1													1
	西米良村				3								3		1					1	1					
椎葉村				1								1													1	
計				17									17	1	4	2	1	2	2	1	3	1				1
鹿児島県	南さつま市			6	1								7	1	1	1	1	1	1	1						
	鹿屋市		4										4		1	1	1	1								
計		4	6	1									11	1	2	2	2	2	1	1						
沖縄県	沖縄市		2	5									7	1	1	1	1	1							1	1
	豊見城市				2								2	1	1											
計			2	5	2								9	2	2	1	1	1							1	1
合計		271	274	354	387	140	179	5	20	12	3	2	1,647	195	257	265	239	217	183	135	95					61

◆他都道府県からの派遣状況

※派遣状況のうち H24～H25 は 3/1 現在、H26～R 元は年度途中の派遣者及び帰任者を含む累計数、R2 は 4/1 現在。

派遣先 派遣元	陸前高田市	大船渡市	釜石市	大槌町	山田町	宮古市	岩泉町	田野畑村	野田村	久慈市	一関市	計	年度別派遣状況								
													H24 (2012)	H25 (2013)	H26 (2014)	H27 (2015)	H28 (2016)	H29 (2017)	H30 (2018)	R元 (2019)	R2 (2020)
北海道	3	3			3							9	1	1	3	2	2				
青森県									6			6	1	1	1	1	1				
千葉県		5										5	1	1	1	1					
東京都	3	23		21					18			65	14	13	10	10	10	8			
神奈川県	42	17	10	6	11	46		5				137	1	1	19	16	15	23	26	21	15
山梨県						2						2					1	1			
静岡県				11	38							49	4	7	7	6	5	5	5	5	5
三重県		1										1	1								
山口県						2						2	1	1							
香川県								3				3		1	1	1					
福岡県	1											1	1								
鹿児島県				1								1	1								
沖縄県				7								7	1	1	1	1	1	1	1		
計	49	49	10	46	52	50	0	8	24	0	0	288	27	27	43	38	35	39	33	26	20

◆合計

※派遣状況のうち H24～H25 は 3/1 現在、H26～R 元は年度途中の派遣者及び帰任者を含む累計数、R2 は 4/1 現在。

派遣先 派遣元	陸前高田市	大船渡市	釜石市	大槌町	山田町	宮古市	岩泉町	田野畑村	野田村	久慈市	一関市	計	年度別派遣状況								
													H24 (2012)	H25 (2013)	H26 (2014)	H27 (2015)	H28 (2016)	H29 (2017)	H30 (2018)	R元 (2019)	R2 (2020)
県内 市町村	179	66	77	167	28	34		14	37			602	69	56	75	75	74	70	70	63	50
県外 市町村	271	274	354	387	140	179	5	20	12	3	2	1,647	195	257	265	239	217	183	135	95	61
都道府県	49	49	10	46	52	50		8	24			288	27	27	43	38	35	39	33	26	20
計	499	389	441	600	220	263	5	42	73	3	2	2,537	291	340	383	352	326	292	238	184	131

東日本大震災津波 応援職員活動の記録

～ 応援職員と歩んだ10年～

令和3年3月発行

企画・発行／岩手県ふるさと振興部市町村課

〒020-8570 岩手県盛岡市内丸10番1号

TEL 019-651-3111（総合案内）

HP <https://www.pref.iwate.jp/>

編集・印刷／株式会社 杜陵印刷

※本書に掲載する写真・図表の転載・複製は固く禁じます。



岩手県